# 霊体はかいしゃ

森　マリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霊体はかいしゃ

【Ｎコード】
Ｎ３０７７Ｒ

【作者名】
森　マリ

【あらすじ】
厳しいご意見ご感想をお待ちしております。優しい言葉よりも、厳しい言葉をいただければ幸いです。

**A**

髪の長いその女は、英二の両手に首を掴まれたまま宙に浮かんでいる。女は青白い顔をしているが、苦しそうな表情を見せているわけでも、暴れるわけでもない。ただ、じっと英二の顔をうつろな目で見つめていた。

英二の全身からは、実態のない透明な白い糸が何十本も出ており、宙を漂っている。それらは、腕の辺りに集中して現れ、自らの意思をもつように女の体を這いながら絡みつく。

英二は女を自分の胸にそっと引き寄せた。

白い糸と同じように、女にも実態はない。透明で透けている。

女を両腕で抱きしめるように包み込むと、接している胸の部分が温かくなった。それと同時に女の考えていることが、ネジを埋め込むように、潜り込んでくる。

（私を消さないで。まだやりたいことがあるの）

（もう君は死んでいるんだよ。大丈夫だ、痛みや苦しみはないから）

（嫌よ、まだ消えたくない）

（ダメだ。君は人を傷つけてしまう可能性がある。放っておくわけにはいかない）

会話に言葉は必要ない。白い糸を通して女と心を交わす事ができた。

女をなだめるように何度も頭を撫でる。その度に、白い糸が女の体に固く絡みつき、同化していく。その姿は、蜘蛛の巣に捕らえられた昆虫のようだった。

女は見た目には抵抗していないようだったが、何度も糸を引き千切り、逃げ出そうとしていた。だが、白い糸は次々に英二の体から伸びてきて、折り重り、数本の太い縄となった。それらは、４～５本の腕のようであり、女をしっかりと捕まえて離さない。

いままで、霊体を逃がしたことなど無い。幼いころから英二は自

身の霊能力に気づき、それを使いこなしてきた。不安はないが、体が快感を求めて焦る。
女と体が重なり合い、一体化していく。足が完全に重なると、英二の腰から、男女二人の上半身が出ているような状態になった。英二は、埃だらけの床に膝をついた。膝を床に着くと、鈍い音が響いた。体の自由が効かなくなるほどの快感が襲ってくる。全身の筋肉が震えるように痙攣をおこし、体の自由が利かない。
窓から月明かりが差し込んでおり、英二は左半身に光を浴び、右側に影を作った。月明かりは女の体に当たることは無く、女の影はできない。
月明かりは、舞い上がった数えきれない埃の一つ一つに当たり、幻想的に映し出している。スノードームの中に居るようだった。
月明かりを取り込む窓の所々に、拳ほどの穴が開いていた。誰かが外から石か何かを投げたのだろう。部屋の中にはガラス片がいくつも転がっており、光を受けて鋭く輝いている。
女の体が英二の中に消えて行く。腰が完全に重なる。それから、腕が吸い込まれるように一体化した。ついには女の頭だけが、彼の胸から出ているだけとなった。
女は、目と口を大きく開けて、小さく喘いだ。表情からは苦しみとも、快楽ともみてとれた。
英二も、喉の奥の方から苦しそうな声を漏らした。女が体の体中に入っていくたびに、快感への期待が膨らんでいく。
英二は左手で右の、右手で左手の二の腕のあたりの服を掴んだ。全身に鳥肌が立ち、筋肉が硬直するのがわかった。腹の奥底から声にならぬ唸りを漏らし、膝をついたまま顎を天井に突き出すように上げ、背を反った。
女の顔も、ついには英二の中へ消えていった。
女は、体の中で徐々に破壊されていく。魂が体内でチーズのように裂けて行く度に、英二の口から透明で実態のないビー玉くらいの大きさの霊魂がいくつも飛び出す。それらは破壊された女の霊体の一

部だ。破壊された霊体はバラバラに分解されて小さな魂と成り、口から出て行く。
霊体の姿は生前の形を留めている。その状態は、それぞれ念の強さによって、人に影響を及ぼす事がある。だが、破壊されてバラバラになり魂へと変化すると、もう霊体としての力は無くなる。時が経つにつれて人の形をした霊体は自然と分解され、いくつもの小さな魂となる。最後には宙に消えてなくなる。
だが、霊体が魂へと分解されるには多くの時間を要する。英二はそれを数分で可能にする能力を持っていた。

英二が女の霊体を見つけたのは、この土地に戻ってきて数週間後の事だった。この土地は英二が生まれてから中学生の頃までを過ごした土地だ。英二は、この街を大学の進学先に選んだ。三年間離れただけだというのに街は大きく変わっていた。小中と学校の帰りに買い食いをした商店街には人が減り、シャッターが増えていた。代わりに大型ショッピングセンターが街の中心に建ち、街のシンボルだといわんばかりに大きな顔をしている。親しんだ商店街は簡単に捨て去られ、人々は言い合せたようにショッピングセンターに集まっていた。
そのショッピングセンターで英二は女の霊体を見つけた。女が危険で人に害を及ぼすことは見てすぐに分かった。女の霊体は自分と波長の合う人間を選ぶように浮遊していた。女の顔は憎悪と苦しみと悲しみで満ちていた。こういった感情に満たされている霊体は人に危害を加えるということを英二は経験から知っていた。
彼は負のエネルギーが強い霊体を選んで破壊する。怨念が強ければ強いほど、霊体が体中で破壊される瞬間に大きな快感を生むからだ。
今、英二の中で破壊されようとしている霊体は、いままでにないほどに強い怨念を抱いている。この霊体は、既に何人かの人間に取り憑いて操り、自殺に追い込んでいるだろうと彼は思った。だが、

この霊体が人を殺していても殺していなくても、快感を与えてくれるのであれば英二にとってはどちらでもよかった。もちろん取り殺された人間がいるなら同情もするし、これ以上犠牲者を出さない方がいいことは英二もわかっている。

彼は、人に悪影響を及ぼす霊体の破壊行為は正義だと思っている。彼には自分が正しい事をしているという強い自負があった。だから彼は、霊体を破壊した後に感じる強い快感は、その対価として受けることができる報酬だと思っている。

胃の中で食べ物が消化されるように、女は英二の体の中で抵抗する度にバラバラになっていく。彼は女が完全に破壊される瞬間を待っていた。そしてその次に訪れる全身を襲う快感を、彼は心待ちにしていた。

霊体を破壊することは性行為にも似ていた。徐々に快感が高まり、霊体が破壊された瞬間に快楽は頂点へと達する。

霊体も破壊される瞬間は怨念が解き放たれて、この世への執着を断つ事ができる。それは霊体にとっても永遠の自由を意味した。

（ねぇ、どうしてみんな私を責めるの？　私は被害者なのよ）

女の霊体が、英二の体内で急にそんなことを言いだした。英二には彼女の言っている意味が分からなかった。

もしかしたら、生前の話をしているのかもしれないと彼は思った。

（君は悪くない。何も悪くないよ。でもね、君は死んで強い力を得てしまった。もしかしたら、知らぬ間に誰かに危害を与えるかもしれない。だから、こうするしかないんだ）

彼は、女の話に適当に合わせながら、大人しく破壊されるようにと諭した。

（私は、汚されたのよ。汚い女よ）

（汚くなんてないさ、君は綺麗な心をしている。現にこうやって俺が君を抱きしめているじゃないか。俺は、君を求めているんだ。さ

ぁ、今破壊してあげるからね）
英二がそう言うと、急に女は大人しくなった気がした。だが、妙な違和感を彼は覚えた。
今まで霊体を破壊することに失敗などした事はない。だから、今日も同じようにやっていれば霊体を破壊できると思っていた。だが、その女の霊体は何かが違っていた。
英二の体内に引き込まれた女の霊体は、急に自分から彼の体の奥の方へと潜り込んできた。普通なら、霊体は体内に入ると激しく抵抗し、外へ出ようと試みるものだ。外に出ようと必死に反抗する霊体を、体の奥底へ引きずり込もうとすることで引き裂き、破壊するのが英二のやり方だ。霊体が抵抗することで英二は自然と霊体を破壊する事ができていた。
だが、女の霊体は自らの意思で精神の奥へ奥へと入り込んでくる。彼は女の霊体の不可解な行動に戸惑っていた。どうすればいいのか分からなかった。
（なぜ抵抗しない？）
（嬉しいの。ずっとそう言って欲しかった。もっと激しく私の体を抱いて欲しい。あなたの綺麗な心に触れていると、私の汚れた魂も浄化していくような気がする）
英二は女の体を破壊しなければと頭ではわかっていても、抵抗しない霊体に対してその方法がわからない。
英二は自分の心臓が異常に早く脈打っている事に気付いた。女が自分の体を操り、そうさせているのではないかと英二は思った。体が操られている。そんな想像が彼の不安を煽る。
彼は自分自身の頭が混乱しているのが分かったが、どうやって冷静さを保てばいいのか分からなかった。
（私と、一つになろうよ）
（やめてくれ！　出て行ってくれ。これ以上俺の体に入り込まないでくれ）
英二が叫んだのとほぼ同時に、女が英二の胸の辺りから顔を出し

た。彼自身が女の霊体を外へ押し出したのだ。女はゆっくりと英二の体から出て行った。
英二は部屋の角に倒れ込み、うずくまって頭を抱えている。
彼は女の顔を見る事ができない。恐ろしい表情をしていることは容易に想像する事ができた。
殺されてしまうのかもしれない。この霊体は今までの霊体とは比べ物にならないぐらい恐ろしいものなのかもしれない。そう思い、彼は震えた。
英二の首元に指が滑りこみ、強い力で絞めた。「ひゅ」という空気の音が英二の喉を鳴らした。女に首を絞められたと思い、彼は目を見開く。悲しそうに目を細めた女の顔が、英二の目の前にあった。
（一人は怖いのよ。私に触れてよ！　ねぇ、私は悪くないんでしょ？　汚くないんでしょ？）
女の言葉は頭の中に入り込み、後頭部にシコリのようなに長い間嫌な感覚を残していた。
「やめてくれ、離してくれ」
悲しそうな顔をした女に、英二は声をあげて叫び懇願した。まさか霊体に命乞いするなど彼は考えもしなかった。呼吸が苦しくなり、彼の意識は朦朧とし始める。恐怖と苦しみから彼は強く目を閉じた。英二の意識が部屋の隅の方へと消えていこうとしたとき、ある映像が彼の中に流れ込んできた。女が複数の男に羽交い絞めにされている。車内のようだ。二つの座席、フロントガラスが見える。女は必死に抵抗するが、男たちは女の腹や顔を殴りつけた。男たちの不敵な笑い声が頭の中に響く。女はそのまま、男達に弄ばれた。だが、次に頭に流れた映像では、その中の一人の男が口から力なく舌を出して、目を見開いて死んでいた。首元に男自身の両手の指がめり込んでおり、自分で首を絞めたように見える。まだ若い男だ。夜なのか薄暗くて場所はわからない。ただ、さっきまで映っていた車内とは違っていた。
その映像が、今の自分の姿と重なり、深淵の恐怖が英二を襲う。自

分もこの女の霊体に殺されるのだと思った。
次の瞬間、殴打されたような痛みが頭に響き、彼は気を失った。

英二が目を覚ますと、首元に自分の両手があり、首を優しく絞めていた。英二は女の霊体に操られ、自分で自分の首を絞めていたのだと気づいた。彼は生まれて初めて霊体を逃がしてしまった事にショックを受けていた。そして、恐怖から失禁をしてしまった自分に彼は失望していた。

最後に見た映像は、あの女の霊体が殺した男だろう。おそらく女の霊体は自分をレイプした男に取り憑いて殺したのだ。女は簡単に人を操る力がある。
あの女を野放しにしておけば、他の誰かが殺されるかもしれないと英二は思った。関係ない人間も無差別に操り、死に追いやる可能性もある。

英二は力のない足で立ち上がり、辺りを見渡した。女の霊体が近くに居ないかどうかを確認していた。
英二が居るこの場所は、もう何年も使われていない廃診療所だ。彼は、高校進学と共にこの街を離れる前から、ここで霊体と交わり、破壊行為を続けていた。
この廃診療所に住んでいた医師の一家は突然蒸発してしまったらしく、幽霊屋敷として地元では有名だった。

英二は廃診療所の二階の一室で破壊行為を行う。どうやら子供部屋のようだ。彼が居た部屋は子供部屋のようだった。埃を被った勉強机と、倒れた箪笥がある。壁には肝試しに来た者が書いたのか、スプレーで文字や絵が落書きされている。
二階には、この部屋の他にトイレと二つの部屋がある。一通り、二階を見渡したが霊体は居なかった。
腐りかけた階段を英二は慎重に一段一段を降りながら、女の霊体を逃がしてしまったという後悔の念を深めていた。女はさらに怨念を深め、人を襲うかもしれない。

一階は食器棚が倒れ、皿などの食器が散乱している。花が活けられていたはずの細長く青い花瓶は、下の方が割れて床に転がっている。誰かがここに肝試しに来たときに置いていったのか、最近のものだと思われるペットボトルが投げ捨ててあった。

診療のための部屋があった。広々としている。破れたカーテンから光が漏れている。診療に使われていた二つのベッドが倒れている。英二の足元には予防注射を促すポスター落ちていた。女の霊体の姿は無い。英二は、あの女の霊体を恐れていたはずなのに、無意識のうちに女を探していた。

英二は頭を抱え、床に腰をおろした。彼が「クソッ」と小さく声を漏らして床を叩くと、鈍い音が部屋に響いた。

女の霊体は真新しい家の階段をゆらゆらと登っていた。行くあてなどなかった。自分のことを受け入れてくれる生きた人間を女は探していた。

女の霊体は自分が死んでいる事も、死んでから手に入れた能力も理解していた。今の自分なら何でもできると女の霊体は思っていた。

ただ、女の霊体はその深い寂しさを埋める事ができない。ほとんどの人間は女の存在にすら気づくことはなかった。霊を見る能力を持つ者でも女の霊体の姿を見ると恐怖し、逃げてしまうのが常だった。

女の霊体は、自分を受け入れてくる人間がいないこの世界に絶望していた。

女の霊体は、この家に入り込んだ時から、自分を受け入れてくれる人間が居る可能性があることに気づいていた。たまたま入り込んだ家だったが、人間が放つ強い霊力を感じたのだ。いままでにない強い霊力を持つ人間だ。

この家は長く緩やかな坂の上の方にあり、庭からは街の様子を見渡す事ができた。まだ家は真新しかった。

近くには古い家が立ち並んでいたために余計にそう感じる。坂の下

には心霊スポットとして、地元で有名な廃診療所があった。
女の霊体この真新しい家の二階に上がり、一番奥にある角部屋のドアの前に立っていた。部屋の中からすすり泣くような声が聞こえる。女は扉をすり抜け、部屋の中に顔だけを覗かせた。この家の一階はゴミ一つなかったというのに、その部屋だけは衣服が散乱し、所々に埃がたまっていた。
ドアの向こう側は、家の様子から想像できない別世界のようだった。部屋の端にある机に顔を伏して、女の子が泣いていた。背中の真ん中あたりまで伸びた艶やかな髪を震える肩が揺らしていた。女の霊体は、泣いているその子に近づく。座っているが背が高いのがわかる。
女の霊体は床に散乱する衣服やゴミの山を避けるように宙に飛びあがり、泣いている女の子の側まで近寄る。女の霊体は、その美しい髪に触れてみたいと思った。そっと手を差し伸べるが、実態のない女の霊体の手はその子の髪に触れることができない。だが、泣いていた女の子がフッと何かに気づいたように顔を上げた。
長い髪を揺らしながら、その子は辺りを見渡した。女の子の顔は涙で濡れていた。目は赤くはれている。だが、その子が美しい顔をしているのはわかった。
女の霊体はこの家に入った時から、家の中にいる人物の誰かが霊能力を持っていると感じていた。それが目の前の泣いている女の子だ。
泣いていた女の子は、霊体である女に気付いたのか、充血した目を大きく見開き、ハッ小さくと息を吸った。
（私の事見える？）
女の霊体は、その子の心に問いかける。すると反応があった。
（見えるわよ……）
霊体である女の問いに反応するということは、その子に強い霊感があるということだった。霊体を見慣れているのか、他の人より女の子に驚いたような様子はなかった。

（あなたの名前は？）
（私は……美奈よ）
（美奈、あなたはなぜ泣いているの？）
（死にたいの。あなた私を殺せる？）
美奈は目に大粒の涙を目に貯めながらそう言いったので、霊体の女は驚いた。
（分からないわ。でも私は憑いた人間を操ることができるわ。だから私はあなたを操って自殺に追い込むことはできるかもしれないけど）
（じゃあ、私を操って殺して。どんな殺し方だっていいの。汚いこの体から魂を解き放ちたいの）
（できるかもしれないけど、怨みも無いあなたを殺したくはないわ）
女の霊体は、美奈を殺せば孤独から抜け出せるような気がした。美奈が霊体になれば一緒に苦しみを共有することができるかもしれないとフッと思った。
だが、女は目の前の美奈を殺したくはなかった。死んで霊になった今でも人を思いやる心を女の霊体は失っていなかった。
女は実態のない手で美奈の綺麗な髪と白く透き通った頬に触れる。女の霊体は、なぜか美奈を愛おしく感じた。同じ苦しみと寂しさを背負っているのではないかと思えたからだ。
（私はこんな汚い体では生きていけない。この体が腐敗していくことを私は望んでいるの）
（何があったの、私に話してみて。美奈の力になれるかもしれない。私があなたを助けてあげる）
女の霊体がそう心に語りかけると、美奈はポツリポツリと話し始めた。女の霊体は美奈の話が進むにつれて、深い悲しみと怒りが胸の奥から込み上げてくるのが分かった。この子のために何かをしてあげたいと、女の霊体は心から思った。
大学の校内は新入生の期待に満ちた笑い声で溢れかえっていた。

昼休みになると校内は一気に賑やかになり、学生たちは食堂へ波のように押し寄せる。校内には三つの異なる食堂があったが、どこも学生でごったがえしている。
食堂の方には見向きもせず、英二は考え事をしながら校内を歩いていた。考えていたのは数日前に逃してしまった女の霊体の事だった。あの女の霊体は、霊能力を持つ英二ですら操ることができるほどの強い力を持っていた。もうすでに何人かに取り憑いて操り、死に追いやっている可能性は大いにある。
英二は自分が霊体を逃したせいで、今も誰かの命を狙っているかもしれない。そう思うと彼の中に罪悪感が生まれる。
だが、彼が自分自身を歯がゆいと感じているのはそれだけが理由では無い。あの霊体を破壊することができれば、今まで感じたことのない快楽を得ることができたかもしれなかった。英二はあの霊体を破壊しようとして、逆に殺されかけたことなど忘れてしまっていた。あの霊体を破壊する瞬間に、体内でどんな爆破が起きるのかという好奇心が恐怖心を覆い隠してしまった。
やはり昨日、破壊しておくべきだったと、英二は悔やんだ。あの霊体をもう一度見つけ出すのは難しい。霊体が人の中に入り込んでしまうと、英二は霊体の存在を感じ取る事ができなくなってしまう。
もし、すでに誰かに憑いてしまっているなら、二度とあの女の霊体に触れることができないだろう。彼はそう思い、自分自身を責めた。

大学内にある本屋の前には、期間限定で特設された教科書販売所ができている。新学期になると新しい講義が始まるため、学生たちは教科書を買わなければならない。新入生も同様に、教科書を揃える必要がある。英二も教科書を買うために、人だかりのできた教科書販売所の前に来ていた。
特設された教科書販売所は、学生たちが集まって弁当を食べたり、勉強したり、くだらない会話を交わすために設けられたスペースに

作られた。いつもなら丸テーブルとそれを囲うように置かれた椅子がある。だが、テーブルや椅子はどこかに片づけられ、本を置くために組み立て式の棚がいくつも並び、そこを長方形のテーブルで囲って販売スペースは作られている。

教科書の購入方法は、まず自分が買いたい本を用紙に記入し、それを店員に提出する。用紙に書かれた教科書を確認し、店員が棚から本を探して、すべて揃った時点で名前を呼ばれる。それから、やっとレジへ向かい本を買う事ができる。

買う本が多い場合はあらかじめ用紙を提出し、そのまま講義を受けてから、本を買いに戻って来る方がいい。英二もその方法で、あらかじめ必要な教材を記入した用紙を提出していた。

「すみません、朝に用紙を提出していた三枚堂ですが、もう本は揃っていますか？」

英二が店員に話しかけると「あっ、はいはい。できていますよ。ご用意しますので少々お待ちください」と鬱陶しそうに返事をした。

忙しいのもわかるが、接客業なのだし、もうすこし愛想が良くしてもいいのではないかと、一度も笑顔を見せなかった女性従業員に英二は言ってやりたかった。

彼は、本の購入のために群がっている学生たちの中に混じって、「三枚堂」という名字を呼ばれるのを待った。彼は先ほどの無愛想な店員の様子を観察する。レジを打っていた店員になにかを話しかけていた。自分が受け取る教科書の話をしているのだと英二は思った。

壁にもたれかかっていた彼は、妙な目線に気づき、フッと左の方を見た。髪の短い女がこちらを見ている。女の大きく澄んだ目と視線がぶつかり、彼はその場で固まった。英二は、彼女の方から目線をそらせない。見えない二つの手で、無理やりに首を左に向かせられて、そのまま固定するために首にくぎを打たれた。そのために、

英二は彼女から目が離せなくなる。
「三枚堂さん」
店員の声が辺りに響く。英二の首を押さえていた呪縛がその瞬間に消えた。彼は女から目線を外し、レジの方へと歩き出した。どこかで会ったような気がするが、英二はその女のことを思いだせない。もしかしたら中学校が同じだったかもしれないと思ったが、記憶のページを捲っても彼女の顔は見当たらない。
英二は、折りたたみ式の机の上にレジスターを置いただけの会計で本を受け取り、お金を清算した。友人の分と、自分の分の教科書を注文していたために、二十三冊もの教科書を受け取らなければならなかった。
英二は教科書の入った紙袋をさげて、もう一度女性が居た場所にまで戻った。彼は辺りを見渡し女の姿を探したが、姿はなかった。
女の表情は明らかに知り合いを見る目だった。女は、自分のことを気付いてくれといわんばかりの目で、彼に訴えかけてきた。英二はそれをわかっていたが、結局彼の記憶の中に女の顔と該当する者はいなかった。
彼は女顔を思い浮かべながら、教科書販売所を離れて建物の外に出た。
「ねぇ、ちょっと待って！」
外に出てすぐに後ろから声がした。先ほどの女が笑顔で英二の顔を見上げている。子供のようなその純真無垢な笑顔は、英二の胸を強く圧迫した。女は美人ではないし、肌にはいくつかの吹き出物が顔を出していた。
だが、化粧は薄く、無理に自分の欠点を隠そうとしていない。だからこそ女の欠点が英二には愛らしく見えた。目は大きくハッキリとした印象をしている、鼻は小さい、唇は薄く綺麗な桜色をしていた。それらのパーツは、丸い顔にバランスよく並んでいる。
英二は一瞬にして女に見とれてしまった。言葉が詰まり、上手く発する事ができない。

「ど、どこかであったかな？」
「私の事覚えていない？」
「あぁ、覚えてないよ」
女は英二が自分の事を覚えていなかったことにさして落胆しているようにも見えなかった。相変わらず、ニコニコと笑顔で英二を見ていた。
「私、ナオミっていうの。垂直の直に海水の海で直海よ。あなたは三枚堂くんでしょ？　よろしく」
直海は自分の事を覚えていないのかと言う割には、あたかも初めて会った者同士が挨拶を交わすような形式の言葉を発した。
「あの、俺はさぁ……」
英二がそう言いかけた時、英二のズボンのポケットの中で携帯が震えた。直海のある勘違いを訂正したかったが、携帯の着信が邪魔をする。
携帯の液晶画面に達也の名前が現れた。英二が携帯に出ると、達也の声が携帯から聞こえた。
『教科書取ってきてくれたか？』
「取って来たよ」
『じゃあ、コンビニでお前の分の飯を買って行くからいつもの所で』
達也がそう言った後すぐに通話が切れた。
その時、直海が英二の携帯をさっと奪い取った。
「あっちょっと、なにするんだ」
直海は英二の携帯をニヤニヤとしながらいじっている。英二は直海の手から携帯を奪い返そうと思ったが、直海の手に触れてしまうことが、いけないことのような気がしてできなかった。女は、右手に英二の携帯、左手に女自身のピンクの携帯電話を持っている。英二の携帯を女が操作すると、右手に握られている携帯が震えた。
「これ、私の番号だから登録しといて。あっ、でも電話は私からかけるから、三枚堂くんは私の携帯に電話かけないでね」
直海は英二の手に携帯を戻し、「じゃあ」といって小さく手を振

って英二から離れて行った。初め、女がなんのために自分の携帯を操作したのか、彼には分からなかったが。英二の携帯を操作し、女自身の携帯に連絡することによって、お互いが電話番号を知ることができる。
英二は直海が自分に笑顔を向けている間、ずっと夢の中にいるようだったし、直海が去ってからもそれは変わらなかった。
背を向けて英二から離れて行く直海の背中は、食堂へ向かう学生たちの波の中に消えて行った。

昼休みの食堂は腹をすかせた学生たちでごったがえしている。それが嫌で、英二は昼休みを人気のない二号館で過ごした。二号館は教授の研究室がある建物で、学生たちはほとんど近寄らない。エレベーターで行けるのは九階までで、そこからさらに階段で登っていくと、展望台のような場所があった。ガラス張りで三百六十度、街を見渡す事ができる。遠くの方に青い海が見える。海は快晴の空と同化し、境界線は曖昧になっている。海とは反対側に、街を見下ろす山が見える。建物が立ち並ぶ街の真ん中を、大きな川が横切っている。大蛇のようにうねるその川は、眩しく太陽を反射させる海に続いていた。
英二は静かなその場所で街を眺め、校内の様子を観察するのが好きだった。虫のように小さく見える学生たちの姿を見ながら英二は煙草をふかした。窓を開け、肘をついた格好をしている。煙草の煙は彼の肺を満たしたあと、鼻から優しく抜けていった。
「よう英二、飯を買ってきてやったぞ」
階段の方から声が聞こえた。階段をあがってきたのは達也だった。英二とは中学からの友人だ。英二は高校に進学するのと同時にこの土地から引っ越したために、達也との関係は一時途切れたが、地元に戻ってきて同じ大学に進学したことで友人関係は回復した。
英二は二枚の五百円玉を達也に投げて「サンキュ」と言った。
「釣りはいらねぇよな」

「あぁ、いいよ。取っとけよ」
「ところで英二、教科書は取ってきてくれたか？」
「わざわざ俺に取りに行かせるなよな」
そう言って英二は自分の分の教科書を三冊、紙袋から取り出して、残りを袋ごと達也に渡した。
「しかたないだろ。彼女がまた癇癪おこしちまってさ、大変だったんだ。男は女を抱くために生きているのにさ、いちいち浮気したくらいで喚かれるのは疲れるぜ」
そう言って達也はため息をつき「ってか、わざわざって言うけど、俺と一緒にお前の分の教科書頼んでいたんだからいいだろ？」と続けた。
「もちろん釣りはいらないよな」
「いや、教科書代の釣りは千円以上あったはずだ。それは見逃せないな」
英二は「チッ」とわざとらしく舌打ちをしてポケットから千五百円を取り出して渡した。
英二は達也からコンビニの袋を受け取ると、中に入っていた赤いマールボロを取り出しジャケットの胸ポケットに差し込んだ。そのほかにはサンドイッチと明太子御握りが入っている。
二人は、御握りを頬張りながら校内を歩く学生を見ていた。この高く見晴らしのいい場所は、自分達が偉くなったのではないかという錯覚を起こさせる。
「なぁ達也。直海って女を知っているか？　お前知り合いじゃないか？」
「どのナオミだ？　いちいち俺が女を覚えていると思うか？」
「さっき、本屋で声をかけられたんだ”三枚堂くんだよね”ってなぐあいで。どうして俺をお前だって勘違いしたんだろうな」
達也は興味なさそうに「しらねぇ」とだけ言うと、煙草に火をつけた。
三枚堂は達也の名字だった。達也は女好きで、派手な格好をして

いる。達也は明るい茶髪に派手な洋服を着ている。黒い服を好んで着る英二とは対照的だったし、顔だってそんなには似ていない。だから、何故勘違いされたのか英二にはわからなかった。
直海に声をかけられた時、英二はすぐに三枚堂ではないと否定する事ができなかった。いや、否定したくなかったのだ。理由は分からないが、もし否定してしまえば、直海は自分への興味を捨て去ってしまうのではないかと思ったからだ。直海という女は、三枚堂に興味なり用事なりがあり声をかけてきたに違いない。自分を三枚堂だと勘違いしたからこそ、話しかけてもらえたのだと英二は思っていた。
だが、それらが否定をしなかった大きな理由では無い。直海に声をかけられた時、英二が見ていた世界は一瞬にして色を失い、直海の姿だけが色濃くなった。英二は直海に触れたいと強く思った。心は冷静だったが、魂は直海を求めて熱くなり、そして膨張し続けている気がした。直海の存在が、肺を窮屈にし、喉を詰まらせた。英二は、二つ三つの言葉を出すことで精一杯だった。

「そういえば美奈は元気なのか？」
午後の講義に向かうため二号館を出たところで英二は達也に聞いた。
「しらねぇな。俺は高校別だったし。会いに行ってみればいいじゃないか。引っ越して以来会ってないんだろ？」
「いいのかな、俺が会いに行っても」
「だから、しらねぇよ。自分の頭で考えな。じゃあ、俺はあっちだ」
そう言って達也は、2号館の隣の3号館の方へと向かって歩いていった。
英二は時計を見た。まだ次の講義まで五分ほどあったので彼は胸ポケットの煙草を取り出し、火をつけた。
英二は美奈の事を考えていた。彼は中学を卒業と同時に親の仕事の都合で、この土地を離れた。その時に、英二は付き合っていた美

奈に一方的に別れを告げたのだった。
別れを告げた時、美奈は何時間も泣き続けていた。その美奈の顔は英二の心の隅にこびり付いて剥がれなかった。
美奈は遠距離でも関係は続けようと言ってきたが、英二はそれを断った。それが美奈のためになると思ったのだ。もう会う事も出来ないかもしれないのに、自分との関係を無理に続けさせることを英二はしたくなかったのだ。それに、彼女を守らなければならないという責任を、英二は自分に課したくはなかった。
大学の進学のためにこの土地に戻ってきて以来、英二はずっと美奈の事を考えていた。一度家の近くまで行ったが、いまさら会いに行くことが身勝手なことのようで英二は罪悪感を抱き、彼女の家には行けなかった。
美奈にはすでに新しい彼氏ができているかもしれない。自分が戻って来た事を知らせることが、彼女を困惑させることになるかもしれない。そう思うと英二は美奈に会いに行けなかった。
英二にとって、美奈は霊能力の悩みを共有できる唯一の人物でもあった。彼女も、同じように霊能力者だった。
お互い、周りから理解されない能力を持っていたことで、悩み苦しんでいた。だからこそ、お互いが依存を深めていた。その状態も、英二は良くないと思っていた。支え合うことは悪いことではない。
だが、美奈は英二以外の人間と関係が薄くなっていたし、彼も美奈以外の人間との関わりが薄くなっていた。
美奈は霊能力者であるという秘密を共有できることで、居心地のいい英二と一緒に居る時間が長くなった。その一方で、他の友人との関係をないがしろにしていたのを、彼は気にしていた。そして、彼女の自分への依存が深まっていくことを、彼は重荷にも感じていた。
高校進学時に、この土地に一人で残るという選択肢が無かったわけではない。英二は家族からどことなく浮いていたし、どこか邪魔者扱いされているような気がしていた。実際に、彼は両親からこの土地に残ってもいいと言われていた。だが、英二はそうしなかった。

新しい土地で、新しい人と出会いたいという期待があった。彼は狭い世界で生きて居たくなかった。

英二は美奈の事を考えながら、肺から押し出された煙が宙に拡散していくのを見ていた。

白い煙の向こう側に図書館の三階の窓が見える。図書館の三階は貸出禁止の書庫だ。三階に行くためには簡単ではあるが手続きをしなければならないため、用事が無ければ誰もそこへは行かない。

だが、三階の窓に人影が動くのを英二は見逃さなかった。

英二は一度だけ図書館の三階に行ったことがあった。理由は特になく、入学してすぐに達也と再会し、学校の中を探検する目的でそこへ立ち寄った。図書館の一階と二階には学生が本を読むためや、勉強ができるようにといくつもの机と椅子が設置してあるが、三階は本棚で埋め尽くされている。窓も一、二階よりも少ない。人が寄りつきにくい重苦しく薄暗い雰囲気だったことを英二は覚えていた。

そこに人影が見えたのだ。一瞬だったが女の顔が窓を横切ったのだ。英二はその女を見た瞬間に走り出していた。

図書館に着くと一気に三階までのぼった。本来はカウンターで用紙に名前を記入して学生証を提出しなければならない。だが、英二はまっすぐに階段へと向かった。二階から三階にあがる途中の踊り場に、アートボードが置いてあり、『三階へ行くにはまず、受付で学生証の提示と、用紙に名前と学籍番号を記入し、手続きを済ませる必要があります』とかかれた看板が掛けてあった。英二はそれを無視してアートボードの横をすり抜けた。

三階に着くとさっきほど、女が見えた窓の所まで行き、辺りを見渡した。窓からはさっきまで英二が煙草を吸っていた場所が見える。

霊の匂いを感じる。霊体が居た場所には生き物の毛を焼いたような嫌な匂いが滞留する。英二にしか感じ取ることのできない独特の匂いだ。匂いは尾を引くように霊体が通った後を知らせてくれる。

時間が経てばその匂いも薄れてしまうが、ここに滞留している霊体の匂いは、まだ新しいものだとわかる。
霊体が残した匂いからは、その霊体が強いか弱いかしか判別できない。だが、この空間に居る霊体は深い恨みに縛られて、この世に執着しているのだけはわかった。
ここに居る霊体を破壊したい。どんな快楽をもたらしてくれるのかを想像すると、彼の全身に鳥肌が立った。それが卑しいことであるような気がして、英二は「快楽のためだけではない、霊体は人に危害を加えるのだから破壊しなければならないのだ」と自分に言い聞かせてみた。
英二は大きく息を吸って、小さく三度に分けて吐いた。三度目は深く、そしてゆっくりと息を吐いた。獲物が近くにいることに英二は興奮していた。いつもそうだった。強い霊体を見つけると、破壊したいという強い衝動に彼は駆られる。
英二は、ここにいる霊体が数日前に逃した女の霊体かもしれないと思った。あの女の霊体は、自ら英二の中へと入り込んで来ようとしていた。今までにそのような霊体がいなかったために、英二は恐怖に駆られ、霊体を体から追い出してしまった。だが英二はそれを酷く後悔していた。もっと冷静になって対処していれば、あの女の霊体を破壊できただろうし、極上の快楽を得ることが出来ていたかもしれない。
もう一度あの女の霊体を、自分の中に入れたい。そして、引き裂いてやりたい。
英二は本棚が立ち並ぶこの空間のどこかにあの女の霊体が居る事を想像して興奮した。毛が逆立つように全身から透明な白い糸が宙に伸びた。
白い糸は掌から始まり、腕の辺りに多く現れて、まるで英二に羽が生えたようだった。その糸は彼にしか見えない。
英二は匂いを追って棚の間を覗き込みながら歩いた。徐々に匂いが強くなっていく。彼は上唇を舐めて濡らした。鼻息が荒くなるの

がわかって、立ち止まって彼は呼吸を整えた。
中国の歴史書が並ぶ棚の向こう側に、女の霊体の姿があるのが見えた。彼は本の上にできた隙間から向こう側の様子をうかがった。
そして彼は本棚にあった本を手前の床に落とした。向こう側に並べられている本は押し出した。いくつかの本が床に落ち、ページが開き、鳥が羽をはばたかせるような音をたてた。
英二は本が無くなったスペースから手を差し込み、棚の反対側にいる女の霊体に腕から伸びる糸を絡みつける。あっさりと女の体は英二の糸に掴まれた。英二が腕を引くと、実態のない女の体は棚をすり抜けて胸元へと引き寄せられた。数日前に破壊することのできなかった女ではなかった。
だが、英二の興奮は持続し続けていた。女の体を抱くような形で密着させ、全身から伸びる白い糸を絡みつけた。女は激しく抵抗した。それは精神の戦いであった。生物同士が食うか食われるかという争いをしているようでもあった。彼の全身の血液は逆流し、心臓が悲鳴をあげる。
女は英二から伸びる糸を何度も引き千切った。霊体が持つ念が強ければ強いほど、英二はてこずる。この女も数日前に逃した女と同じくらい強力な念を持っているのが英二にはわかった。数日間で、二体もの強い霊体に会えたことに英二は幸福を感じた。数日前に逃した女と同じくらい、この女が自分に快楽をくれるのではないかと彼は期待していた。
女は必死に逃げようとして、英二の糸を引き千切り、彼は突き飛ばされて転んだ。実際に霊体には実態が無いため、身体には触れていないのだが、人の精神に入り込むことで触ったと錯覚させることができる。錯覚させることで押されていないのに、体が押されたという感覚に襲われ、バランスを崩して彼は転んでしまった。頭ではわかっていても、英二はそれを防ぐすべを知らない。
英二は転んだ拍子に本棚に頭をぶつけて、一瞬目の前が真っ白に

なった。だが痛みは感じなかった。痛みよりも女の霊体を破壊したいという欲望と興奮が勝ったのだ。英二はすぐに立ち上がり本棚をすり抜けて逃げる女を追った。

女は霊体の独特の匂いを残しながら英二から逃げて行く。実態の無い霊体にとっては本棚の障害など関係は無かった。

英二の腕は白い糸が重なり合って羽のように見え、女を追いながら走る英二の姿は獲物を追う猛禽類のようだった。彼は、霊体よりも早いスピードで走り、すぐに女の姿を見つけた。英二は大きく股を広げて走り、飛ぶように女に近づいた。ついには女の体を、英二の白い糸でできた二つの羽が捕らえる。

英二の羽は、女の体を覆い尽くし、今度は確実にその体を自分の胸の中へと引きずり込んでいった。英二の体内に入っても女は抵抗し続けた。

英二は息苦しくなり、その場に座り込む。同時に全身の鳥肌が立ち、彼の体が快楽を告げる。女が体の中で破壊されていくのがわかった。女が英二の中で手足を動かせば動かすほどその体は引き裂かれ、破壊へと近づいていった。

女が崩れて行くにつれて英二の体は熱くなり、呼吸が速くなった。鼻から入って来る酸素では足りず、大きく口を開けて呼吸する。彼は倒れ込むように横になり、顔を床に着けて、何度も擦りつけるように動いた。苦しみと快楽の交差が英二を虜にしていた。

女の生前の記憶が英二の中に流れ込んでくる。桶に水をためるように、徐々に英二の頭の中が女の記憶で満たされていく。女は薬物中毒によって死んだようだ。違法な薬を止められず、服用量が増えていったのが原因だった。

英二は、その死が自業自得に思えた。バカな女だと思った。だが、女は生前の孤独から、薬に手を出したようだと知ったとき、彼は女に同情した。会社の上司と不倫し、子供が出来た。女は上司から子供は認知しないと言われた。どうせ、いろんな男に股を開いているのだろうとも言われた。だが、女は本当に上司の男性を愛していた。

女は子供を産むことを決意したが、両親からは強く反対された。女は両親の反対も押し切ろうとした。だが、結果は流産。さらに、会社からは解雇された。上司が、女を解雇するために、手まわしをしたことぐらい彼女にも分かった。

女は短い期間で多くのものを失った。薬に溺れたのはそのすぐ後だった。

英二は女を哀れに思った。次第に抵抗力を失ったその霊体を優しく彼は引き裂いていく。女の体は、英二の中で簡単に壊れ始め、人間の形から、魂の光へと変化した。

英二の口からは、女が破壊された後の残骸がこぼれおちる。ビー玉くらいの大きさの魂だ。霊体は破壊されると小さな魂へと分解されて、やがて煙草の煙のように宙に消えて行く。英二はその美しい魂を見るのが好きだった。

女の体が完全に彼の体内で破壊された瞬間、快楽は絶頂を迎える。英二は「あぁ」というため息のような声を漏らした。その後に、大きく息を吐いた。その声は、女の霊体が消え去ったことを意味した。

いつもなら英二はこれで満足することができた。霊体を破壊したいという渇きは潤されるはずだった。女の霊体を破壊すれば満たされると思っていたのに、彼の破壊衝動への渇きは一向に改善しなかった。それどころか、潤いを失い、新たな深い欲求が生まれる。

あの女が欲しい。数日前に逃した女を、また自分の中に無理やりに押し込んで破壊してしまいたい。英二は思考回路が曖昧になった頭でそう思った。

彼は立ち上がると、思ったがすぐに床に尻もちをついた。いつも、霊体を破壊するとうまく体が動かなくなる。快感の大小伴って、強い疲労感と痙攣をもたらすのだ。

時計に目を落とすと、一人で煙草を吸っていた時から一時間以上も経っていた。思っていた以上に時間は経過していた。彼は、自分の着ているシャツが、汗でびっしょりと濡れているのに気づく。それが、どれくらい長い間彼が快楽におぼれていたのかを証明していた。

英二は講義に出席するのをあきらめて、またその場に座り込む。
「新入生のくせに、もうさぼりか？」
英二は自分にむかって呆れたような声で言った。
彼は膝を立てて、そこに肘を乗せた。そのまま天井を見上げてから目を閉じた。
先ほどの直海の姿が瞼の向こうに浮かび上がる。何も考えていないつもりだったが、英二は無意識に直海の顔を思い浮かべていた。
笑顔の彼女は無条件に美しかった。世界のすべての純真無垢な心をかき集めて造られたような、それとも悪因悪果が集結して成しているような、どちらにしても心を強く惹かれる不思議な笑顔だった。
なぜ、直海の顔が浮かんだのかわからない。ただ、直海を強く欲しているのだけは、彼自身もわかっていた。真っ黒な瞼のスクリーンに映し出された直海の姿は、映写機の光が弱まっていくようにゆっくりと消えていった。英二は、そのまま深い眠りに落ちた。

（やっぱり怖い。人を傷つけるのが怖いわ）
（じゃあやめるの？　あなた悔しくないの？　私だって怖いのよ、また同じことされるかもしれないと思うと怖いの。でもアイツらが罰を受けずにのうのうと生きていることの方がもっと恐ろしいし悔しいわ。そうでしょう）
（そうだけど、本当に上手くいくかしら？）
（上手くいかなくたって、上手くいくまで何度でもやればいいのよ。何度やったって誰も気づきはしないわ。それに私たちがやらなきゃ、彼らによって、もっと被害者が増えるかもしれないじゃない）
（わ、わかったわ。やってみる。これが終われば、私を解放してくれる？）

美奈はオーバーサイズの黒いパーカー着て、フードを深く被っていた。美奈は、父親のパーカーをクローゼットから引っ張り出してきて、着てきていた。

顔が見られないように大きめのサングラスもかけていた。霊体の女が、美奈にそうした方がいいとアドバイスしたのだ。
二車線の道路の向こう側から来る車の明かりが美奈の体をうっすらと照らし、暗闇に彼女の顔の輪郭を映し出した。携帯の画面で時間を確認すると、四時三十二分と表示されている。早朝のため、辺りに人気は無い。
コンビニの明かりは窓ガラスから外へ漏れて、道路を横切って美奈の所まで届いていた。外からはコンビニの中の様子が丸見えだった。店員が二人、ダラダラと喋りながら大口を開けて笑っているのが見える。客の姿は見えない。
美奈は昼間に買った果物ナイフをパーカーのポケットの中に入れていた。右手でポケットの中のナイフに恐る恐る触れた。そのナイフの冷たさに美奈はゾッとしポケットから手を離す。
美奈は三本のナイフをショッピングセンター買って、すぐに自分の部屋の中でその切れ味を確認していた。手頃な物が無かったので、美奈は空のペットボトルにナイフを刺してみた。一度目は、ペットボトルに刃がうまく刺さらなかった。ボトルネックの部分を持っていたために、刃がペットボトルに当たった瞬間にずれてしまい、上手く貫通しなかった。二度目は、しっかりとペットボトルを左手で固定して狙いを定めてナイフを振りおろす。ナイフがペットボトルに刺さる瞬間、ポンという音がした。ナイフが刺さった時、男が苦しむ様子が目に浮かび、彼女は鳥肌を立てた。
三本のナイフの切れ味はどれも変わらないようだった。
今、美奈のポケットの中に入っているのは、三本中二番目に高価な折り込み式のナイフだ。刃は美奈の中指よりも少しだけ長いものだった。もっと殺傷能力の強い刃物を用意すべきだと思ったが、包丁を何本も買うと怪しまれるような気がして、彼女は買うのをためらった。
これで十分だっただろうか。やはり、もっと殺傷能力の高い刃物を買うべきだったかもしれない。美奈はそう考えながら何度かポケ

ットの上からナイフを触った。
　コンビニの店員の一人がどこかに消えた。バックルームか、トイレへ行ったのだろう。美奈の心臓の鼓動が早くなり、微かにめまいがした。美奈の体調は精神的にも身体的にも万全ではない。今日は生理が一番ひどい日で、体の調子が悪かった。
（いくわよ、アイツが一人になっている今がチャンスよ）
（でも、またもう一人の店員がすぐに戻って来るかもしれないわ。それに体調だって良くない。今日は……）
（もう、言い訳はやめて！　覚悟を決めるのよ。今、やるしかないの）
　誰かが後ろから美奈の背中を押したような気だした。そして不思議な力を手に入れたような錯覚を受けた。
　美奈は高鳴る心臓を二、三度拳で叩き、自分を奮い立たせた。
「今、やるしかないの。言い訳はしてはいけないわ」
　美奈は神に誓いをたてるように目を閉じてそう言った。
　美奈は道路を横切り、コンビニの前まで素早く歩いた。窓の外から店員の男の顔を見た瞬間、美奈は恐怖から全身にかかる重力が強くなった気がした。前に進もうという彼女の意志に反して、手足は動きにくくなる。
　面長の顔に、細い眉毛、そして釣り上がった目。男の顔は狐を連想させた。常に何か悪い事を考えているような顔をしている。
　美奈はコンビニの扉を開き中へ入った。ピンポーンという機械音が店に響き、キツネ顔の男が「しゃーせー」と言った。
　血液が熱くなり、体が緊張するのがわかる。妙に思考は冷静で、美奈は何度も自分に「落ち着け」と言い聞かせた。美奈は脇や胸に大量の汗をかいていた。パーカーの胸元のあたりの服を人差し指と親指でつまみ、上下させて服の中に空気を送った。新鮮な空気が触れて美奈の体を冷やしたが、それも一時的なものだった。
（やっぱりやめましょう。きっと失敗する）
（だめよ。絶対にダメ。やめたりさせないわ）

美奈は入口を入ってすぐに左側に曲がり、雑誌コーナーを横切って、清涼飲料水やアルコールが並んでいるガラス張りの冷蔵庫の前で止まった。飲料水コーナーはレジカウンターの真反対にある。

ガラスには、薄らと店内の様子が映っている。美奈は、ガラスに映るキツネ顔の男の様子を窺った。

レジの横にある、煙草の棚を左手で扱っているところだった。ここからでは何をしているのかよくわからない。だが、振り向いて、直接男の様子を見ることはできなかった。もし、目が合ってしまったら、自分はパニックを起こし、コンビニを飛び出して逃げてしまうと美奈は思った。

美奈は男の様子を確認すると弁当コーナーを回って、レジカウンターへと向かった。

手をポケットに突っ込み、ナイフがあることをもう一度確認する。レジカウンターの前まで来たとき、美奈の心臓は今までにない速度で鼓動を刻み始める。

男は、手に煙草の箱を持っていた。

（怖いわ。人を殺すって）

美奈は、出口の方へと歩き始める。店員は不審そうに美奈を見ていた。美奈が右手をポケットから出して、ドアに手を掛けた時だった。カランという乾いた音が静かな店内に響いた。

キツネ目の男が不審そうにその音の方を確認する。

「お客さん、何か落としましたよ」

美奈は慌ててドアを押しあけて、コンビニから出た。明るい店内からでは、外の様子がよく見えず、美奈の姿は暗闇に擬態するように見えなくなった。

キツネ顔の男はレジカウンターから出てきて、美奈が落としていった物を拾い、数秒間眺めた後、それが折りたたみ式のナイフだと気づいた。

キツネ顔の男は何も知らないまま、折りたたまれた刃の部分を出してみた。くすみのない美しい刃に男の顔が映っていた。男はその

刃に長い間見とれているようだった。
美奈はその様子を、コンビニの外から見ていた。彼女の姿は暗い夜の闇に上手く溶け込んでいた。

英二はベッドの上で、壁に背をつけて煙草を吸っていた。二週間以上この部屋で生活しているが、英二はまだ天井を見慣れてはいない。
天井に到達した煙は、行き場を無くし、生物のように天井を這いながら徐々に消えて行った。
蛍光灯の光がその煙を幻想的に映し出している。
英二は家に帰ってきて以来、ずっと美奈のことを考えていた。もうすでに恋愛的な感情は無かったものの、美奈の現状を英二は気になってしょうがなかった。再会をきっかけに、美奈との関係が戻ることを期待していなかったわけではもちろんない。だが、もうすでに彼氏が出来ているだろうと英二は思っていた。なにしろ、美奈は綺麗な女だった。
美奈も英二と同じように霊を見ることができた。だが、英二と誓って彼女は霊体を破壊することはできないし、霊体に対しての抵抗力もなかった。
二人は誰も信じてくれない真実を共有し合いっていた。同じ秘密を持っていることが、二人の絆を深めていた。だからこそ、恋の熱が冷めたいまでも英二は美奈がどんな生活を送っているのかが気がかりだった。誰にも相談できずに、一人で美奈が苦しんでいるのではないかと英二は気にかけていた。
美奈の家は緩やかな坂の上の方にあった。夏には花火大会であがる花火が、美奈の部屋から綺麗に見ることができた。
花火がどんなに美しかったかを英二は覚えていなかったが、花火が終わった後の静けさと寂しさは、胸の奥で時々目覚めては心をくすぐった。
英二が、数日前に女の霊体を破壊しようとして失敗したあの廃診

療所も美奈の家がある坂の下にある。以前、美奈が英二に部屋のベランダから廃診療所を指差して、その建物で数年前に診療所を営んでいた一家が突然行方不明になった事を教えてくれた。誰も近づかないその場所に、彼は美奈と二人でよく訪れた。
彼はそこで霊体を破壊する行為を美奈に見せていた。誰にも見せたことが無い行為だったが、彼女になら見せてもいいと思えた。秘密を共有する度に、二人の心は簡単に深まっていく気がした。

美奈の霊能力は年々強くなっていた。自分と一緒に居たために、影響を受けて、彼女の霊能力が向上したのだろうと英二は思った。
相変わらず、霊体に憑かれてしまうと、体調を崩すことや、精神的に異常をきたすことなどがあった。だが、二人が別れる直前の頃には、彼女は弱い霊体ならコントロールできるようになった。
美奈は英二のために、霊体を連れてきてくれることがあった。ただ、英二のように体から白い糸を出して霊体を捕まえるようなことはしなかった。彼女が「静かにして」と霊体に言うと、霊体は不思議と動きを止めた。
霊体は美奈に抵抗することは無く、まるで洗脳されているように静かに後ろからついてくる。英二はその霊体を自らの体から出た白い糸で捕まえて、破壊していた。彼女自身にも、なぜこんなことが出来るようになったのかわからないようだった。また、彼女は、霊体によってうまくいく時とうまくいかない時があると、英二に話していた。

初めて英二と美奈がキスをしたのもその場所だった。誰もいない静かな廃診療所は、恋を深めるには都合のいい場所だった。あの廃診療所は英二にとって良い思い出が詰まった場所だった。
誰も立ち入らないし、一人になれるあの場所は霊体を破壊するにも都合のいい場所だった。この土地の大学に進学のために戻って来たときに、初めに訪れたのもあの廃診療所だった。

その場所は時間が止まっていて、英二に美しい記憶を簡単に蘇らせてくれた。

英二は煙草を灰皿に押し付けると、ベッドに横になった。まだ天井を煙草の薄い煙が漂っているのが見える。

明日、美奈に会いに行こう。彼はフッと決意した。会って、彼女の現状を知りたかった。

昨日までの青い空は灰色の蓋をしたみたいに雨雲に塗りつぶされていた。重々しい空気を肩で切りながら、英二は美奈の家へ向かっていた。彼は美奈に事前連絡はとらなかった。もし不在であればそれはそれでしかたないだろうと英二は考えていた。

時計を見ると、まだ午前十一時を回ったばかりだった。すこし早かったかなと英二は思った。

傘に雨が当たり不均等に音を鳴らすのが心地よかった。英二は雨が嫌いではない。むしろ時々しか出会うことのできない雨が好きだった。

英二がこの街を離れていた間に、建物はかなり増えていた。真新しいマンションやデパート、レンタルビデオ屋、ペットショップ兼ペット美容室、コンビニ。どれもこの街に戻って来たときに英二は訪れていた。街は生きているみたいに徐々に変化している。それが、この土地を離れていた英二にはよくわかった。人間が作る街は人間と同じように変化しているのだ。

美奈の家の近くにもコンビニが新しくできていた。数日前、廃診療所で女を逃がしてしまった後で、そのコンビニに立ち寄っていた。

英二はそのコンビニに立ち寄って、飲料水を買ってから美奈の家へ行くつもりだった。久々に美奈に会うかもしれないという緊張で、朝から英二の喉はよく渇いた。

コンビニの横を通った時、駐車場の前にパトカーが二台停まっていた。パトカー以外にも乗用車が何台か停まっており、その周りに

はドラマでみるような紺色の制服を着た鑑識の人達が、何か話をしている。強盗かな？　英二はそう思った。不景気になって強盗の話題はよくメディアを賑わせている。テレビの中の事件は現実味を感じなかったが、こんなにも身近な場所で強盗が発生したとしてもそれは同じだった。どこか現実味に欠けていた。

野次馬が整列するように並んで、すこし離れた所から中の様子を見ていた。コンビニの反対側の歩道を歩いていたので、英二は車が車道を通っていないときを見計らって、コンビニの方へと横断した。

二車線の道路で、最近新たに舗装されたのか、アスファルトは深い黒い色をしている。

英二も十人以上いる野次馬の中に入り、中を覗いた。入口のドアは捜査のためにか、開け放たれている。

入口のドアに、血のような赤い液体が飛び散っているのが見えた。その側で刑事らしきスーツを着た人物が、出入り口のドアの辺りを指差しながらなにかを喋っていたが、英二のところからは全く聞き取れない。

強盗事件で怪我人が出たのだろうかと彼は思った。コンビニの外のアスファルトの一部が黒く汚れているのに、英二は気付いた。血の跡だろうと思った。おそらく、血液は雨に押し流されたが、跡が残ってしまったのだろう。かなり広い範囲に黒い跡は広がっている。そこで誰かが刺されたのかもしれない。

このあたりも血の海だったのだろうと英二は思った。

コンビニの中の様子を見ようと少し移動したとき、英二はフッとある事に気付いた。霊体の強い匂いがする。実際に鼻嗅覚で感じているわけではないが、英二は鼻の粘膜を刺激されたような気がした。

今度こそ、数日前に逃がした霊体だと英二は確信した。こんなにもきつい匂いを残していく霊体は、あの女の霊体だろう。

英二は辺りを見渡してみる。もしかしたらまだ近くにいるかもしれない。近くの人間に憑いている可能性もあるので、英二は用心深く

辺りを見渡し、変わった者が居ないかを確認する。
霊体が人間に憑いているときは、霊体の匂いや気配を感じ取ることが英二にはできない。霊体が人に憑いて隠れているなら、目で見て変わった人物が居ないかを確かめるしかなかった。
あの霊体がこの事件に関係しているのだろうか、それともたまたま霊体がこの辺りを通って匂いを残していったのだろうか。英二はあらゆる可能性に関して考えてみた。
英二はもう少しコンビニの方へ近寄りたいと思っていた。そうすれば霊体の残した匂いをはっきりと感じ取ることができるだろう。だが、警官二人が目を光らせており、これ以上コンビニの方へは近づきにくい状況だった
英二はコンビニの駐車場周辺を歩き回ってみると所々、その強烈な霊体の匂いが残る場所があった。だが、コンビニの敷地を出た辺りで匂いは忽然と消えてしまう。このあたりで人間に取り憑いたから、匂いが急にここで終わっているのだろうと英二は推測した。
その他の可能性として、もしかしたらコンビニ内にまだ霊体が居るかもしれないと英二は思った。匂いが消えている場所で人に憑いたのではなく、そこまで人に憑いてきて、離れた。つまり、ここが匂いの終点では無く始点かもしれない。コンビニの中へと向かい、今でも潜伏しているかもしれない。
コンビニ内でも霊体の匂いを嗅いでみたいが、警察と鑑識による捜査は終わりそうにない。だが、コンビニに入ることのできないこの規制も一日中は続かないだろう。英二はそう予想し、もう一度時間を空けてからここへ戻って来ることにして、コンビニから離れた。
美奈の家がある坂の前で英二は立ち止った。すぐ右手に草が伸び、荒れ果てた空き地がある。その横に、例の廃診療所はひっそりと建っていた。
英二はそれを一瞥して、ゆっくりと美奈の家がある方へと歩みを進めた。坂の下から中腹辺りまでは古めの家が立ち並んでいたが、

上の方へ行くと最近建てられたような家ばかりになる。
綺麗に整備された何もない空き地がいくつもあり、売り地と書かれた看板が立てられている場所があった。
ある空き地の前で英二は立ち止まる。そこには豆腐屋があったはずだが、もう後形も無くなってしまっていた。ここで豆腐を製造し、ラッパを吹きながらバイクで街を回っては、豆腐や竹輪を売る古風なスタイルで、有名であり人気だった。だから、売れなくなって店じまいしたのではなく、高齢が原因でやっていけなくなったのだと、英二は思った。そう思いたかった。
　美奈の家が近づき、坂の下の方を振り返ると街が一望できた。人工的な建物と空を覆う雲のアンバランスさが英二は好きだった。そこから、先ほどのコンビニは建物の陰に隠れて見えない。
　美奈の家が見えた。家の青い壁が、辺りの風景から浮き出て見えた。両親ともが医師であるためか、家はとても大きくて綺麗だった。庭にゴールデンレトリバーを飼っていたが、まだ生きているだろうかと英二は思った。
彼は少し離れた所から美奈の家を覗いた。車が無いことから、美奈の両親はいないようだ。美奈の母親は救急救命に携わっており、父親は外科医だったということをこの時、英二は思いだした。近くの市民病院に勤めている。母親は特に勤務時間が不規則だという事を聞いたことがあった。
　英二は彼女の両親が居ないことを確認すると、美奈の家に近寄った。美奈が中学生の頃乗っていた赤い自転車が見えた。英二はその自転車で美奈と二人乗りしたことを思い出していた。当時と同じものをまだ使っているということに、英二は嬉しくなる。
　家の敷地内に入ると庭の真ん中に置いてある犬小屋からビビが飛び出してきて英二に吠えた。大型犬を繋ぐリードはピンと張り、今にも千切れそうだ。一瞬、ビビは英二に怒りの表情を見せて吠えたが、すぐに尻尾を振りだした。
「久しぶりだね、ビビ」

英二はビビに近寄ってフェンス越しに頭をなでてやると、ビビはもっと構ってくれと言わんばかりに大きな声で二、三度吠えた。
フッと英二は家の右端のガラス戸に目線をやった。そこはリビングがある場所だった。カーテンの隙間に、美奈らしき姿の人影が見えた。
英二が控えめに手を振ると、美奈はカーテンを開け、庭に居る人物を確認するように目を細めた。
美奈はガラス戸を開け「英二？　英二なの？」と言った。その懐かしい声に、英二の中に眠っていた、彼女との記憶が一瞬にして潤された。
「ちょっと待っていて！」
美奈がそういうと、ガラス戸を閉めた。数秒後に玄関へ駆けてくるリズミカルな音が、家の中から聞こえてきて、玄関のドアが開かれた。
玄関から出てきた美奈は酷くやつれて見えた。頬がこけており、目の下には青いあざのようなクマができていた。だが、英二の姿を見て笑顔を作る彼女の表情は、いたって健康そうにも見えた。
英二は美奈に近づき、大学に進学するためにこの街へ戻って来たことを話した。
英二が「どうしても会って美奈と話がしたかった」と美奈に告げる。彼女は嬉しそうに、英二に部屋の中に入るようにと促した。
英二はリビングに通され、ソファーに座った。ソファーの横にあった窓からは庭と街が見える。ここからの眺めを見ていると自分が偉くなったような気がすると英二はいつも思っていた。
ソファーの目の前には英二が両手いっぱいに手を広げてやっと両端に届くぐらいの大きなテレビが置かれていて、海外ドラマが流れていた。最近流行している海外の連続テレビドラマで、シーズン5まで制作されているものだ。
テーブルの上にブルーレイディスクが5枚ほど乗っている。
美奈は、近くのレンタルビデオ店で母親に借りてきてもらって、

最近はずっとこれを見ていると言った。その日も、朝からこのドラマを見続けているようだった。
美奈は自分の部屋にテレビを置くことを許されていないらしく、映画やドラマのブルーレイを見るときは、いつもリビングで見なければならないことを不満だと漏らした。
英二がソファーに座ると、すぐに美奈は台所へ行き、お湯を沸かし始めた。
「コーヒーがいいよね？　紅茶もあるけど」
「コーヒーがいいな。美奈の家で飲むコーヒーはいつも美味しいから」
美奈は嬉しそうに笑顔を作って「ちょっと待っていてね」と言った。
数分後にコーヒーの入ったマグカップとマカロンがトレーに乗せられて運ばれてきた。美奈が英二の横に座り、テーブルにそれを置いた。
美奈はコーヒーを淹れている間、ずっとニコニコとしていた。その様子に、英二はホッと胸を撫で下ろす。
笑顔の美奈は、右側だけに笑窪ができる。それが可愛いと英二は思っていた。
美奈は英二に色々と質問し、彼はそれに丁寧に答えた。久々に英二に会い、美奈は興奮を抑えきれないようだった。だが、顔色は全身から血を抜いたように青白く、手は肉が無く、骨の形が浮き上がり、血管がハッキリと見えている。
美奈は霊体に憑かれると体調を崩しやすい。悪い霊によって体調を崩したのではないかと英二は心配していた。
「美奈、すこし痩せたんじゃない？　顔色も悪いし。もしかして霊が原因か？　もし力になれることがあったら……」
「ちがうわ、霊は関係ない。ちょっと、体壊しちゃってね。顔色が悪く見えるのだって、家の中にいて太陽に当たってないからだよ。見方によっては美白よ。それに私は、あの頃と違って霊体に憑かれ

ても、さらに上手くコントロールできるようになったのよ」
「でも、相変わらず憑かれやすくて、霊体が抜けにくい体質は変わってないんだろ？」
「そうね。憑かれると、私の魂と霊体が鎖で繋がれたみたいに抜けにくいのは変わらないけど、今は憑かれても体調を崩したりはしなくなったわ」
美奈はそう言って笑って見せたが、目が泳いでいるようにも見えた。
美奈は自分のことをあまり喋りたがらなかった。英二が質問すると、どれも曖昧に受け流して、答えようとはしない。美奈は、進学もせず働いてもいないようだった。高校を卒業してから何をしているのかを聞くと、美奈はあからさまに悲しそうに俯いた。
だから英二もあまり質問はしなかったし、体調が悪そうなことにも触れなかった。
英二は、美奈を置いてこの土地を離れた時点で、彼女の悩みに深くまで踏み込み、共有できる権利を失っていることに気付いた。

「ずっと、美奈に謝りたかったんだ」
「何を？」
「突然離れ離れになって、君と別れたこと」
「気にしないで、当時は悲しくてずっと泣いていたけど。もう昔のことじゃない」
「昔のことかもしれないけどちゃんと謝っておきたかった。突然、別れを告げて、一方的に連絡を切ったのは、今思えば間違っていた。すこし大人になって、今更後悔したんだ。あの時は、君のために別れるんだって思っていたけど、結局は自分のためだったのかもしれない」
「あの時は仕方なかったのよ。だって私たちまだ中学生だったんですもの。あなたが別れようって言った時、私のことなんて初めからたいして好きじゃなかったって言ったわよね？」

「あぁ、言ったよ。君は泣いていた。でもあれは……」
「わかっている。本心じゃなかったことぐらい。だけどその優しさが悲しかった。だから英二を忘れるのが辛かった。どうせなら、遠距離恋愛を続けて、結果的にお互いが冷めて別れた方がよっぽど私は英二を忘れることができたと思うわ」
「あの時はさ、1か0か。それしか考えられなかったんだ。だって、俺たち若かっただろ？」
「英二、いったいあなたは何歳になったつもり？まだ、私たち若さを持てあます歳でしょ？」
　美奈がそう言って笑い、英二もつられるように笑った。二人の関係が昔に戻ったようだと英二は感じていた。美奈に会いに来てよかったと、英二は心から思えた。
「正直言うと、期待していたんだ。今もずっと俺のこと思っていてくれているんじゃないかってね。だから、この街の大学に進学が決まったときから美奈に会いに行くことばかり考えていた。でも美奈は、さっき“もう昔のこと”だって言ったね。俺の期待は外れたよ。美奈の中では、もう昔の話になっていたんだって」
英二がそう言うと、美奈は聞こえるか聞こえないか分からないくらいの声で「うん」と言った。それから水を打ったような静けさが、リビングを襲い、二人の間に気まずい雰囲気が流れる。
「そういえばさっき、下のコンビニで強盗事件があったみたいだったよ。警察がたくさん来ていた」
英二は必死に話題を変えようとさっき立ち寄ったコンビニのことを話した。
「へぇ、そうなの。店員は刺されて生きているのかしら？」
「さぁ。でも拭き取った血の後が見えたから怪我はしているんだろうな。ニュースかなんかで報道されてなかったか？」
「ずっとブルーレイで海外ドラマ見ていたから、わからないわ。ちょっと、テレビに変えてみましょうか」
　美奈はリモコンを操作し、テレビ画面を切り替えた。どの局もニ

ュース番組は行われていなかったので、美奈は適当なワイドショーに合わせてリモコンをテーブルに置いた。
「日中は一人で家の中に居るんだろ？戸締りはしっかりしろよ」
「わかっているって。あっ、英二。そろそろお父さんが帰って来るかもしれないわ。今日は一時ごろに帰って来るって言っていたから」
英二はリビングの掛け時計を見ると、十二時半を回っていた。美奈の父親とはあまり話したことが無かったし、娘が一人で家にいるときに上がり込んでいるのを見られるのもバツが悪いと感じ、英二は帰ることにした。
「じゃあ、今日は帰るよ。その前にちょっとトイレ貸してくれる？」
「えぇ、いいわよ」
英二はソファーから立ちあがると、リビングを出て廊下の突き当たりのトイレへと向かった。玄関には大きな鏡がついた靴箱がある。その横の白い壁に、何かが下げてあった。それは、首からかける形のカードケースで、美奈の母親の写真がついたカードがそこに入っていた。病院でつかうＩＤカードのようだった。そこから、母親は、病院に行っているわけではないらしいことがわかる。買い物にでも行っているのだろう。
トイレの目の前まで来て、英二はあることに気づき足を止める。霊体の匂いがする。後ろを振り向くとそこには二階へと続く階段がある。二階には美奈の部屋と美奈の両親の寝室があるのを覚えていた。
その匂いは強いものだった。まさかあの女の霊体がここへ来たのではと英二は思った。廃診療所は、美奈の家がある坂の下にある。この家に来た可能性はある。美奈が体調を崩しているのも、そのせいかもしれない。彼はそう考えたが、もしもそうなら彼女は自ら助けを求めるはずだと思い直した。
霊体の匂いは所々強いものの、大半は薄れている。いつ霊体がここを通ったのかまでは分からないが、確実に霊体が通ったことをその匂いは示していた。

英二はゆっくりと階段を登る。英二は霊体の匂いをかいだことで、本能が叩き起こされる。海で血の匂いを嗅ぎつけたサメのように、獲物を捕食したいという本能が、英二の中で燃え上がった。
階段の踊り場の窓からも街の様子が見える小窓がある。その子窓は、街の風景を切り取った一枚の絵のようだった。
霊体の匂いは、階段に強くこびりついているようだが、数日間の時間が経っているようだった。
二階に着くと廊下の一番奥に美奈の部屋があるのが見えた。霊気はそちらへと続いている。英二の鼻の粘膜はヒリヒリしていて、引き攣っているようだった。
美奈の部屋のドアに近づくたびに、霊体の残した匂いはきつくなっていった。英二はドアノブにゆっくりと手を掛ける。そして素早く引いた。
中の様子は異様なものだった。ドアの向こうは、この綺麗な家の中では別世界だった。洋服が散乱し、カップラーメンのカップと割箸が転がっている。食べ物が発酵したような臭い匂いもした。
少し気になる物も目に入った。勉強机の椅子に、掛けられている黒い洋服。黒い男性もののパーカーだ。有名ブランドの銀色のロゴがフードのところに描かれている。
一通り部屋を見渡して英二は部屋のドアを閉めた。霊体は居ないようだった。それから階段のところに戻ると、美奈が踊り場の所で待っていた。英二は驚き、小さく息をのんだ。
「何をしていたの？」
「いや、霊気を感じてさ。ちょっと二階を見に来たんだ」
「私の部屋を見た？」
英二は首を振る。
美奈の額に小さな皺ができているのがわかった。怒りではなく怯えているように見えた。
「数日前に霊が家に上がり込んだのよ。自殺者の霊だったわ。私に憑こうとしたけど、上手く追い払った。たいしたことなかったのよ。

だから安心して」
美奈は少し早口でそういうと、英二に下に来るように促した。英二はそれに従う。
もうすぐ父親が帰って来るということで、英二は美奈の家を後にすることにした。家を出るときに、近いうちに英二の部屋へ美奈が遊びに行くという約束を交わした。美奈は英二が帰る間際に、携帯電話の連絡先を交換した。それから英二は美奈の家を後にした。

**B**

英二は美奈の家から帰る途中で、強盗事件があったと思われるコンビニへ寄るつもりだったが、いまだに警察がいるようだったので近くのレンタルビデオ店で時間を潰すことにした。

レンタルビデオ店では、漫画本のレンタル行われていた。一冊八十円から借りることができた。英二は映画には興味が無かったが、漫画は好きだった。だが、新書を買い続ける経済力も無いため、いつも古本屋で安くなった本を買うか立ち読みをしていた。

英二はすぐにレンタル会員カードを作り、三冊の本を借りた。それは二、三年前に深夜放送枠でアニメ化された話題作で、今でも連載の続く漫画だった。英二は特にその漫画のファンというわけでは無かったが、まわりのメディアでよく取り上げられていたため、興味を持っていた。

英二は漫画本を借りても、すぐ店の外へは出なかった。なぜなら霊体の匂いを店内で嗅ぎつけたからだった。弱弱しい霊気で、今にも魂に自然分解し消えてしまいそうだったが、英二は霊体を破壊する快感に飢えていたためどんな霊体だろうと構わなかった。

霊体はアダルトコーナーの一番奥の店長のオススメという棚の下に蹲っていた。中年のサラリーマン風の男だ。霊体の姿かたちは、生前に自分が一番印象的だった時の恰好で存在する。男は仕事で失敗して自殺でもしたのだろうと英二は推測した。

英二は自分の掌を見た。白い糸がのびてきている。体が我慢できないようだ。糸は蕁麻疹の発作のように、全身へと広がっていく。英二は男の魂を強く欲していた。男の霊体はすでに消えかかっており、簡単に消せてしまうのは分かっていた。それはつまり快感の小ささを意味する。だが、コンビニや美奈の家で感じた霊体の匂いが英二の本能を刺激し、快楽を得たいという欲求を膨らませていた。

掌でそっと霊体を包み込むように抱き、そのまま英二は男の魂を

トイレへと連れて行った。男性は小さく抵抗していたが、英二の腕からでた白い糸が全身に絡まり身動きが取れないようだった。
トイレは、出入り口のすぐ横にあった。障害者や妊婦や幼児のおむつを替えるために利用される多目的トイレが空いていたので英二はそこに入った。中は広く綺麗だった。
すぐに英二は男性の魂を胸に当てゆっくりと体内に取り入れていく。男性の魂は抵抗を見せなかった。というよりも英二の絡みついた糸で抵抗ができなかった。男の魂はゆっくりと英二の体と一体化していく。
（死んで後悔しています。なぜ、生きて後悔しなかったのかを、なぜどうにもならない状況を苦しみ、もがかなかったのかを後悔しているのです。死んだら、死んだことしか後悔できないのです）
男の霊体はそんなことを英二に訴えてきた。英二は、男の言葉を無視した。聞こえないふりをして、破壊行為に専念した。
英二は自分の鼻息が荒くなるのが分かり、意識的に深呼吸をする。それから強く歯を食いしばり、男性の霊体を体内で破壊した。その瞬間に英二は床に足を着き、大きく息を吐いた。抵抗は弱弱しいものだったため、それに比例して快感もあまり得られなかった。
彼は曖昧にしか感じることのできなかった快感のせいで、さらに体が霊体を欲し始めていた。あの女の霊体を破壊したという衝動が波のように繰り返し訪れては、英二の理性をさらっていった。
彼は数分間、女の霊体の事を考えたまま床に膝をついていた。弱い霊体であったとしても、霊体を破壊した後は疲労感や筋肉の痙攣が英二の体を襲う。足が動かなくなってしまっている。
英二は呼吸を整え、携帯の画面を開く。時計を見て、そろそろコンビニの警察も引き上げたのではないだろうかと英二は思った。コンビニの中に入って、霊体の匂いを嗅ぎまわり、あの女の霊体がどこにいるか突き止めたいと彼は思っていた。もしかしたらコンビニのどこかにまだ霊体が隠れているかもしれないのだ。
英二は携帯画面に流れるニュースフラッシュを見ていた。携帯の

画面の上の方に、自動的にタイムリーなニュースが更新される。英二は無意識に右から左に流れる文字を読んだ。
〔コンビニ店員突然自殺か。他殺の可能性も〕
そういった短い文だった。英二はそのニュースの詳しい情報を見るために、携帯を操作した。すぐに画面が変わり、情報が映る。
〔１８日午前４時４０分ごろ、Ｋ県Ａ市荒尾町のコンビニエンスストア「セブンイレブン荒尾町店」で男性従業員（２１）が下腹部を果物ナイフのような刃物で刺されているのが発見された。当時、店に客はおらず、一緒に居た店員から死亡した男性に何か変わった様子がなかったか話を聞いている。防犯カメラの映像に不審な女性が映っていることもあり、荒尾署は自殺と他殺の両面から調べている〕
その記事がさっきのコンビニのことだというのはすぐに分かった。
英二は再度その記事を読んだ時、ある事に気付いた。だが、それもたいしたことではないだろうと、英二は頭の隅にそれを追いやった。

（どうしよう。感づかれたかしら？）
（大丈夫よ、気づいてなんかない）
（やっぱりもうやめるべきじゃないかしら）
（弱気になっちゃダメ。アイツらは人間のゴミよ。誰かが排除しなきゃいけないの。それを私たちにならできるわ）
美奈と霊体の会話に言葉は必要なく、お互いが考えている事は精神の中で通じあえた。
美奈はじっとテレビ画面に映る海外ドラマを睨みつけながら、親指の爪を噛んでいた。先ほど、英二は近くで起きたコンビニの事件を口にした。それに彼はこの家で霊体の霊気を感じ取っている。気付かれる可能性はゼロではないことを、美奈も自覚していた。
英二は霊気を鼻で感じると昔に美奈は聞いたことがあった。だが、英二は人間に憑いている霊体の霊気を感じ取ることはできなかったのも美奈は知っていた。

美奈は落ち着かずに、何度もマグカップを口に運び、コーヒーを胃の中へ流し込む。美奈は二、三度目を閉じて大きく息を吐いた。
（次は、宮原正治を殺しましょう。いいわね）
（わ、わかった）
美奈は誰かに体を引っ張られるように、ソファーから立ちあがり、自分の部屋へと向かった。ドアを開けると服やゴミが散乱していた。足の踏み場も無かったが、美奈は服やゴミの上を歩いた。
美奈は勉強机の引き出しの中から二本のナイフを取り出した。ナイフの刃の部分は鞘に納められている。鞘を抜き取ると、綺麗な刃が現れた。美奈の顔と、その後ろに霊体の顔が見える。
（私たちは本当に正しいことをしているのかしら？）
（正しいことをするために、やっているじゃない。私たちは悪に罰を与えるためにやっているのよ。悪人を守る道徳や、綺麗事にまどわされてはだめ。あなたは私の言うことを聞いていればいいの。絶対にやりきるのよ）
美奈はナイフの刃を鞘に戻して、目を閉じた。自分の手が震えているのを美奈は見たくなかった。

美奈にとって、英二が帰ってきているというのは想定外だった。
美奈と英二が出会ったのは中学生のときで、二年半近く交際は続いた。交際のきっかけはお互いに霊能力を持っているということに気付いたことだった。
美奈は幼い頃から、霊の存在に悩まされてはいた。
霊体に憑かれた美奈は、小学校の教室で暴れたこともあった。霊体に憑かれた時、美奈は善悪の判断が曖昧になることがあった。隣の席にいた男の子にからかわれた美奈は激高し、イスを投げつけて怪我をさせたことがあった。その時、美奈の魂と同化していた霊体が美奈に指示してそうさせたのだ。そのようなことが続いたことで、美奈はずっと孤独だった。誰にも理解してもらえない苦しみを抱いていた。

街から三時間程北に行った場所に、母親の知り合いの霊媒師が居て、週末には病院へ行く感覚で通わなければならなかった。母親も半信半疑だったのだが、いろんな病院で診療をうけさせても一向に改善しなかったことから、母親は霊媒師に頼るしかなかった。霊媒師は、美奈の魂は霊体と結びつきやすいのだと言った。悪い霊体に憑かれてしまったら、魂を支配される可能性もあるからと言って、御札やお守りを高い値段で売りつけてくることもあった。母親は言われるがままそれを買った。

決してその霊媒師が嘘を言っているわけでは無かった。むしろ霊媒師は強い霊能力を持ち、美奈に憑いた霊体を払ってくれた。だが、御札やお守りにはたいして効果は無く、美奈の弱みに付け込んできただけだった。

小学校を卒業する頃には、普通の霊体は自分で追い払うことができた。精神的に成長し、自分自身の心を操作することで美奈は霊体が魂へ侵入してくることを制御することができた。だが、中学一年生の夏、美奈は学校で強い霊体による障害に悩まされていた。

午後二時ごろになると突然教室に現れては、美奈の席の横に立つ霊体が居た。四十代くらいの男性の霊だった。理由は分からないが、「君、見えているよね？　ねぇちょっと話を聞いてよ」と霊体が声をかけてくる。その霊体は時に優しく、時に大声を出して脅すように美奈の耳元で訴えた。実際に声が出て、鼓膜を震わせたわけではない。精神に直接訴えかけてくるのだ。

美奈の精神の隙を見て、なんどもその霊体は魂の中に入ってこようとした。その度に、美奈は体調を崩して保健室で休んだ。

　少しでも気を許せば、霊体は美奈の中に入ってくる。それを拒むためには、体力が必要だった。

一度憑かれてしまうと、霊体と美奈の魂が同化してしまう。一度同化してしまった霊体を魂から切り離すというのは長い時間と精神力が必要となる。さらに厄介なのは、霊体自身が美奈から離れようとしてもできない状態になることだ。お互いの意志に関係なく、絡ん

でしまうのだ。
「俺があの霊体を破壊してやろうか？」
そんなときに、隣クラスの英二にそう声をかけられた。学校の廊下で彼とすれ違う時に誰にも聞こえないように耳打ちされたのだ。美奈はその時、英二も自分と同じように霊能力を持っているのだと知った。
英二は霊能力で霊体を破壊することができた。
英二は霊体を破壊するときは、いつも誰もいない所へ行きたがった。霊体を破壊するとき、英二は息を荒げ、喘ぐような声をあげる。まるで見えない誰かと性行為しているようでもあった。
霊体を破壊した瞬間、英二の顔は快感に満たされていた。破壊後に時間が経って、彼が冷静になると罪悪感を抱いたような、恥ずかしそうで切なそうな顔を見せる。誰もいない所で霊体を破壊するのは、おそらくその姿を誰にも見せたくなかったのだろうと美奈は思った。
英二は美奈にだけは霊体を破壊する行為を見ることを許してくれた。二人は罪を共有しているような気がしていた。それが絆を深くしたのは間違いなかった。美奈はそのとき初めて孤独を忘れることができた。
二人は長い時間一緒に居たことで、自然と付き合うようになった。英二と一緒に居ると、美奈の霊に対する耐性は強くなっていった。それが精神的な安定からか、それとも英二の強い霊能力に影響されたのか美奈にもわからなかったが、確実に自身の霊能力も上がりつつあった。
英二は霊体を破壊することを好んで行っていたが、決して冷徹な人間ではなかった。英二は思いやりと優しさを持っていた。人への思いやりや優しさというのは、人間特有の想像力が必要になる。優しさや思いやりのある人というのは、個々の人間に対して、それぞれに合った言葉や行動を行える者だ。ある人に喜ばれた優しさも、人を変えれば迷惑へと変わる事もある。だから想像力と優しさは対

の関係にある。
　英二はその想像力を持っていて、時と場合によって思いやりの形を変えることができた。美奈は英二のその思いやりに惚れ込んでいたが、時として自分以外の他人に向けられることに強い嫉妬を抱くこともあった。
男女問わず自分以外の人に英二の優しさが向けられる度に、美奈は強い嫉妬と独占欲が湧いてきた。それが、彼への依存を強めたのは、間違いなかった。自分の気持ちが、彼への重荷になっていることも美奈は、どこかでわかっていた。
　美奈の英二への気持ちは、今も変わってはいない。英二が居なくなってからの三年間も、美奈は彼を思い続けていた。庭にいる英二の姿を見た時、美奈の心は英二が居なくなった日からずっと止まっていたことを知った。それほど胸が高鳴り、熱くなったのだ。
英二と目があった瞬間に、美奈の中にあった氷のような感情が融解し、今まで渇いていたものが潤っていくのがわかった。
　本当は、すぐにでも英二を抱きしめてしまいたかった。もし、自分の体が綺麗なままだったならそれができたはずだっただろうと、美奈は思った。こんなことになっていなければ、きっとすぐにあの頃のように笑いあえたのではないだろうかと、美奈は思いを巡らせていた。

　美奈は父親の部屋から引っ張り出してきた黒いパーカーを羽織って、深くフードを被った。ナイフをパーカーのポケットに入れて、上からそれを触った。
　英二のことを考えたことで、美奈の手の震えはさらに大きくなっていた。もう英二に愛されない自分が、嫌で仕方なかった。彼らが憎い。だが、自分は本当に正しいことをしているのかという疑念もあった。
こんなことをしたくはないという思いは強かったが、この女の霊体が彼らを殺してくれれば、何かが変わるかもしれないと彼女は思っ

ていた。ただ自分は、この霊体が彼らを殺すための手助けをすればいい、その考えが彼女の中の罪悪感を曖昧にしていた。

英二は二号館の最上階で、煙草を吸いながら達也を待っていた。英二は美奈の家がある方角の窓を開け、そこに肘をついて体重を乗せている。煙草の白煙は英二の頭の上の辺りまでくると、空気に溶けて見えなくなった。

街を三百六十度見渡すことができるこの場所から眺める風景は飽きることは無い。

昨日は結局、コンビニに入ることはできなかった。警察がなかなか規制を解いてくれなかった。英二はコンビニがある方を眺めながら、あの女の霊体のことを考えていた。コンビニの近くで感じた霊の匂いは、やはりあの女だったのだろうか。もしそうなら自殺した店員はあの女に操られて殺されたのかもしれない。あの霊体はたまたま男に取り憑き、操って殺したのだろうか。それとも生前にその男に何か強い恨みを持っていたのだろうか。そればかりが英二の頭をめぐる。

煙草を吸うのを忘れていた英二が手元を見ると、煙草はいつの間にか三分の二が灰になっていた。英二は灰を落とし、携帯灰皿に煙草を押しこんでポケットにしまった。

ちょうどその時、階段の方から足音が聞こえてきたので、英二は振り返る。達也がだるそうな顔で階段をのぼってきていた。達也はコンビニの袋を肩に担ぐように持っている。

「まったく、俺をパシリに使いやがって」

達也はそう言って、コンビニ袋から甘そうな菓子パン二つとコーヒーを取り出して英二に渡した。

「さっきの講義で寝坊したお前のために、出席カードを出してやったのは誰か知っているか？」

「おそらく、いつもそいつは高いところから街を見下ろし、偉そうに煙草を吸っているような奴だろうな。そして寝坊した民を助ける

ために、何も言わなくても出席カードを代わりに出してくれる良い奴のはずだ」
「しかも、昼食を買ってこさせるけど、いつも代金を少し多めに渡してくれる太っ腹な奴だろ？」
達也が手を広げて、英二の前に伸ばしてきたので、その手に彼は小銭を握らせた。
「あぁ、確かにそうだった。俺は何一つ損をしていなかったよ。俺は良い友に出会えてうれしいよ」
「調子のいい奴だな」
英二はそう言って笑った。
二人は菓子パンを無言で口に含んだ。風が窓から流れ込んできて、達也の長い髪を何度か宙に持ちあげてから、風はどこかへ消えた。
「昨日、美奈に会って来たよ」
英二は二つ目の菓子パンを食べ終わり、煙草に火をつける前にそう言った。達也は口でパンを咀嚼させながら英二の方を見た。あまり興味のなさそうな表情だった。
「どんな話したんだ？」
「思い出話とかかな」
「セックスはしなかったのか？」
「バカ言うな」
英二はそう言って鼻で笑って見せた。
「それよりさ、思い出したことがあるんだ。ナルミかホナミか忘れたけど、お前に”三枚堂くん”って声かけてきた女いただろ？」
達也は、鼻を大きく広げて、目を輝かせながら言った。
「直海だよ。やっぱり知っているのか？」
「顔も見たこともないけど、知っているかもしれない。携帯変えてしまって名前もはっきりとは覚えてない」
「どういうことだ？　顔も知らないけど知っているなんておかしいだろ？」
「俺のセックスフレンドに里奈ってやつがいるんだけど、こいつが

聖也っていう男と遊びでヤッたんだ。そしたら、聖也の彼女がそれを知って激怒してさ、何したと思う？」
「もったいぶるなよ、さっさと教えてくれ」
英二は達也の態度がじれったかった。
「その女が俺に連絡してきたんだ。友達から俺の連絡先を聞いたってその女は言っていたけど、実際は里奈のことを調べているうちに、どこかで俺に行きついたんだろうな。まぁ、俺の場合、いろんな女と関係を持っているから、どこから情報が出ていっても不思議じゃない」
達也はなぜか自慢げにそう言った。
「自分の彼氏の聖也と里奈が浮気しているのを、その女は達也に教えたってわけか？」
「それが違うんだよな。その女は、俺に一目ぼれしたから、会って話がしたいと言ってきたんだ。どうやら俺と浮気しようと思っていたらしい」
「話が読めない」
英二は顔をしかめて言った。
「つまり、その女は浮気されたから、仕返しに浮気し返そうと考えたんだよ。自尊心が強い女だったんだろうな。俺と浮気することで、彼氏の聖也にも里奈にも精神的なダメージを与えたかったんだろう」
「でも、里奈は達也のセックスフレンドなんだろ？」
「直海って女はそれを知らなかったのさ。俺の彼女だと思い込んでいたから、里奈から俺を寝取ってやろうと考えたんだろう。バカな女だよ」
「それで、達也はどうしたんだ」
「聖也が、里奈を通して、彼女と会わないでくれと、俺に頼んできたんだ。俺も、面倒なことに巻き込まれたくなかったから、その女と会おうとは思わなかった。でもな、その話を地元の先輩にしたら面白がって、そいつを呼びだしてみんなで犯しちまおうって話になったんだ」

「お前、なにしているんだ」
英二は自然と怒りを覚えていた。直海が、無理やりに体を押さえつけられている場面を想像すると、許せない気持ちがこみ上げてくる。
「ちょっと待てよ、英二。なにも無かったんだ。先輩達に言われて、俺は女を呼び出した。だけど来なかったんだ。それから、俺が携帯を変えたことで、連絡を取れなくなってさ。結局、メールのやり取りをしただけで、なにも無かったんだ。名前も曖昧にか覚えてないけど、確かナオミ的な感じの名前だった」
「だけど、なんで俺を達也だと思いこんだんだ？」
英二がそう言うと、達也は顎に手を当ててわざとらしく考えるそぶりを見せた。
「俺の推理によると、こうだな。まずその女は、英二が講義を休んでいる俺の代わりに名前を出席カードに書いている所を、見たかなんかで、英二の名前を三枚堂だと勘違いした。それから女は復讐を思い出し、英二に近づいてきたんだ。女とはメールでのやり取りでしか関わってないから、俺の名前しか知らない。俺の顔は把握していないはずだ。だから、英二。お前、その女には気をつけろよ」
達也の話は腑に落ちなかった。達也自身も、半信半疑で言っているようだった。
それに、自分の彼氏とその浮気相手を苦しめるために、自分の体を犠牲にしようとするなど哀れだと思えた。いったい、それで誰が得をするというのだろうか。
英二は直海の顔を思い浮かべた。顔しか知らないが、直海がそのようなことをするとも思えなかった。

昼休みが終わる頃には、二人は二号館を出て別々の講義へと向かった。
だが、英二は途中で足を止めた。図書館の横に設置してあるベンチに腰をおろして煙草に火をつけた。側に自動販売機が設置してあ

り、その脇にあるゴミ箱からペットボトルが飛び出して、地面に散乱しているのが見えた。

次の授業は生物学だ。英二は法学部であったが、生物学にも興味を持っている。先週の講義の『浮気症は遺伝する可能性がある』という話はとても興味深かった。それを証明する研究はプレーリーハタネズミという一夫一婦制のネズミで行われた。浮気する遺伝子を持つネズミの子孫は多くのメスと関係を持ち、その遺伝子を持たないネズミの子孫は一夫一婦制を守り続け、番が死んでも他のメスとは関係を持たなかったというものだ。

だが、この実験をそのまま人間に当てはめることは、正しいことではない。人間には心がある。それに、幼いころから培われた道徳を持っている。それは、遺伝子にも勝つことが出来るのではないだろうかと英二は考えていた。

毎週この講義を英二は楽しみにしていたが、それ以上に事件のあったコンビニのことが気がかりだった。そのことを気にしだすと、英二の思考は完全にコンビニで嗅いだ、霊体の匂いのことに奪われた。

英二は煙草の火を携帯灰皿に押し込んで立ちあがった。それから彼は大学を出て、コンビニへと向かった。

大学からコンビニまでは約十五分程度で行くことができる。ショッピングセンターのある通りを進めば距離的には近いが、交通量の多さから英二はその道を避けて、少し遠回りだがシャッターだらけの商店街の中を通っていく。見上げると古びたアーケードの塗装がはがれて錆びているのがわかった。商店街に人はいない。

目では確認できないほどではあるが商店街の中は、緩やかな斜面になっているため自転車は軽く漕ぐだけでどんどん進む。小学生の頃、この商店街が通学路になっており、夏の暑い日には魚屋の老夫婦から麦茶を貰ったのを英二は覚えていた。いまではその店もシャッターが閉め切られている。ショッピングセンターに比べれば、商店街

というのは不便なのかもしれないが、ここには多くの助け合いや温情があったことを英二は知っていた。
夏にここを通ると心地よい風が汗ばんだ首筋に触れ、体の体温を冷やしていったのを、英二は思いだしていた。

コンビニではレジに店員が二人と、雑誌コーナーに客が三人いるのが見えた。英二はその客達の横で適当に雑誌を開き、男性が殺されたであろう場所を見ていた。
男性の霊体はいない。霊体のほとんどは、死んでも一定時間死体に引っ掛かるように憑いたままだ。やがて、時間が経つと、蛇が脱皮するように、体を抜けていく。だから男性の霊体は、死後も自分の体に引っ掛かったまま連れて行かれたのだろう。
霊体の匂いは、コンビニの中に入ったときから感じていた。あの女の霊体のものだろう。強い匂いが出入り口のドアと床に匂いがこびり付いている。英二は雑誌を広げながらその匂いを愛おしそうに嗅いでいる。逃がしたあの女の霊体に違いないと英二は思い、体が熱くなる。ここで死んだ男性も、その女の霊体に操られて殺されたのだろうと英二は推測した。

英二は、霊体の女が残した匂いから、女を体内に取り込んだ時のことを思い出していた。その時に感じた強い快感を思いだし、英二は血が騒ぐ。もう一度あの女を体内に取り込んで、次は確実に破壊したい。その想いだけが彼の脳内をめぐる。
コンビニの中を、歩きどこかに霊体の匂いが残っていないかを調べたが、出入り口付近以外には霊体の匂いは無い。

英二はなにか手掛かりは無いかと、店員に声を掛けることにしてレジへ向かった。携帯で見たニュースに不審な女性が防犯カメラに映っているという情報が書いてあったのを思い出し、もしかしたらその女性が霊体に何か関わりがあるのではないかと英二は思っていた。
霊体の匂いは、コンビニ内の出入り口部分から突如始まり、駐車場

の途中で忽然と消えていた。コンビニ内の他の場所では、霊体の匂いはしない。このことから、霊体は何者かに憑いたまま、この場所を訪れて、男を殺す瞬間だけ人から離れたに違いない。そして、男を殺した後にまた元の人間に憑いてこの場を離れたのだろう。だから、防犯カメラに映ったその女性も無関係では無かもしれない。そう英二は考えていた。

レジには四十代前後女性の従業員と、まだ若い十代の女性が何かを話していた。英二は、レジ越しに中年の女性に声を掛ける。ふくよかな顔立ちから気の良さそうな人だということが分かる。

「すみません。先日、ここで亡くなった男性の友人なのですが、少しお話を伺えませんか？」

英二はそう言った。だが、友達というのは全くのウソだった。女性は一瞬、警戒するような目で英二を見た。初めは英二のことを不審がったが、すぐに饒舌と言えるほどペラペラと喋り出す。

「瀬野くんのお友達？　可哀想にね。一見、自殺するような子じゃなかったのに。それに自分の下腹部をめった刺しにするなんてね、想像するだけでも恐ろしいわ」

女性はまるで人ごとのように言った。勤務時間帯が異なるので、実際にあってしゃべったことはほとんどないと女性は話した。

「防犯カメラに不審な女性が映っていたって、ニュースで流れていましたが、映像は見られましたか？」

「そうなの？　そんなことニュースで流れていたかな？　私は防犯カメラの映像を見てないんだけど。でも、あの時、瀬野くんと一緒にシフトに入っていた伊坂くんって子がおかしなこと言っているのよ」

「おかしなことって？　何か変な物を見たとか？」

「なんでもね、伊坂くんが瀬野くんを襲う幽霊を見たっていうの。その幽霊が瀬野くんの手を取ってナイフで無理やり体を刺させたって言っているのよ。それを防犯カメラ越しに見たらしいんだけど、もちろんそんなもの記録された映像には映っていなかったらしいの。

きっと気が動転しているのね」
「その伊坂って人が、次にいつシフトに入るか分かりませんか？ちょっと会って話したいんですが」
「ちょうど、今ここに来ているわよ。バックルームで一時間近く、店を辞めるか辞めないで揉めているみたいなのよ。どうも、瀬野くんの自殺に、彼は酷くショック受けたみたいよ。今、辞められると困るのよね。コンビニって意外にキツイし、時給も安いしでしょ？
それにショッピングセンターの方が、バイトも人気があるみたいで、ここには人手が集まらないの。瀬野くんも亡くなっちゃったし、今辞められると困るんだけどね」
「その人と話しできませんか？」
「まだ、店長と話しているから終わるまでもう少し待ってみたら？」
英二は「わかりました、ありがとうございます」とレジの女性に言ってその場を離れた。彼は、雑誌コーナーで雑誌を開いて待つことにした。レジの中年女性は、英二の方をチラリラと目線を向けて、もう一人の若い女の子と何かを話していた。女性は英二のことを話しているのだろう。あの女性は、英二に関する適当な推測を、あたかも事実のように語っているのかもしれない。この世の噂の大半は女性によって拡張されているのだと英二は思った。
レジの女性は、死んだ瀬野という男性が自分をめった刺しにして自殺したと言っていた。確かに刃物を使って自殺する時、人は何度も自分にためらい傷をつけてしまうものだ。だが、今回は霊体が関わっている。取り憑いているのであれば、喉の動脈を一突きで殺せたはずだ。何度も刺したということは、霊体が瀬野という男に対してなにか強い恨みを持っている可能性もあると英二は思った。
伊坂という男性に話を聞けば、あの女の霊体の事も何か分かるかもしれない。生前に女性関係で、瀬野という男がトラブルを起こしていたのであれば、あの女の霊体の正体も掴めるかもしれないと英二は思った。
十分経った頃、コンビニの中に男性の声が響いた。飲料水が並ぶ

ガラス張りの冷蔵庫の横にある扉から、二人の男性が出てきた。そこがバックルームの出入り口のようだ。男性の髪は明るい茶色をしている。それが伊坂だろうと、英二は思った。男の後ろから店の制服を着た中年の店長らしき人物が後を追って来る。足早に歩く男性を引き止めるように、店長が男の肩を掴んだ。だが、男はそれを振り払う。二人はオニギリコーナーの前で、三分程口論した後、伊坂と思われる男性はそのまま外へ出て行った。英二はその後を追う。

伊坂が車に乗ろうとしたところで、英二は声を掛けた。車は、古いワゴン車だった。年季の入った車体の様子から、彼の父親の車だろうと英二は思った。

伊坂は怪訝な顔をして、英二を見た。怯えたように、下くちびるを噛み、睨みつけるような顔をしている。伊坂は車のドアを開いていたので、英二はそれを掴んだ。行かせないという強い意志を表したのだ。伊坂は威嚇の表情を表したが、どこか怯える子犬のようだった。

唇にピアスをしているし、眉は細い。自分を強く見せようと必死になっているようにも見える。この男は気が弱い。英二は一瞬でそれを見抜いた。

「なんだよ。お前誰だ？　俺の車に触るなよ」

「俺は瀬野の友達だ。瀬野が死んだ時のことについて聞きたいんだ。当日一緒にシフトに入っていたんだろ？　あの日何を見たか教えてほしい？」

「アイツの友達だと？　お前の名前はなんだ？」

伊坂は英二の顔をまじまじと見た。英二はしまったと思った。この男は瀬野とただのアルバイト仲間だと思っていたが、友人の可能性もある。瀬野の交友関係を知っているのなら、安易に友人だと言うべきでは無かった。

「俺の名前は英二。瀬野とは小学校の頃に仲が良かったんだ。最近、大学進学のためにこの土地に戻ってきて、あいつの家に行ってみた

ら自殺したって聞いてさ。何故自殺したのかが知りたいんだ」
「俺だって知らない。それに、瀬野が自殺した時、俺はバックルームに居て見てなかった。だから……」
「でも防犯カメラ越しに見ていたんだろ？　その映像の中で霊を見たんだろ？　さっきレジの女性から聞いた。俺も幽霊が見えるんだ」
英二は、そう言って伊坂の言葉を遮った。
「お前、俺のことバカにしてんのか？」
「バカになんかしてない。俺は本気で言っているんだ。信じられないかもしれないが俺は霊が見える。さっき、コンビニの中で霊気を感じた。その霊気を残して行った霊が、瀬野を殺したと思っている。君も見たんだろ？」
「マジかよ。あれは幽霊なのか。やっぱりそうなのか？　確かに俺はバックルームで休憩していて、瀬野が自殺する所を防犯カメラのモニター画面で見たよ。体の透けた女が瀬野の手をとって、ナイフを刺させたように見えたんだ。それを警察に話したけど、そんなものは録画された映像には映っていなかったって言われたんだ。だから、あれは俺の見間違いだって思っていたんだ」
　伊坂は、自分の頭を右手でかきむしった。自分のことを必死に否定しようとしているようにも見えたし、散乱した脳内の情報を整理しているようにも見えた。伊坂の顔は怯えからか、陰影の暗い部分が増えたようだった。
　コンビニの中からガラス窓越しに、レジの中年女性が英二達を興味深そうに見ていた。どんな話をしているか気になっているのだろう。
英二は「ついて来い」という意味で、伊坂の二の腕の辺りを手の甲で軽く叩いて、コンビニの裏の方へ歩き出した。誰もいない所の方が伊坂も喋りやすいだろうという配慮だった。伊坂もその意向をくんでくれた。伊坂は、車のドアを閉め、操られたように英二の後を追った。

英二と伊坂はコンビニの裏の人気無い所で、壁にもたれかかって話を始めた。英二が「君が言っていることをすべて信じるから話して欲しい」そういうと伊坂はあっさりと話してくれた。
伊坂が防犯カメラの映像で見たのは、こんなものだった。伊坂と瀬野はいつも深夜のシフトで一緒に働いていた。二人とも勤務態度はまじめとは言えなかったが、やらなければならない仕事はいつも三時ごろには終えて、バックルームで居眠りをしたり、煙草を吸ったりしていた。
その日も同じように、三時ごろには雑誌の返本作業と、弁当やおにぎりやパックジュースの品出しを終えていた。深夜のこの店にはほとんど客が来ることは無く、バックルームで二人とも休憩しながら防犯カメラを見て、客が来たらレジに立つようにしていた。レジに立つのはいつも伊坂の役割だった。歳は同じではあったものの、瀬野は伊坂を自分より下だと思っているらしく、よく命令することがあった。
その日はたまたま、瀬野の煙草が切れていた。だから伊坂だけが先に、バックルームへ入った。
瀬野は、レジ横の煙草を取って、代金をレジに入れてからバックルームに来ることになっていた。瀬野は不良の部類であったが、店で盗みを働くことは無かった。以前に働いていた居酒屋で、レジの金を盗み警察沙汰になったことで、店の物には手を出さないのだと瀬野は伊坂に言っていた。
伊坂がレジを離れてバックルームに戻ってからすぐに客が来たので、瀬野はレジを離れられなくなっていた。伊坂は自分も表に出るか迷ったが、煙草に火を点けたばかりだったので防犯カメラのモニターで様子を見ることにした。モニターは九つの防犯カメラの映像を映し出している。つまり、一つのモニター画面が、九区画にわけられているのだ。店内が八台の防犯カメラがあり、八区画に店内の様子が映っている。右上の一画だけは、外の駐車場の様子が映っていた。来客した黒いパーカーのフードを被った女は店の中を時計回りに一

周すると、何も買わずに店の外に出ていこうとした。
伊坂は防犯カメラの中のその女の姿を目で追っていた。ドアを開けて店の外に出ていく瞬間、女はパーカーのポケットから何か取りだして、意図的に捨てたのが見えた。
　レジの上に設置してある防犯カメラの映像に瀬野の姿が映っている。女が何かを落とした瞬間、音がしたのか画面の中の瀬野が反応したのがわかった。なにかを客に向かって言ったのか、口元が動いているようにも見えた。瀬野がレジを出て、女が落としたそれを拾う。十秒ほどだっただろうか、瀬野はスイッチを切られたように動かなくなっていた。
すると、出入り口のドアのガラスから女の顔が出てきた。通り抜けてきたと言った方が適切だろう。防犯カメラの向こうに居る女の体は、瀬野のものとは明らかに違う、異質なものだった。透き通っており、床や出入り口の横にあるコピー機が見えた。もしそこに人が居るなら、その部分の床やコピー機は見えないはずだ。半透明の女は、瀬野の手に触れた。瀬野は女に手を握られ、なされるがまま自分の股間に、先ほど拾った何かを押しつけた。瀬野の叫び声がバックルームの伊坂まで届いた気がした。瀬野が拾ったものが刃物だと気づいたのは、彼の股間部分から、大量の出血が噴出した時だった。瀬野は出入り口の前でずっと蹲りながらも自分の股間を、刃物で刺していた。女は瀬野に馬乗りになって、彼の手を取り、無理やりに股間に押し付けていた。瀬野は足をバタバタさせ、抵抗しているように見える。
伊坂は目の前で起きている出来事が、現実のものだとは思えなかった。伊坂は自分が吸っていた煙草の灰が床に落ちたのも気づかなかった。
瀬野は、床を這いながら手で出入り口のドアを開けて外へ出ていった。防犯カメラのモニターにはナイフと瀬野の血が映っている。半透明の女は瀬野が出ていくと、彼の後を追うように外へと消えていった。

伊坂は防犯カメラのモニターの右上の駐車場を映す部分に目をやった。女が居た。先ほど、店内に入って来たパーカーを被った女だ。女は右手を、肩の所まで垂直にあげていた。
瀬野が、ドアを開けて外に出てきたのを見て、パーカーの女は後ずさりしていた。その女はやがてコンビニとは反対の方向に振り返り、画面の外にと消えて行った。
透明な女も、瀬野が動かなくなるのを確認してから、パーカー姿の女が消えて行った方向へと、姿を消した。
伊坂は動けなかった。今行けば、あの女に殺される。そう思ったのだ。伊坂の体は長い時間固まっていたが、エンジンが温まるように時間をかけて動きはじめた。
瀬野は店のすぐ外で息絶えており、性器は切り取られて手に握られていた。ナイフは強度が弱かったのだろう。根元から刃が折れて、地面に転がっていた。伊坂は、それを見たとき脳が妙に鮮明になるのがわかった。驚くほど冷静に救急車と警察に電話していた。
伊坂は、警察に半透明の女のことを話したが、防犯カメラには自分の股間を刺す瀬野の姿しか映ってはいなかった。

英二は、伊坂から事件当時の一部始終を聞いて、やはり逃がしてしまったあの女の霊体が原因ではないかと思った。あの女の霊体なら、人を操って死に追いやることができる。女の霊体が男に取り憑いて自殺させたのだろう。
英二には女の霊体が男を殺す理由については推測が出来ていた。女の霊体を破壊するのに失敗した時、英二は首を絞められた。実際には、女に操られて英二が自分自身の首を絞めていた。その時に、英二はある映像を見ていた。車内で性的暴行をされる女の映像だ。
おそらく、あれは女の霊体の生前の記憶だったのだろう。そして、その犯人の一人が瀬野という男だったに違いない。わざわざ性器を切断させたのも、生暴行に対する恨みからだろう。
だが、英二には一つ疑問があった。刃物を店内に落としていった女

だ。その女も、今回のことに深くかかわっているに違いない。
もし、あの女の霊体が瀬野という男に恨みを持っているなら直接瀬野に取り憑いて殺せばよかった。なぜ、わざわざ女に取り憑いて、ナイフを持って来させなければならなったのか。英二はその理由を考えたが、なにも思いつかない。

「防犯カメラの映像は手に入れられないか？　霊は映っていなくても、ナイフを落としていった女を見てみたいんだが」
英二が聞くと、伊坂は首を横に振った。
「わからない。でも、無理だろ。どうやって動画をコピーすればいいか分からない」
「警察は映像を持って行っただろ？　どうやって複製して持って行った？　思いだしてくれ」
「えっと、ずっと防犯カメラの映像を録画している機械があって、USBメモリーを使って保存していた。そういえば、それとは別に店長もコピーしていた気がする。でもやり方が俺には分からないし、もう俺はここを辞めるんだ。ここには居たくない。俺は、瀬野みたいに死にたくない」
伊坂は、コンビニの壁から背中を離して、その場を立ち去ろうという仕草を見せた。
「おい、瀬野みたいに死にたくないって今言ったが、あの霊体に君も狙われるようなことをしたのか？　まさか、以前に女を暴行して殺したなんてことは無いだろうな？」
　英二は伊坂の腕を掴み、睨みつけるように言った。この男は気が弱い。それに、霊体に怯えている。今なら問い詰めれば、何でも吐くだろうと英二は思った。
「違う！　俺は何もしてないんだ。あれは死んだ馬場や瀬野たちが勝手にやったんだ。俺は車を出すことや、見張り役をさせられただけだ。俺は何もしてないんだ。女に暴行なんてしてない。手伝うように、命令されていただけなんだ。それに、いくらあいつらでも人

を殺したことなんてないはずだ。俺の知る限りではだけど」
「死んだ馬場って、誰だ？　他にも瀬野と同じように不審な死を遂げた奴が居るのか？　それはいつだ？」
「一ヶ月くらい前だった。自分の首を自分で絞めて死んだんだ。あいつクスリやっていたから、そのせいだって思っていたけど、きっとあいつもあの女に殺されたんだ」
　伊坂の目は充血し、涙が目尻に溜まっているように見える。伊坂は、瀬野や馬場などのことを思いだして泣いているわけではなく、自分自身の身の危険を感じて泣いていた。
　英二はその話を聞いて確信した。あの時の霊体が馬場と瀬野を殺したのだと。英二は、あの女の霊体を破壊するのに失敗した時にみた映像に、自分の首を絞めて死ぬ男の姿が映っていた。それが、馬場という男なのだろう。
「防犯カメラに映った映像をコピーして持ってきて欲しい。ナイフを持ってきた女が誰か分かれば、霊体の居場所もわかるはずだ。もし霊体の居場所が分かったら、俺がなんとかしてやる。それと瀬野の最近の写真があったらくれないか？　友達として最近の彼の姿を見ておきたい。なんせ、六年近く離れていたからな。今から俺の携帯番号を君に教えるから連絡してくれ」
　あの日見た映像の中に、瀬野の顔があったかどうかを確認しておきたかったから、伊坂に瀬野の写真を持ってくるようにと頼んでおいた。
　英二は伊坂に携帯を出させた。伊坂の携帯を受け取り、英二は自分の番号に電話を掛けた。こうすることで英二は伊坂の携帯の番号を知り、伊坂は英二の番号を知ることができた。
「頼んだぞ」英二は強い口調でそう言った。
「瀬野の写真は持って来られる。でも防犯無カメラの件はできるかどうかは分からない。それにさっき、店長と言い争ったばかりだしな」
　そう言った伊坂の顔からは多くの色が抜け落ちていた。頬の色や

唇までもがすべて灰色のようだった。伊坂の足が震えていた。あの女の霊体の姿を思い出し、怯えているのかもしれない。一刻も早くここを去りたいようだった。
背中を英二に向けて、去っていく伊坂の背中は曲がり、とても小さく見えた。糸を切られて力を無くした操り人形のようにも見えた。

伊坂からの連絡は二日経っても来なかった。代わりに英二の携帯を鳴らしたのは直海からの着信だった。直海の番号をアドレス帳に登録していなかったために、初めは誰なのか分からなかった。電話に出たとき携帯から『もしもし、私です。わかるかな？』という聞き慣れない声が流れてきた。一瞬誰だか分らなかったが『三枚堂くん、私のことわからない？』と言われたときに、その電話の相手が直海だということに気づいた。英二は全身の筋肉が強張るのがわかった。緊張していた。直海からの連絡で、自分の心が躍っているのにも彼は気づいていた。
だが、達也が言っていたことを、英二は思い出していた。
達也は、直海が彼氏と浮気相手の里奈に復讐するために、達也と関係を持とうとしていると言っていた。直海が達也と浮気することで、彼氏と浮気相手に彼女が受けたのと同じ屈辱を味あわせたいと考えているようだった。やられたらやり返すという考え方かもしれないが、それではきっと誰も得をしない。直海が二重に傷ついて終わるだけだ。
英二は迷っていた。ここで、自分が三枚堂ではないことを直海に告げれば、彼女と関わることは永遠にない。復讐に燃えているからこそ、彼女は連絡をしてきてくれる。
『ねぇ、ちょっと今日付き合って欲しいんだけど。時間あるかな？』
直海は長年の友に話を持ちかけるように言った。その自然な口調に、英二は、この女をずっと昔から知っている友人なのではないかと錯覚するほどだった。
「あぁ、いいよ」

英二は間を置いてからそう答える。直海は『やった』と言って、喜びの混じった声を上げた。本心からの喜びではないかと思えるほど、感情の籠った言葉だった。
直海は、英二に落ち合う場所と時間を告げる。午後六時頃に、あのショッピングセンターにテナントとして入っているコーヒーショップで待ち合わせることにした。
電話を切ってから、英二は自分の心拍数が異常に早くなっているのに気づいた。電話で話すときはできるだけ冷静さを保ち、相手に緊張がバレないように気をつけていた。
電話を切った後の英二の心は彼女に会える喜びと、彼女を騙しているような罪悪感が複雑に入り組んでいた。
深呼吸を繰り返していた時、英二の脳内で小さな爆発が起きた。その瞬間に、英二はある映像を思い出していた。いつもは学生たちが憩いの場として過ごすスペースに、臨時的に作られた教科書販売所。鉄の組み立て式の本棚と、それを囲う長方形の机。学生の注文した教科書を棚から探し出す店員。その店員が、学生の名前を呼ぶ声。「三枚堂さん」。あの時だ。直海が、自分を三枚堂だと勘違いしたのは。英二は、そう思った。
やはり、彼女は勘違いをしている。あの日、側に居た男を三枚堂だと思い込み、復讐心に火がついた彼女は、自分に声を掛けてきたのだろうと英二は思った。
自分が三枚堂ではないことを言うべきだろうか。だが、それを言ってしまえば、もう彼女と関わることはできない。
三枚堂のフリをし続ければ、直海と継続的に関係を持つことができる。それに、直海の狙いが本当に達也と浮気をすることなら、体の関係も持てるかもしれない。そんな邪な思いが、英二の欲望を駆り立てたが、それをすぐに振り落とした。
直海を説得して、自分の体を犠牲にしてまで彼氏や浮気相手に復讐するのは止めさせなければならない。それが正しいことなのだと、彼は自分自身に言い聞かせたが、決心は着かなかった。

六時まではまだ二時間ほどあった。落ち着かないながらも、英二はシャワーを浴び、歯を磨いて、まゆ毛を整えて、服を選んだ。用意が出来てテレビを眺めていたが内容は頭に入ってこない。テレビに映し出されるタレント女性の笑顔が、直海と重なって見えた。顔も雰囲気も似ていないが、その時の英二には、何気ない刺激が直海を思い出させる。なぜ自分がこんなにも直海に魅かれているのか、英二には分からなかった。

家に居ても落ち着かず、結局待ち合わせから一時間も早く家をでた。待ち合わせ場所のショッピングセンターの中に入っているコーヒーショップには四十分ほど早く着いてしまった。

レジでドリップコーヒーを頼むと、濃い色のコーヒーが入ったマグカップとビニール袋に入ったおしぼりがトレーに乗せられて出てきた。英二はそれを受け取り、外のテラス席へと向かった。

テラス席には丸テーブルが六つあり、テーブルの周りには四つの椅子が並べられていた。

テーブルの三つはすでに客でうまっている。一番奥のテラス席に座る女性が英二の方を見て手を振った。それは直海だった。英二の足が一瞬止まる。心臓も停止したような気がした。マグカップの中に入った黒い液体が大きく波打ち、トレーの上に数滴こぼれた。

英二は直海の席へ行き「やぁ」と不慣れな挨拶をした。

「待ち遠しくって、一時間前に着いちゃった」

直海はそう言って笑顔を作った。その笑顔には嘘は無い。そう思いたかった。

英二は、自分が三枚堂ではないということを告げるつもりでいたが、直海の笑顔を見るとそれが躊躇される。この笑顔がたとえ仮面でも、彼はそれを手放したくはなかった。

達也が言っていることが本当なら、直海は自分と肉体関係を持とうとするはずだと英二は思った。三枚堂ではないことを告げるのはそ

の後でもいいのではないかとも思えた。
英二は直海の色鮮やかな表情を眺めながら、欲望と葛藤していた。
「三枚堂くん。どうしたの？　何か考え事している？」
直海にそう言われて、英二はハッとして、何か喋ろうと口をもごもごと動かした。彼は、席に着いてから一言も言葉を発していなかった。
「実は、俺さぁ……」
頭では言いたくないと思っていたが、英二の口は勝手に「自分は三枚堂ではない」と言おうとしていた。英二はぐっと喉の奥に言葉を押し込んだ。
だが、その言葉は吐き気を催すように、英二の喉から這いあがろうとしてくる。
「どうしたの？　三枚堂くん。気分悪い？」
「俺は……俺の名前は英二だ」
「エイジくんって言うの。じゃあ、三枚堂英二くんなんだね」
直海の言葉に、英二は困惑した。彼女は、三枚堂達也の名前は知っているはずだ。それとも名字しか知らなかったのだろうか。
「違うよ。俺は三枚堂じゃない。三枚堂は俺の友達なんだ」
英二はそう言って、直海の方を見た。彼女は英二のことを観察するようにじっと見ている。「そうなんだ、だったらあなたには用は無い」そう言って直海が立ち上がってどこかへ行ってしまうのではないかと、英二はそう心配していた。だが、そんなことは起きなかった。
「そうなの。すぐにそう言ってくれればよかったのに。じゃあ、英二くんって呼ぶね」
直海は笑顔に戻り、何事もなかったような顔をしていた。英二と三枚堂が別人と分かっても特に彼女に変化は見えない。
「君は、三枚堂に用があったんじゃないの？　だから、教科書販売所で、俺を三枚堂だって勘違いして声を掛けてきたんだろ？」
「確かに、あなたを三枚堂だって思い込んだのは、教科書販売所で

店員があなたをそう呼んでいたから。でも、私はあなたに用があったの。英二くん、あなたに近づきたくて声を掛けたの」
「じゃあ、彼氏と浮気相手に復讐するために三枚堂に近づこうとしたわけじゃないんだね」
「何の話？　それにどうしてそんな怖い顔しているの？」
直海は困ったような顔をして、英二を見ていた。英二はそう言われたことで、自分の顔に無意識に力が入っている事に気づく。英二は手で顔を軽く顔を触り、親指と人差し指の部分で頬をほぐすようなしぐさを見せた。
「私はね、英二くんに用事があって声を掛けたのよ。でも、どうして教科書販売所で、英二くんは店員さんに三枚堂って呼ばれていたの？」
「三枚堂の教科書注文用紙に、俺の分の教科書もついでに書いてもらっていたんだ。それで、三枚堂が急用で一度学校を出て行ったから、金を受け取って俺が本を変わりに取りに行ったって訳だよ。でも、どうして俺に声を掛けたの？　もしかしてどこかで会ったことがある？」
初めて直海を教科書販売所で見た時、確かに英二は彼女とどこかで会ったような気がした。ずっと昔から知っていたような気がした。
「英二くん、あなたって幽霊が見えるでしょ？」
直海は英二の質問を無視して、そんなことを言った。
直海はマグカップに入っている甘そうなミルクベースのドリンクを口に運んで、優しく微笑んだ。唇についたスチームミルクを、直海の赤い舌が口の中へ連れ去っていくのが見えた。英二はその動きに見惚れてしまい、直海の言った言葉を理解するのに少しの間を要した。
「どうしてそれを知っているの？」
英二は直海のふっくらとした唇に目を奪われたままそう言った。
「知りたい？　だったら私と今からデートして」
英二に断る理由は見つからなかった。真実など重要では無く、彼

女が側に居る、その事実が英二にとっては重要だった。
直海は、すべてを知っているという自信に満ちたような顔をしている。反対に、自分ばかりがこの世界のことに対して、全くの無知である気が彼はしていた。
直海の笑顔を見ていると、限りない空腹感すら満たされてしまうような気がする。いくつもの疑問が無意味な物に感じる。英二はそう思いながら、直海の笑って細くなった優しい目に見惚れていた。

コーヒーは三分の一も飲まれないまま、飲み残しとして英二の手によって捨てられた。英二と直海は目的も無く、ショッピングセンター内のテナントのお店を見て回った。この土地に引っ越してきて、何度かここを訪れたことはあったが、直海が入る店は、日頃英二が立ち入らないような店だった。女性が好みそうな雑貨屋でバニラの匂いがするお香を見たり、パワーストーンを扱う店で青く輝く石を触ったり、今まで欲しいとも思わなかった人形を五百円もかけてユーフォーキャッチャーで取ろうとしたり、英二が一人では行かないような店や場所に直海が連れて行ってくれた。
直海と英二は一度トイレへ行った。英二は先に、トイレから出て、壁にもたれかかって直海を待った。彼女は、英二に少し遅れてトイレから出てきた。英二はその短い時間ですら、不安になっていた。彼女がトイレに入ったまま、雪が解けるように消え去ってしまうのではないかと思ったからだ。彼女の周りに漂う雰囲気には、いつ消えてしまっても不思議ではないような危うさがある。
直海は、トイレから出てくると、英二の後ろの壁に貼ってある映画のポスターを眺めた。ショッピングセンターの近くにある映画館で上映されている映画のポスターのようだ。
「これ、見たいなぁ。これの前作は、なかなかおもしろかったんだよね」
直海がそう言いながらポスターを見ていた。英二は、その横顔が愛おしいと思った。

ゲームセンターではプリクラを撮った。二人の写るプリクラにはエイジとナオミの名前が手書きで書かれていた。英二は恥ずかしがり、プリクラを撮るのをためらったが、直海が英二の手を引っ張って機械の中に入った。出来上がった写真に写る英二は照れたようにはにかんでいた。

英二たちは、階段を登って屋上駐車場に来ていた。柔らかい風が吹いていて、直海の髪が膨れ上がるように揺れるのを英二は見ていた。

このショッピングセンターは一、二、三階にテナントが入っていて、沢山の店が並んでいる。一階から三階までは吹き抜けになっている場所がいくつもあり、三階から一階を見下ろすと、多くの人が歩きまわり、テナントの店から出たり入ったりしているのがわかる。まるで蟻の巣の中に居て、働きアリたちが巣の小部屋で出たり入ったりしているようだった。四階と屋上は駐車場になっている。地上にも大きな駐車場があるし、地下にも同じくらいの面積の駐車場があった。それでも休日やセール時には、ほとんどの駐車場は埋まる。

その日は平日だったが、車の数は多かった。地上の駐車場はかなりの率で埋まっている。

英二と直海は駐車場の出来る限り人気のないところから街の姿を眺めていた。このショッピングセンターの周辺には真新しい家や商業施設が多く建てられた。映画館や漫画喫茶やパチンコ店までもが、ショッピングセンターに寄り添うように建てられている。

ショッピングセンターの周辺は住宅の明かりや車のヘッドライトでキラキラと輝いているのに、商店街周辺にも明かりは見えたが、やはり寂しげな色を帯びていた。車の往来も少なく、動きが見えない。

直海は商店街の方を見ていた。その方向には山がある。直海はそっちの方を指差して「あの辺りが私の家だったのよ」と寂しそうに言った。英二は直海が指した方角を見た。山は漆黒の布で覆われて

いた。まっくらで、深い影を帯びている。英二は何も言わなかった。ただ、直海の話を静かに聞いていた。直海が「だった」という表現をしたことから、昔に山のふもと当たりに住んでいて、今は別の場所に住んでいるという意味だろうと思った。

「私ね、こんな楽しいデート初めて」

「そうなの？　でも、俺あんまり上手く喋れなかったな」

自分も直海と同じ気持ちだと言いたかったが、それを言ってしまったら昔付き合っていた美奈になんだか悪い気がして英二は言えなかった。

直海の向こう側に見える街の明かりが、彼女の輪郭を美しく浮き上がらせている。

「ずっとね、寂しかった。愛されようと必死になっていた。でも……」

直海の頬の曲線にそって涙が流れていくのが見えた。英二に直海の涙の意味はわからなかったが、この寂しげな顔をする女を抱きしめたいと思った。性的な欲求では無かった。ただ、彼女に涙を流させる、悲しい感情を共有すべきだと思った。風に乗って英二の方に流れる彼女の哀愁が、彼にそのような感情を起こさせた。

英二はそっと直海の手をとった。思った以上に血の気の無い冷たい手だった。英二と直海は見つめ合い、二人とも同時に小さく笑った。それだけで、お互いの心が通じ合えた気が彼にはしていた。

「昔ね、付き合っていた人に酷い捨てられ方をしたのよ。原因を作った奴を本気で殺してやろうって思っていた。でも、あなたに出会えてその悔しさや憎しみを忘れることができたの」

「そうなのか。でも、どうしてそう思えたんだ？」

「私ね、わかるの。あなたの心って、青々とした葉が茂る大樹のよう。私の傷も憎しみも覆い隠しいてくれる。気づいたら、私はあなたを探していた」

「どういうことか俺にはわからない。俺は、君のことを何も知らないし、同じように君だって……」

英二がそう言いかけた時、直海の唇が英二の唇に重なった。手とは違って彼女の唇は暖かい。そして柔らかい。唇を離すと、英二は直海の体を強く抱きしめた。
もっとこの女を知りたい。この女の中に入って、魂を重ね合いたい。英二はそう思った。
体が重なり合っている部分が、暖かい。英二の体は、徐々に直海に中に解けていくような気がしていた。
「ひと目惚れしたのよ。あなたは素敵な人。私の勘はよく当たるの」
そう言って直海はいたずらな笑顔を見せた。本心なのか、それとも冗談を言っているのか、英二には分からなかった。ただ、英二は直海が言ったことを信じたいと思った。

宮原正治は以前と変わらず、繁華街の居酒屋で働いていた。アルバイトという形式なのだろう。バイト先が変わっていないために、改めて彼を探す必要はなかった。
彼はバイクで通勤していた。美奈は車で、帰宅する宮原の後をつけて、自宅を特定した。高校の時に免許を取って以来、車の運転などしていなかったので、不安ではあったが、自転車に乗るのと同じで、美奈の体は車の感覚を覚えていた。
一度目の追跡は失敗した。彼が自宅に帰らず、飲み屋が立ち並ぶ繁華街の方へ消えて行った。二度目で、彼の家まで追跡することに成功した。
この街に出来たショッピングセンターの近くに最近建てられた大きな家が彼の自宅だった。男の風貌からは、このような家で暮らしているなど想像できなかった。ボロボロのズボンを履き、髪は何度も染め、さらにツイストパーマのせいで酷く痛んでいる。決してい生活をしているようには見えなかった。
美奈は宮原の自宅の前に来ていた。彼の自宅を特定した数日後のことだった。あれこれと理由をつけて、美奈は行動を起こさなかった。

やらなければならないことは頭では分かっていたが、体が動かなかったのだ。
近くまで自転車を使って、近所にあった公園に停めてから歩いてから、宮原の家まで歩いた。その日、車は仕事に母親が乗って行っていた。辺りには、最近になって建てられたような真新しい新築が並んでいる。景観など気にしていないのか、それぞれの家が無駄な自己主張をしあっているようだった。
美奈は携帯を開いて時間を見た。三時三十分。宮原がまっすぐ自宅に帰宅するのであればもうそろそろ帰って来る頃だろう。
美奈は宮原の家の車庫のシャッターに、立て掛けるようにナイフを置いた。柄の下の方が平らになっていたために、立て掛けるのには苦労しなかった。
美奈は宮原の家から離れ、五メートル先の角を曲がったところで足を止めた。新築らしき住宅のブロック塀に身を隠す。
ここなら、宮原が帰宅した時にも見つからないだろうと彼女は思った。
（本当に上手くいくかしら？　今度こそ失敗するんじゃない）
（前回と同じようにやればいいだけよ）
（でも、もし……）
（いい加減にして！　やるのよ！　もしもなんてないわ。やるしかないの！）
（わかった。わかったわよ。そんなに叫ばないで、全身に響くじゃない）
美奈の足は小さく震えていた。もしも失敗してしまったら。そう考えると、やはり怖かった。失敗して、反対に自分が襲われてしまったら。そう思うとあの時のことが思い出される。あの忌々しい記憶を思い出すと全身が痛み、胸が苦しくなった。
妙な汗が美奈の額を冷やし悪寒が走る。
宮原にナイフを持たせて、操って自分の体を刺させるには、瀬野

の時と同じように出来るだけ美奈が彼の側に近寄らなければならない。そうすることで、霊体の彼女の力を最大限に引き出す手助けができる。
本当に上手くいくだろうかと美奈は不安だった。そのために、美奈は何度もシミュレーションを繰り返す。瀬野の殺害成功は美奈にとってさらなる不安を増殖させるにしか過ぎなかった。
霊体の彼女への信頼と、自分自身の能力への自信など曖昧なままでしかなかった。

美奈はしきりに時計を気にしていた。三十秒が一分以上にも感じられたし、一時間後なんて一生訪れないのではないかと思えた。
空気は澄んでいて、空には綺麗な星が散らばっている。美奈は一度だけその夜空を見上げたが、その目には星など映らなかった。美奈は星の無い真っ暗な宇宙に、自分がされた最悪の行為を映し出していた。時々こうやって思い出さなければ、脳が勝手に憎しみを和らげようと記憶を曖昧にさせていく。もしも、このまま憎しみが和らいでしまえば、自分はここから逃げ出してしまうだろうと美奈は思った。
この夜の静けさが、美奈には永遠のもののように感じる。このまま宮原が帰って来なければいいのにと美奈は思っていた。今、宮原が帰ってくれれば、間違いなく自分に憑いている霊体の力によって彼は死に追いやられるだろう。彼のことは憎いし、殺したいという思いはあるが、正しいことをしているかと聞かれれば、違うと感じる。だからこのまま彼が帰ってこなかったとしても、それでいいのではないかと美奈は弱気になった。時折、弱気の波が美奈に押し寄せてくる度に、彼女は必死に足を踏ん張った。逃げ出してはだめだと、何度も自分に彼女は言い聞かせる。
その時、遠くの方からバイクのエンジン音が聞こえてきた。こちらに近づいてくるにつれて、その音は大きくなっていく。緊張で心臓が強く脈打っているからか、エンジン音のせいなのか分からないが、

胸の辺りに振動を感じた。
バイクが美奈の視界に入った。美奈は背中をしっかりとブロック塀に押し付けていた。意識を、ブロック塀で見えない宮原の自宅の方へと向ける。
宮原の家を覗き込むように、美奈はブロック塀から顔を出した。ガレージの前に爆発音を繰り返しながら進むバイクが止まる。マジェスティという大型スクーターだ。
彼はガレージにバイクを入れるためにヘッドライトを消し、エンジンを切った。宮原のシルエットが月明かりに照らされて、闇夜に浮き上がっていた。
宮原はバイクから鍵を抜き、それをガレージのシャッターに向けると、シャッターが自動で開きだす。鍵と一緒にシャッターのリモコンをつけているようだ。
シャッターが開くのと同時に、ナイフが音を立ててコンクリートの地面に転がった。宮原はその音の先を目で追っている。五メートル先のブロック塀の影で、その光景を見ていた美奈は、すぐに飛び出せるように体制を整えた。宮原がナイフを拾ったらすぐに出ていくつもりだった。瀬野をコンビニで自殺に追い込んだ時も、美奈は扉のすぐ側にいてその様子を見ていた。出来るだけ近くに居なければならないのだ。
だが宮原はナイフを拾わなかった。ずっと金属音がした方向を見てはいたが、バイクを押してガレージの中へ入っていく。ガレージの中は、縦に車が二台余裕入れるほどのスペースがあった。一台、すでにレクサスが停められており、その前にマジェスタを宮原が停める。今回は失敗してしまった。美奈はそう思った。しかし、宮原はバイクを置くと、ナイフが転がった方へ歩いた。
美奈は被っているパーカーのフード部分を手で押さえた。走った時に、風圧でフードがずれて顔が見えないように。
宮原がナイフを拾う。
次の瞬間、美奈はブロック塀の影から身を乗り出し、彼との約五メ

ートルの距離を一気に縮めた。真っ黒なパーカーを着た美奈の姿は、切り取られた夜の闇が動いているようだった。
宮原は、美奈がすぐ側に来るまで、彼女の姿に気付けなかった。

学校内にある「千彩」という食堂は、全面ガラス張りになっていて、四時限目の講義に向かう学生たちが足早に校内を行き来しているのが見える。対照的に食堂にはほとんど人はいなかった。
英二はコーヒー、達也は紅茶の入ったコップを口に着けたり離したりしながら、流れる学生たちの人混みを眺めていた。時折、「おっあいつ可愛いな」と達也が嬉しそうに言う。達也がどの女のことを言っているのかはだいたい見当がつく。東門の方からダラダラと歩きながら講義へと向かっている三人組の女のどれかだ。皆、一様に派手な化粧と無駄な露出が目立っている。その女性らの姿は、男性を意識したファッションだと英二は決め付けている。
英二と達也の女性の好みは大きく違っている。英二は清楚でおしとやかな女性が好きだった。そのため女性問題では彼と争うことはないだろうと英二は思っている。
予想通り、達也はその三人組を目で追っている。彼女達が消えるまで、達也の視線は女達に絡みついたままだった。
「どの子がよかったんだ？　一番前に居た、スカートが極限に短い子か？」
　英二がそう尋ねると、達也は「その子プラス、一番手前に居た胸の大きな子だ」と言って笑い、「できれば一度お相手願いたい」と付け加えた。
　英二と達也は四時限目の講義が急に休講になり、暇を持て余していた。たまたま通りかかった食堂の様子を見て、立ち寄ってみることにした。
食堂内は清潔感があるし、ガラス張りの窓から流れる太陽の光が暖かく心地いい。有線からながれる日本人の歌うＨＩＰ－ＨＯＰさえなければよかったと英二は思った。

英二は、マグカップに入ったわずかなコーヒーを一気に口に含んで、胃に流し込む。もうぬるくなってしまった液体が喉を通って行く。

その時、達也が英二の後ろ側の方を見て目を見開いたかと思うと、すぐに目を細めて顔を突き出した。何かを確認するように見ている。達也が見ている方を、英二が振り向こうとした瞬間、彼の斜め後ろのガラス窓を誰かが叩いた。ゴンッゴンッとガラス窓全体に響くような音が鳴る。その音は食堂内に居た数人の学生の注目を誘った。

窓ガラスの向こうに居たのは直海だった。彼女は英二に向かって笑顔で手を振っていた。笑うと、大きな彼女の眼は針のように小さくなる。

「直海！？」

英二はまだ唇に着けていたマグカップから、言葉をこぼすみたいに言った。

その言葉に、達也は怪訝そうな顔を目ながら「ナオミだと？」と言う。

直海は、小走りで出入り口の方へ行って、食堂の中に入って来た。英二は、急いで達也に直海のことを話した。彼女が英二を三枚堂だと勘違いした理由、そして彼女が自分に惚れているというようなことを英二は早口で簡潔に達也に伝える。彼女は、復讐のために近づいてきたのではないと説明した。達也はその説明に満足している様子は無かった。

「英二くん」

直海は入口の辺りから、はにかむように笑いながら名前を呼んで、小さく手を振る。英二たちが居る所から入り口までは三メートル程離れている。

直海とはここ数日間、毎日電話で話していた。ほとんどがたわいない話だったが、幸せだった。いつも直海から決まった時間に電話がかかって来る。だが、三十分程電話をしていると、急に彼女が「もう切らなくてはいけない」と言って、電話を切ってしまう。

彼女が電話代を気にしているのだと思った英二は、こちらから電話を掛けようかと提案したが、断られた。直海は電話を掛けられる時間は決まっているし、どうしても自分から電話をかけたいと譲らなかった。

直海は英二たちが座る席の横に来て、達也を見ると「はじめまして、直海です。垂直の直に、海水の海で直海です。よろしくね」と英二と初めて会った時と同じような挨拶をする。

達也は直海を観察するように、上から下、下から上へと見回してから「どうも達也です」とぶっきらぼうに答えた。明らかに疑いの目を彼女に向けている。

「ねぇ英二くん。夜に、電話で言おうと思っていたんだけど、今度映画を見に行かない？」

「あぁ、いいよ。どの映画が見たい？」

「実はね、もう決めてあるし、チケットもコンビニで取って来たの。もしも行きたくないって言われたら嫌だから、当日まで何の映画かは内緒にしとく」

「行きたくないわけないよ。絶対に行くよ」

英二がそう言うと、直海は「本当に！？　約束だよ」と嬉しそうな笑顔を作った。直海の自然と湧き出すような笑顔を見ていると、英二は彼女に魅かれていく。

「じゃあ、チケットの片方を渡しておくね」

「直海が両方持っていてくれてもいいのに」

「だって、お互いがチケットを持っていた方が約束したって気持ちが強くなるでしょ？　それに、なんだかワクワクするじゃない？だけどチケットに書いてある映画の題名は見ちゃだめだよ。当日までのお楽しみだからね」

直海はそう言ってから「日にちは後日連絡するね。英二くんからは電話しないでね」と付け加えて入って来たドアから外へ出ていった。

英二はその後ろ姿をずっと目で追っていた。彼女の後姿なら何時間

眺めていても飽きないのではないかと英二は思った。
　英二は彼女の姿が見えなくなってから、達也に目をやった。明らかに不服そうな表情をしている。それから「へ」の字に曲げた重たそうな口を開いた。
「本当にあの女は大丈夫なのか？　やっぱり彼氏を寝とられて、俺と浮気することを企む女じゃないのか？　もしかしたらお前に近づいて来たことにも、なにか裏があるのかもしれない」
「ちょっとまてよ。あの子はそんな子じゃない。だいたい、自分の彼氏が浮気して、その浮気相手の女の彼氏とセックスすることで、仕返ししようなんてする奴がいるのかよ？　それじゃあ、そいつが損しているだけじゃないか？　それにその女がナオミっていう名前かどうかも曖昧なんだろ？」
「まぁ、確かにそうなんだけど。その女の名前は前使っていた携帯にしか入ってなくて、捨てちまったから、確認のしようも無い。だけど、実際にそういった考え方の人間がいる。“目には目を、歯には歯を”っていう精神の持ち主なのさ」
「直海は人を騙すような子じゃないよ」
「でもなぁ、どうも信じられないな。俺は、いろんな女と関係を持ってきたから分かるんだ。あの女の雰囲気は人を騙しているというか言うか、何かがバレることを恐れているっていうか……」
「達也、いい加減にしろよ。お前の考えが偏っているんだ。お前の偏った価値観で、直海にまで疑いを掛けないでくれ。それに、女性を性欲のはけ口としか考えていないお前は、適当にしか人と接したこと無いんだろ？　そんなお前に、人の考えを読み取る力なんてあるのかよ」
英二は強めの口調でそう言った。英二が達也の前で声を荒げるのは珍しいことだった。達也は嘘をつかれたように目を見開いて英二の方を見た。やがて達也に、怒りに似た表情が浮かんだ。
「わかったよ。そうだな、疑うのはよくない。じゃあ、ハッキリさせよう。あの女がどんな女か。俺が見てきてやるよ」

そう言って達也はマグカップを持って立ち上がり、直海が出ていった方とは反対側にあるドアの方へ向かった。出入り口の近くに設置してある棚にマグカップを返却して、達也はそのまま出ていった。

「勝手にしろ……」

英二はそう呟き、腹の底から湧きあがる怒りを押し戻してやろうと、コーヒーのマグカップに口をつける。だが、コーヒーはもう一滴も残っていなかった。

不審な電話が携帯にかかって来たのはその日の夕方だった。ちょうど、自分のマンションの部屋へ戻り、コーヒーを飲むために薬缶に火を掛けていた。さっき飲んだばかりだったがコーヒーが飲み足りないような気がしていた。達也とのやりとりでイライラしていたこともあり、コーヒーを淹れることで落ち着きを取り戻したかった。いつもコーヒーはペーパーフィルターで淹れている。沸いたお湯を薬缶から細口ポットに入れ替える。マグカップの上に黒い陶器のドリッパーをセットしてフィルターを乗せる。そこに挽いた豆を適量入れる。次に、挽いた豆全体を蒸らすように、豆全体にお湯をかけてから数秒間置いておく。挽いた豆が湿った状態になるのを待ってから、さらにお湯をかける。この時、豆から空気が出てきてしまったら、蒸らし方が足りない証拠だ。もしそうなったときは、英二はその豆を捨て、もう一度最初からやり直すほどこだわりをみせる。お湯は円を描くようにかけていく。ペーパーフィルターに直接当てて濡らしてしまうのもよくない。英二は自分自身をガサツな人間だと思っているが、こだわることにはとことんこだわるタイプだった。こうやって淹れたコーヒーは味が濃く、重いパンチを舌に残して胃の中へ消えていく。それが何ともたまらない。

この豆は、ショッピングセンターのコーヒーショップで入手したルワンダ産のものだ。

ルワンダは十数年前まで酷い内戦が続いていた地域だ。コーヒー豆を輸出できるような状態ではなかったが、内戦が終わった近年には、

コーヒーショップでもよく目にすることができるようになった。ルワンダ産のコーヒー豆はコクが程良く強い。特に、アラビカ種の豆は絶品で、英二はすぐにそのコーヒー豆の虜になってしまった。ちょうど円を描きながら、ペーパーフィルターに乗せた豆にお湯をかけているときに、ポケットの中の携帯が鳴った。英二は、携帯の音に神経を逆なでながらも、落ち着いてポケットから携帯を取り出して画面を見る。携帯の画面には知らない番号が表示されていた。番号は携帯電話から掛けられたものでは無く、固定電話からの着信のようだ。英二はコーヒーを淹れるのを一時中断し、電話に出る。

「もしもし」

『とめ……て』

携帯を当てた耳元からは聞き慣れない女性の声が聞こえた。

「はい？どちらさまですか？」

『かのじょ……を……。もう、だれもころした……ない』

そう言い終わると、受話器を力いっぱいに打ち付けるような音が聞こえて、電話は切れてしまった。

「くそ、いたずらかよ。俺がコーヒーを淹れているときに電話なんかしやがって」

英二は淹れかけのコーヒー豆をペーパーフィルターごとゴミ箱に捨てた。達也のこともあり、英二はいつもより苛立っていた。英二は、もう一度はじめからコーヒーを淹れなおすために準備し始める。英二はコーヒーを淹れることに妙なこだわりを持っていたため、途中で中断してしまった時は、始めからやり直さなければ気が済まなかった。

次の日の昼休み、いつもの時間に達也は一号館の最上階に来なかった。英二は一人で煙草を吸って街の様子を眺めている。英二と達也は、いつもここでどうでもいい話をして過ごしていた。一人だけの、この空間は寂しいものだった。風が微かに窓を揺らす音だけが響く。孤独には慣れたはずだったが、不安は容赦なく英二

に忍び寄って来る。
英二は自分の霊能力を人に教えることはない。達也もそれをしらない。秘密を共有できる人が多ければ、それだけで不安や孤独は解消されるはずなのに、英二は彼に話す気には今までなれなかった。

英二は、幼いころから霊体を破壊していた。初めて霊体を破壊したのは六歳の頃だった。
彼は一般的な家庭に育った。次男で、兄と弟の三人兄弟だ。三人の兄弟は特に仲がいいわけでも、悪いわけでもなかった。お互いに干渉し合わない兄弟だった。父親も母親も三人兄弟の誰かを特別扱いすることもない。平等に愛情を注いでいた。だが、二人の両親は霊の存在や霊能力に関しては、全く信じてはいなかった。英二の家庭は代々同じ宗教を信仰していた。ある一部の地方だけで根強く信仰されている宗教である。
父親も母親も同じ宗教を通して出会い、結婚した。というよりも、結婚させられたと言った方が正しい。
その宗教は強い一神教であり、他の神秘的な存在を否定している。霊などの存在を信じることもご法度であった。霊などという存在を信じていない両親は、英二が霊を見ることができるということを信じなかった。それだけではなく、英二が霊体を見たといえば、両親は激怒し、英二を叩くこともあった。英二はその度に自分のすべてを否定されているような気がして、絶望感を覚えた。幼いころの彼は、霊が見えている自分を自己否定し続けた。両親から「こんな嘘つきな子を生んだ覚えは無い」と言われたことを、彼は霊を見る度に思いだした。
それはやがて、脳の奥の方に大きな傷を作り、彼のことを苦しめ続けた。
六歳になった英二は、自分の手から白い糸がのびているのに気づいた。彼は驚いて母親にそのことを話した。だが、その頃の母親は、彼が言う霊的な話は無視するようにしていた。両親は、親族に相談

して、宗教の偉い教祖から助言をもらっていた。教祖は「息子さんは両親にかまって欲しいから霊が見えるという嘘をついているのだから無視しなさい、やがて嘘をついてもかまってもらえないと気づけば自然と嘘をつかなくなります」というようなことを二人に言っていた。もちろん両親はそれを信じ、実行した。

英二は、自分の手から現れる白い糸が嫌でたまらなかった。一度だけカッターナイフで掌の皮膚を切ったこともあった。そうすればその白糸も切れてしまうとおもったからだ。だが、白い糸は切れることは無かった。

両親からの否定は、英二の中で強い自己嫌悪に変わりつつあった。

ある時、英二よりも二つ年上の近所の女の子が事故で死んだ。家が近いこともあり、時々英二はその子に遊んでもらっていた。英二は彼女の葬式で初めて霊体を破壊した。

その子の霊体が、助けを求めるように英二に近寄って来た。英二は個室のトイレへ行って、女の子と話した。話しているうちに、英二は女の子に触れなければいけないような気がし始めた。手の平に沢山の白い糸がのびていた。白い糸は自然と女の子の霊体に絡みつき、気づくと英二と女の子は一つになっていた。女の子は必死に絡みついた糸をほどこうとしていたが、その度に英二の体の中に吸い込まれていく。そしてその時初めて英二は霊体を破壊することになる。とても恐ろしいことをしているような気がして、罪悪感が英二の全身に広がっていった。子供だった彼は、警察に捕まってしまうのではないかと怯えていた。何日も彼の心は恐慌状態であったが、彼を咎める者は結局誰も現れなかった。

女の子を体の中で破壊した行為に罪の意識を感じながらも、彼は誰からも叱られはしなかった。この行為が悪いことではないと、英二は確信した。

それ以来、彼は霊体を破壊した罪悪感よりも、あの時得た快感を思い出すようになっていた。

霊体を破壊した時、今まで両親に否定され続けた自分を、彼は自分

自身で肯定することができた。お前は嘘つきでは無いと誰かが言ってくれたような気がした。
それから破壊の快感に取り憑かれた彼は、いくつもの霊体を破壊した。両親に否定されても、誰も自分を信じてくれなくても、英二は霊体を破壊することで、満たされることができた。
英二は、自分が霊体を見ることができるということを公言しなくなったのもその頃だった。

霊体を破壊することは、自身の存在を確認することのできる唯一の行為になっていた。だが、その一方で霊体を見ることも破壊することも、どこかで恥ずかしいことだと英二は感じていた。だから、人間関係の中で、彼は本来の自分を包み隠さなければならないことばかりだった。達也にも自分の能力のことに関しては一度も話したことはなかった。
誰にも自分自身の本当の姿を見せることができないというのは、同時に誰も信じることができないということだった。英二はその孤独の中で生きてきた。もう慣れたつもりだった。

煙草の火が消えると、寂しさを紛らわすように英二は次の煙草に火をつけた。
ちょうどその時、後ろの階段の方から誰かが登って来る足音が響いてくる。もうすぐ三時限目の講義が始まるというのに、誰がここに登ってきているのだろうかと英二は思った。
英二はのぼって来る人物とこの空間で二人きりになるのはバツが悪いと思い、煙草を携帯灰皿に押し付けて、この場所から離れる準備をした。
階段をのぼって来たのは達也だった。
「なんだ、お前か。今日は遅かったな」
英二は何も気にしていないというような感じで言った。
「昨日のことなんだけどさぁ……」

達也は口元にうすら笑いを浮かべて言った。昨日のことを謝ろうとして、恥ずかしさから、はにかんでいるのではないようだ。どこか、人を馬鹿にしたようなうすら笑いだった。

達也はポケットに手を突っ込んだまま、英二に近寄って来る。彼の自信に満ちた表情が、英二を不安にさせた。

「なんだよ。昨日のことって」

「直海っていう女のことだよ。昨日あれから、あの女の後をつけてみたんだ」

「お前何やっているんだよ」

「英二、お前が勝手にしろと言ったんだろ？　だから勝手にしたのさ」

「そんなことして、俺に嫌がらせしたいのか？」

「心配してやっているんだ。あの女は、何か隠しているって俺が言っただろ？　俺は人を見る目に長けている。特に女のことに関してはな。あの女は何か隠しているって俺が言っただろ？　後をつけてみてわかったんだが、やはりあの女はお前の思っているような女じゃない」

達也は、自分は世界のすべてのことを知っていると言わんばかりの表情をしている。

達也は昨日のことを話し始めた。英二と食堂で別れた後、達也は校内をイライラしながら歩いていた。図書館の前で、直海がキョロキョロとあたりを見渡しながら歩いているのに気付き、達也はその後をつけた。直海に講義へ向かうような様子は無く、校内を観察しているように見えた。まるで観光客みたいだと、直海の姿を見て、達也は思った。この場所に初めて訪れたような好奇心を持っているようだ。

直海は講義へ向かうことなく、北門の方へと向かって歩いていく。

直海は北門にある、バス停からバスに乗った。達也も、それと同じバスに乗る。幸い、直海はバスの前方に乗ってくれたため、達也が乗り込んできたのには気づいていないようだった。

直海がバスを下りたのは、ＪＲの駅だった。達也も、気づかれないように、少し遅れてバスを降りる。
特急がとまらない小さな駅だった。その駅には車を止める駐車場は無く、自転車が止められている場所と、タクシーの一台分の停車スペースがあるだけだった。
直海は電車に乗るのだろうと達也は思っていたが、彼女はタクシー会社の電話番号と社名が書かれた広告用のベンチに座った。それは駅の建物の外に置かれている。
達也は少し離れた所から、直海の様子を見ていた。すると、急に意識を失ったように直海は目をつむり、首を傾けて眠り始めた。なぜこんなところで眠る必要があるのだろうかと達也は疑問に思った。
達也は、眠っている直海に少しだけ近づき、様子をうかがった。完全に眠っているようだ。
直海は五分ほどすると、顔を上げてから目を開ける。辺りをキョロキョロと見渡して、両手を額へ持って行き、頭を抱えるようなしぐさを見せた。
直海は携帯を見て、すぐにどこかへ電話をかけ始める。その後、バッグから鏡を取り出し、自分の顔を見て驚いたような顔をした。それから化粧道具を取り出し、派手なメイクを顔全体に施し始めた。彼女は、二十分もしないうちに仮面を被ったように、別人へと変貌した。
結局、駅の中には入らず、またバス停の方へ戻って来た。
何度か直海とも目が合ったが、彼女はとくに彼を気にしている様子もない。先ほど会ったばかりだったため、気づかれてしまったと思ったが、彼女は達也のことを忘れているようだった。
直海は、駅の近くのアパートや住宅が立ち並ぶ細い道を軽快な足取りで歩いていた。直海は途中で、煙草に火をつけて、白い煙を吐きながら歩いた。吸殻は、道の溝に捨てた。先ほどとは全く別人のようにも思えた。
住宅街の中にある、二階建ての小さなアパートに着くと、直海は一

階にある手前の部屋のインターホンを押した。数秒後に、中から男性が出てきた。その男性は外に出てきて、直海の頭にバイク用のヘルメットをかぶせた。直海は甘えるように、男の腹部に抱きついていた。付き合っていることは容易に分かった。二人は外に停めてあった、ＳＲ４００という黒いバイクにまたがり、体を密着させてどこかへ走り去った。達也はその様子を近くの住宅の物陰から見ていた。

「信じられないなら、あの女に聞いてみればいいさ。それにさ、あの女は食堂で、お前からは電話してくるなって言っていたよな。それって、自分の都合悪い時に電話してこられると困るからだぜ。確かにあの女は、俺が言っていた、復讐女ではなかったかもしれない。だが、お前に嘘をついていることは確かだ。きっと、そのうち金をせびって来るんじゃないか？　悪いことは言わない、あの女は止めとくんだな」

達也は英二にすべてを話し、勝ち誇ったような顔をして、口元を緩ませていた。

英二はその話を信じることはできなかったが、すべてを否定するほど直海のことを知らない。

だが、自分に言い寄って来る理由は何なのだろうか。直海にとって何の得があるのだ。英二の頭の中で悪い想像が膨らんでいく。

直海のまっすぐな目と、その言葉に嘘は無かったと信じたかったが、それも崩れ去ろうとしていた。

「直海っていう女が何を企んでいるかは知らないが、どうせろくなことじゃないだろうな。あの女と関わるのは止めとけ」

達也は、そう言ってから勝ち誇ったように階段をおりて行った。

達也が本当に自分のことを思って直海の後をつけたのかどうかは英二には分からなかった。だが、直海がどこか怪しいと感じたから後を追ったのだろう。

英二は電話を取り出し、直海の番号をアドレス帳から引っ張り出

した。電話するかどうか迷って止めた。達也が言ったことは真実だろう。彼があのようなことで、嘘をつくような奴ではないことを英二は知っている。

英二はまた煙草に火をつけて、肺を煙で満たした。肺から煙が押し出されると同時に、胸は直海のことでいっぱいになった。

「なんだよ。意味わかんねぇよ」

英二が、ため息をつくように言うと、肺に残っていた微かな白煙が辺りに漂ってからすぐに透明になって消えた。

伊坂から連絡があったのは、英二が近くのスーパーで夜飯を調達しているときだった。

英二は達也から言われたことがずっと頭に引っ掛かっていた。英二はスーパーの中を歩きながら、直海のことを考えていた。直海が何のために嘘をついているのか、何を企んで自分に近づいてきたのか、英二はそれを知りたかったが怖かった。もし直海を問い詰めて何かが明らかにされたとしたら、二度と彼女に会うことができなくなるかもしれない。信じたいが、彼女を信じることのできるような根拠が無い。彼女がどんな人間なのか、実際のところ英二は何も知らない。

考え事をしていたため、気づくと英二は飲料水が並んでいる前に、放心状態で立っていた。意識が曖昧になりながら直海のことを考えている自分に、英二は苛立っていた。直海が自分のことをあざ笑っているのではないかという妄想が、彼の中で広がっていく。

達也から直海の話しを聞いてから、英二はずっとこんな感じだった。英二は、むしゃくしゃする気持ちを、あの女の霊体を破壊することで解消したいと思っていた。あの女の霊体さえ破壊することが出来れば、直海のことなどすぐにどうでもよくなるのではないだろうか。あの霊体を破壊する妄想が、脳内から一時的に直海のことを忘れさせてくれた。英二は、何度もあの女の霊体を破壊する妄想を繰り返しながら店内を歩き回った。そうすることで、直海に騙されている

のではないかというストレスを和らげることができた。
英二は弁当と揚げ物とサラダとビールとコーヒーフィルターを買ってレジに並び、会計を済ませた。
買ったものを買い物袋に詰めているときに、ポケットの中で携帯が暴れる。英二は携帯をポケットから引っ張り出して画面を見た。もしかしたら直海からの着信なのではないかと思ったが、違った。着信は伊坂からだった。
「もしもし」
『助けてください。俺も殺されるかも。ちゃんと防犯カメラのデータも持ってくるから、あの女の霊を何とかしてくれよ。あんたなら出来るんだろ？』
伊坂の声は酷く震えていた。携帯に口をつけて話しているのか、荒い息が直接耳元に伝わって来る。それが鬱陶しくて、英二は携帯を耳から離したかったが話の内容は気になる。
「とにかく落ち着いて話してくれないか」
『宮原が、自殺しようとした。瀬野と同じようなやり方で死のうとした。宮原は瀬野の仲間だ。あの女の霊にやられたんだ』
伊坂は、頭の中に思いつく言葉を必死に吐き出しているように言った。
「“しようとした”ってことは、宮原ってやつは死んでないんだな？　まだ生きてるんだな？」
『あいつは死んでない。股間を刺して自殺しようとしたけど、救急車で運ばれた。命にかかわるような傷は負っていないみたいだ。きっとあの女の霊は、あいつらが暴行した女だと思う。次はもしかして俺なのかな？　でも俺はただ運転させられていただけで、なにもしてないんだ。頼むよ、俺のこと助けてくれ』
「わかったから、とにかく落ち着いて話を聞かせてくれ。暴行した女って誰か分かるか？　お前は、その女の霊について何か知っているんだな？」
『わからない、わからないけど、あいつら女を拉致してレイプして

いた。それを俺が手伝わされていた。後でわかったことだけど、暴行した女の中には自殺した奴も何人かいたらしい。きっと、そのとき自殺した女が瀬野や宮原や馬場を呪い殺しているんだ。性器を切り取ろうとしているところをみてもわかるだろ？　レイプした仕返しなんだ。でも、俺は何もしてないよ。本当だ』

伊坂の声は泣き声へと変わった。嗚咽が混じっている。

「助けてやる。だから、防犯カメラのデータと、出来れば瀬野と宮原と馬場の写真を持ってきてくれないか？」

伊坂は防犯カメラのデータと、自殺しようとした人たちの写真を持ってくることを約束した。防犯カメラのデータをコピーするのに少し時間がかかるようなので、英二は三時間後の七時半に伊坂と外で会うことを約束し、電話を切った。

英二の脳内は完全に、あの女の霊体のことでいっぱいになっていた。防犯カメラに映っていたという、ナイフをコンビニ内に落として行った女性は、あの女の霊体に憑かれている可能性は大いにある。だとしたら、防犯カメラに映っている女性を探し出せば、あの女の霊体に辿りつけるかもしれない。

瀬野と宮原はおそらく同じ霊体に襲われた。宮原を襲った時にも、防犯カメラに映った女性が関わっているとしたら、その女性はこの街に住んでいる可能性が高い。英二はそう考えながら興奮していた。英二は、ナイフを落として行った女性の顔が防犯カメラにしっかりと写っていることを願った。

もしも、映像が不鮮明な場合や、マスクやサングラスで顔を隠されていたら、あの女の霊体が憑いている女性を特定するのは不可能だろう。

霊体が人に憑いているとき、英二は霊体の匂いを感じ取ることができない。女性の顔が鮮明に映っていれば、あの女の霊体を探しだす希望が少しだけ湧いてくるだろうと彼は思った。

伊坂と会ったのは、ショッピングセンターの横に最近建てられた二

十四時間営業の漫画喫茶だった。漫画喫茶まで英二は自転車で向かった。
喫茶店に着いた時には、あたりは夜の色に染まっていた。車のヘッドライトや店の照明が眩しく感じる。
漫画喫茶は壁の全面が白塗りされており、清潔そうなイメージを無理に押し出しているように見える。近くにショッピングセンターや飲食店があるだけに、その明るい外観は不自然ではないが、その白さは周りの建物から浮いている。
駐車場には車が二十台以上も停めることができる駐車場がある。駐車場の奥の方に、伊坂が乗るワゴン車があるのが見えたので、英二はそちらへと近寄る。
車内に伊坂の姿が見えた。ハンドルを強く握る彼は、見えない何かに怯えているようだった。伊坂は英二の姿を見つけると、親にすがる子供のような顔した。動物が、巣穴から出てくるように慎重に辺りを気にしながら、車から伊坂が出てくる。
「結局、防犯カメラのデータの保存方法がわからなくてさ、店長が保存しているＵＳＢメモリーを持ちだしてきた。店にはバイト店員だけで、店長がいなかったから、机の引き出しから簡単に取ってこられた。家で見たけど、やっぱり女の霊は映ってなかった。それでも、あんたには何かわかるのか？」
伊坂は手に握りしめていた赤いＵＳＢメモリーを、英二に見せた。
　英二は先に写真を見せるようにと言って、伊坂が持っていた写真を受け取った。写真は二枚ある。一枚目は伊坂ともう一人男性が映っている。それが瀬野だと、伊坂が教えた。
瀬野は、髪が黒くオールバックにしている。舌を出し、目を見開いてカメラの方を睨んでいる。
二枚目には三人の男性が映っていた。体の大きい金髪の坊主が馬場で、頭の右側だけをコーンロウに編み込んだ男が宮原だと伊坂が英二に教える。写真に写るもう一人は瀬野だった。英二はその男たちの顔を見て、確信した。あの女の霊体は、この男たちにレイプされ

て自殺した女性だ。あの女の霊体に首を絞められているとき、英二は男たちから暴行される女性の映像が頭に流れ込んできた。それが、女の生前の記憶だということは英二にもわかった。その記憶の映像には、写真に映る瀬野と宮原と馬場の顔があった。

英二は伊坂に車の中を見せるように要求した。伊坂は困惑した顔を見せたが、英二の指示に従って、ワゴン車の後部座席のスライドドアを開けた。英二は車内を見渡し、あの女の霊体が英二に見せた記憶と照り合わせる。記憶の映像には確かに、この車の車内が映っていた。この車の中で、あの女の霊体は生前に暴行されたのだろう。

英二は、目の前に居る伊坂を殴り倒してやりたいという衝動にかられた。なぜ、そう感じたのかは英二にも分からなかったが、自分のモノを汚された気がして怒りを覚えた。英二は何も言わずに車のスライドドアを閉める。

C

英二は漫画喫茶の中に入ろうと、伊坂を促した。目の前に居るレイプの共犯者に怒りを覚えながらも、英二は冷静さ失わない。あの霊体を見つけ出すには、この男の協力が必要なのは分かっていたからだ。

あの女の霊体を破壊することができれば、今英二が抱いているすべてのモヤモヤが解消するような気がした。直海や達也に関する、嫌な感情を、霊体と共に破壊することができると感じていた。

今までもそうやって、英二は自分の感情を破壊することで、コントロールしてきた。だからこそ、霊体破壊行為は中毒性を帯びていた。あの女の霊体を自分の中で破壊し、孤独や疑念といった感情を一刻も早く破壊したい。その衝動だけが、今の英二を動かしていた。

防犯カメラの映像に霊体が映っていたとしても、それを見ただけでは霊体にたどり着けないと英二は思っていた。心霊写真や、動画映像から霊体がどんな者なのかを判断できる霊能力者もいるが、英二にはそういったことは出来ない。

彼が出来るのは、肉食動物のように霊体の匂いをその場で嗅ぎつけ、破壊することだけだ。だが、映像にはナイフを落としていった女性が映っている。その人物にあの女の霊体が憑いている可能性は非常に高いのだから、女性を特定することで、あの女性の霊体を見つけ出せるのかもしれない。

英二と伊坂は、漫画喫茶の受付カウンターで身分証明書を提出して会員カードを作ってから、中に入った。

店内は仕切の薄い壁で区切られた小さな部屋がいくつもあった。貧相な板で壁が作られ、叩いたら簡単に穴があいてしまいそうだ。仕切りの壁は英二の背の高さくらいしかなく、背伸びをすれば仲が覗

けそうだった。
カウンターで渡されたクリップボードに挟まれた伝票に、部屋番号が書かれていた。仕切りの壁で区切られたその部屋は、二人用ではあるが、思った以上に狭かった。信頼関係が築かれていない二人にとっては辛い。カップル用なのだろうと英二は思った。
部屋の中にはパソコンが一台と、ヘッドホンが二つある。大きな黒いソファーがその空間のほとんどを占めている。
なぜかポケットティッシュが沢山入れられた籠が置かれていた。ポケットティッシュには出会い系サイトの広告が印刷された紙が入っている。
パソコンの電源が点くと、英二は待ちきれないと言った感じでUSBメモリーを縦に置かれた本体のタワーに差し込んだ。
マウスを操作し、データフォルダを開くとすぐに動画が流れ始めた。動画は、九区画に分けられている。英二は、右下の一区画の画面に注目していた。店の後ろにあるトイレの前に設置されたカメラから撮られている映像だ。雑誌コーナーと窓ガラスが映っている。その向こう側に出入り口の扉があった。レジに居る伊坂や瀬野は映っていない。画面の下に時刻を示す数字が表示されていて四時三十二分二十一秒と表示されている。それから三十秒ほど経ったが、画像に変化は無い。だが、四時三十二分を過ぎたあたりに、出入り口のドアを開けて一人の女が店に入って来た。雑誌コーナーの方へ曲がって来たので、カメラには女の正面が映し出されている。黒いパーカーのフードとサングラス。明らかに身元を隠そうとしている意図はわかる。
動画はコマ送りになっていて、画像は荒い。英二は女の姿を、目を細めて見た。女が防犯カメラの方へ近づくにつれて、その姿がハッキリとしてきた。
「まさかな……」
英二はその女の姿を見て、あることに気付いた。女が着ているオーバーサイズのパーカーを見た記憶があった。銀色に輝くロゴがフ

ードの所に描かれている。
英二はマウスを操作し動画を止めて、長い間その女の姿を見ていた。その女が着ているのは美奈の部屋にあったあのパーカーと同じだ。メンズサイズのパーカーだったので、妙に記憶に残っている。
英二はあることを思い出した。彼は美奈の家で、瀬野の事件について触れた。あの時はまだ、ただの強盗事件だと英二は思っていた。今思えば、あの時の彼女の反応は不自然なものだった。
『へぇ、そうなの。店員は刺されて生きているのかしら？』
彼女はそう言った。何故、美奈は瀬野がナイフで刺されたことを知っていたのだろうか。強盗があったと言っただけで、店員が刺されたという発想にすぐに結びつくだろうか。英二はそう考えてから、もしかしたらテレビで事件が報道されていたのかもしれないと考えた。だが、それもすぐに打ち砕かれる。
『ずっとブルーレイで海外ドラマ見ていたから、わからないわ。ちょっと、テレビに変えてみましょうか』
美奈はそう言った。その言葉からテレビからはコンビニの事件について情報を得ていないことが分かる。
美奈の家で感じた霊体の匂いを思い出していた。やはり、自分が逃がした女の霊体だったのかもしれないと英二は思った。それは確信に近いものだった。
美奈はあの霊体に操れている。あの霊体が、美奈を操ることぐらい簡単にできるだろうと英二は思った。
それに、美奈の様子はずっとおかしかった。病的なほどに、色の無い美奈の顔を英二は思い出していた。
「宮原はまだ死んでないって言ったな？」
「あぁ、病院に運ばれて一命を取り留めた」
「伊坂、お前はどこでその情報を知ったんだ？」
「テレビで報道していた。地元の情報を流している報道番組で見たんだ。その後で、別の友達から連絡があった。馬場が一か月前に死に不審な死を遂げ、さらに瀬野と宮原まで。みんな、その死を不審

がっている」
英二は立ち上がり、すぐにその部屋を出た。伊坂は、何が起きたのか分からないまま英二の後を追ってくる。
美奈に憑いている霊体が、宮原が生きていることを知ったら、もう一度宮原の命を狙うだろう。
霊体が自分をレイプした人間を殺すことを、英二は見逃すことができたかもしれないが、美奈がこの件に関わっているとなると話は別だった。美奈は無理やり霊体に操られて人殺しの手助けをさせられている。それに気付き、英二はすぐに美奈の元へと向かった。

英二は、美奈の家に来ていた。美奈の携帯に何度電話しても、彼女は出なかった。英二は自転車を坂の下に停めて、美奈の家へと向かった。美奈の家の敷地内に、家族の所有している赤い車が止められている。家の中に居るのは父親ではない。父親ならＢＭＷに乗っているはずだ。以前、美奈が父親のＢＭＷ好きに困っていると言っていた。早い時は一年、長くて二年で車を買い換えてしまうらしい。
美奈の家に停められていたのは赤い普通自動車だったため、英二は母親が家の中に居ると判断した。
ビビが、英二に向かって嬉しそうに吠えた。
躊躇いながらも家のインターホンを押す。家の中から反応があるまで二十秒程度であったが、それが酷く長い時間に感じた。中から出てきたのは直海の母親だった。綺麗に染められカットされた髪や、よく手入れしているのか肌も綺麗で四十台にしてはとても若々しい。
「あら、えーっと」
美奈の母は、英二を見ると記憶の中に何かが引っ掛かったのか、悩むような顔をしていた。それから、脳内で何らかの扉が開かれたらしく、彼女は小さく口を開け、目を少し細めた。だが、まだ完全には英二のことを思い出せていないようだ。
「あの、英二と申します」
英二は、彼女が記憶を引っ張り出せるようアシストのために名乗

った。
「あぁ、やっぱり英二くんね。前に、美奈と付き合っていたでしょ？　でもお引っ越ししたのよね？」
英二は簡単にこの土地に帰ってきた経緯を話し、美奈が家に居るかどうかを尋ねた。美奈の母親は「ちょっと待っていて、呼んでくるから」と言って階段がある方向へ向かった。階段をあがる足音がする。
数十秒後に母親は、玄関に戻ってきて、残念そうな表情を作ってみせた。
「ごめんね、今は珍しく出かけているみたい。あれ以来はあんまり出かけたりしなかったのに」
「あれ以来ってなんのことですか？」
「いや、何でもないの」
美奈の母親はしまったというような顔をして見せた。本当にうっかり言ってはいけないことを口からこぼしてしまったようだ。
「急用なので美奈が……美奈さんが帰ってきたら連絡をしていただきたいのですが」
「え、えぇ良いわよ。じゃあ、紙とペンを持ってくるからそこに連絡先を書いて」
美奈の母親は一度リビングに入り、キャラクターが右隅に描かれたメモ用紙とボールペンを持ってきた。英二はそこに自分の電話番号を書いた。
「あと、ご自宅の電話番号を教えていただけませんか？　こちらからも後で連絡させていただきますので」
「えぇいいわよ。とても急ぎの用事なのね」
美奈の母親が電話番号を口で言い、それを英二が携帯に入力し、アドレス帳に登録した。
英二は美奈の母親に礼を言い、家を出た。
英二は、美奈の家を出たところで、伊坂から携帯に連絡が入った。宮原が入院している病院に着いたということだった。

英二は伊坂を、病院に行かせていた。宮原の安否を確認させ、彼に誰も近づかせないようにと頼んでおいた。伊坂は駄々をこねるように、英二の頼みを拒否しようとした。だが、英二が激しい命令口調で言うと、伊坂は大人しく宮原が入院する病院へと向かった。

美奈が瀬野を殺し、宮原を殺すことを手伝わされたとしたら、彼女は強い精神的ショックを受けているかもしれない。いくら操られていたとはいえ、人を殺すことを手伝わされたとなれば美奈は自分自身を責めるだろう。

美奈は、自分が霊体に憑かれてしまい、周りに迷惑をかけてしまうことに罪の意識をいつも感じていた。霊体に憑かれているとき、美奈は正気を失ってしまう。

英二はいつも「美奈は悪くない」と慰めていた。だが、彼女はいつも「私なんて生きている価値が無い」と自分を責めていた。

美奈を助けなければならないと英二は思った。それは、同じ霊能力を持つ仲間としての責務と、中学生のとき身勝手な理由から彼女を突き放した罪責感からだった。

英二は、美奈と付き合っていた頃も同じような気持ちを持っていた。恋や愛といった感情がゼロだったわけではない。彼女に恋をしていたのは間違いない。だが、それ以上に同じ問題を持つ仲間としての意識の方が強かっただろう。お互いの弱い部分を補い、強い部分で助け合った。

だが、霊的問題に関しては、美奈の方がひどい被害を受けていた。英二は霊体を狩る側で、美奈は狩られる側だった。英二にとって美奈を守らなければならないという責任は、どこかで鬱陶しい感じがしていた。だから、この街を離れることになった時、寂しさと同時に、肩の荷が下りるような安堵感があった。だがそれも、いつの間にか罪悪感へと変わった。自分は美奈を捨てたのだ。英二はそう思い、自身を責めていた。

本当なら、家族と離れこの街に残る選択肢だってあった。家族と離れることは英二にとって、特に苦では無い。だが、英二は美奈から

離れることを選択した。無意識のうちに自分に課していた責務から、彼は逃げ出したかったのだ。
彼女を守らなくてはいけないという責任感が、英二の中で燃え上がった。あの女の霊体を破壊し、快感を得ることなどどうでもよくなっていた。

「美奈、英二くん帰しちゃったけど、よかったの？」
「うん、いいの」
美奈は自宅の、自室に居た。布団を頭まで被り、閉じこもっていた。母親が、二階に上がって美奈を呼びに来たときに、「英二には今出かけていると言って」と母親に伝えていた。
「人に会いたくないのも、外に出たくないのもわかるけど、たまには……」
「もう、ほっといてよ！」
美奈は母親が言う言葉を遮って叫んだ。母親は、怪訝そうな顔を美奈の形に膨れ上がった布団の方に目を向けてから、ドアを閉めた。

母親が二階から階段をおりていく足音が聞こえた。
（きっと気付かれたのよ。もうこんなことは止めましょう）
（ねぇ、あなた、私の意識が眠っている時、彼に連絡なんてしてないでしょうね？　曖昧だけど、誰かに電話しているような記憶があるのよ）
（私……そんなことしてなんかないわ）
（どうかしらね。あなたは弱気になっている。本当はこんなこと止めたいって思っているんでしょ？　昨日の失敗だってあなたのせいよ）
（た、たしかに昨日は上手く宮原をコントロールできなかったけど……）
（ふざけないで！　あなたが躊躇ったりしなければ、昨日ですべては終わっていたのよ）

（ごめんなさい。ごめんなさい。そんなに叫ばないで。恐怖に負けてしまったの、怖かったの）
（必ず次で終わらせるの！）
（わかったから、わかったからそれ以上叫ばないで、全身に響くのよ）
美奈は布団の中で震えながら蹲っていた。
昨日、宮原を家の前で殺害してすべてが終わるはずだったが、失敗してしまった。宮原に握らせていたナイフは肋骨部分を二度刺し、股間を一度刺しただけで、折れてしまった。
宮原の必死の抵抗で、上手く彼を操ることができなかった。また、強度の低い果物ナイフもだめだったようで、すぐに折れてしまった。
昨日、宮原は自分の体を刺したて地面に転がった後、美奈の方を苦しむような声を上げて見ていた。顔を見られただろうかと美奈は不安になる。
人の死の場面を見るというのは、とても恐ろしい事で、今でも瀬野が股間を刺して血が滝のように流れ出す映像が、何度も美奈の脳内を廻った。その度に、鈍器で頭を殴られたような痛みが走り、最近では上手く眠ることが彼女はできない。
その恐怖を背負ってまで、何故自分がこんなことをしなければならないのかという葛藤があった。また罪悪感が無かったわけではない。だが、霊体が人を殺すのであって、自分が直接手を下すわけではない。自分は霊体の手助けをしただけだという考えが、美奈の罪悪感を曖昧にしてくれた。
自分が行っていることは、彼らが自分に行った行為に対する正当な仕打ちであると、美奈は自分に言い聞かせた。そうやって、幼い頃から自分の中に、築き上げられてきた正義感や道徳を破壊することができた。結局、正義や道徳は綺麗事にしか過ぎなかった。
だが、それでも一向に、美奈の心からは恐怖が消え去ることは無い。
瀬野と宮原を殺すために買っておいたナイフが一本残っていたが、それは使わないことにした。もっと殺傷能力の高い刃物を使うべき

だと美奈は思っていた。

宮原の病室は、五階の一番奥の個室だった。受付で、宮原がどこに入院しているかを聞いた。英二が、宮原の居る個室の前まで来ると、伊坂が不安そうにキョロキョロと目線を泳がせながら立っていた。

「誰か、ここへ来たか？」

「おい、遅いじゃないか。俺だって狙われているかもしれないんだ。宮原の友人が三人来たが、一応追い返しておいた」

「あの防犯カメラに映っていた女は来なかったか？」

「女は来てない、全員男だった。それに、その女が来ても防犯カメラの映像からじゃ顔が分からない」

伊坂の目は、英二と喋っているときもずっと周りを気にするように動いていた。

「宮原に会わせてくれ」

「宮原は、今苛立っている。あまり刺激しないでくれ」

伊坂はそう言って、個室のスライドドアを開いた。ベッドの布団が盛り上がっており、そこが微かに上下している。一人部屋にしては広かった。ベッドが三つ置けるくらいの広さがある。出入り口から見て右側には人が二人は入れそうなクローゼットがある。

テレビは液晶だったし、空気清浄機まで設置してある。この病室は、ホテルの一室のようだった。それなりに、料金の高い部屋なのだろうと英二は思った。

「誰だ？」

ベッドから宮原が顔を出した。彼も伊坂と同じような怯えた表情をしている。言葉には怒りの籠ったような刺があったが、そこには明らかな怯えが見え隠れしていた。

宮原のヘアスタイルはコーンロウでは無かった。写真とは違い、髪型は両サイドを刈り上げており、残りの黒髪にパーマをかけている。その顔は、あの女の霊体の記憶の中で見た男に間違いは無かった。

英二は、胃液が喉のところまで上がってきて、熱くなるのを感じた。あの女の霊体は、英二に悲しみや苦しみといった感情も、映像と同時に伝えてきた。
この男たちが、生前の女性の霊体にした行為に、英二は怒りを感じた。彼らが、狙われるのも当然だ。だが、美奈にこれ以上、あの女の復讐に付き合わせるわけにはいかない。英二はそう思った。
宮原は敵意のある目つきで英二の方を見ていた。伊坂が慌てて「さっき話した人だよ」と後ろから言った。
「瀬野の昔の友人で、霊能力者らしいな。本当かよ？」
「本当だ。君も霊に操られたのか？」
「わからねぇよ。だが、誰かが自分の体の中に侵入してくるような感覚があった。俺は急に体の自由を奪われた。それから、自分の体が自分のものでは無いみたいに勝手に動き出した。そして、落ちていたナイフで自分を刺した」
「操られていたんだな。ところで、その場には誰か居なかったか？」
「いたよ。パーカーを着た人物を見た。フードを被っていたけど、長い髪の毛が垂れていたから女だと思う」
「その女性は、霊に操られて、霊の手助けをさせられている可能性が高い。彼女を助けるためにも、宮原さん、ちょっと話を聞かせてもらっていいかな？」
宮原は困惑の表情を抱いたまま、小さく頷く。
宮原は霊体に襲われたという自覚があったため、話を聞くにも、英二は手を焼くことはなかった。
また瀬野の死や、馬場の死があったことも手伝って、宮原も伊坂も、簡単に英二を信じることとなった。
宮原は、自分のことを刺した時の状況を、英二に話した。
宮原は三年前から続けている居酒屋のアルバイトを終え、自宅に帰宅した。バイクをいつものようにガレージに入れようと、鍵と一緒にキーホルダーに着けているリモコンを操作して、シャッターを開けた。その時、足元で金属音がする。そこには、果物ナイフが落

ちていた。月明かりに照らされて、刃の部分が輝いている。宮原は一度バイクを車庫の中に入れてから、それを右手に取った。
何故こんなものがここに置いてあるのだろうかと疑問に思った。気づくと、後ろに女が居た。黒いフードを被った女だ。長い髪が右側だけフードから垂れて、胸の部分まで伸びていた。その女が、宮原の方に掌をかざした瞬間、彼はナイフを持つ手を肩の高さまで垂直に上げていた。体が自分の意志では動かなかった。自分の体が着ぐるみで、中に誰かが入っているような感覚だった。
その時、宮原は瀬野と馬場のことを思い出していた。瀬野は自分の股間を何度も刺して死んだ。馬場は自分の首を絞めて死んだ。自殺にしては二人とも不自然な死だった。ずっとそのことが頭に引っ掛かっていた。
宮原は咄嗟に「あぁぁぁー」という声を上げた。何とか抵抗しなければと思ったが腕の自由が利かない。宮原は必死に叫んだ。
宮原が叫んだ瞬間だけ、体の一部の自由が戻った。だが、腕は依然誰かに操られている。ナイフを持った手は、宮原の股間の辺りを襲った。彼は体を捻った。ナイフが骨盤の出っ張ったところに当たり、痛みが全身を襲った。自由の利かない右腕は、さらに宮原の下腹部を襲おうとした。宮原は叫びながら必死に胴体を捻り、ナイフをよけた。ナイフは足の付け根の横の方を掠った。熱した鉄を皮膚に押し付けられたような痛みが走る。
宮原は、自分の右腕を下して地面に倒れ込んだ。
その時、左腕が自由になった。宮原は、左手で右腕を掴んだ。だが、ナイフを持つ右手は股間の方へと向かっていく。左手では抑えきれず、一度だけ刃が彼の股間を襲った。刃が刺さった所から。ジーパンが赤く染まる。痛みがあったのかどう、宮原は分からなかった。
「やめろーやめてくれ！」
宮原は大声で叫んだ。だが、右腕に握られている刃物は、彼の体を何度も刺そうと動く。

宮原の抵抗も一瞬許されただけだった。再び全身の自由が奪われた。刃物を握る右手が、宮原を襲う。彼は必死に体を捻り、その刃をよけた。刃物はアスファルトに当たり、金属の乾いた音を立てて折れた。

その時、周りの住宅のどこかで窓ガラスを開ける音がした。宮原の叫ぶ声を聞いて、様子を見るために誰かが窓を開けたのだろう。宮原の目の前に居た女は、窓が開く音がすると、彼の前から離れた。女が離れるとすぐに、宮原の自由を奪っていた見えない力も消えた。女の顔は結局暗くて見えなかった。

数分すると、誰かが救急車と警察を呼んだらしく、サイレンが辺りに鳴り響いた。

宮原は自力で立てないわけでは無かったが、恐怖から足が震えてしまって力が入らなかったために、二人の救急隊員に担がれて担架に乗せられた。救急隊員が、宮原の自宅が目の前であることを聞き、両親を起こして、一緒に病院へ来るようにと促した。

宮原の両親は、驚きながらも、迷惑そうな顔を隠さなかった。

「君を殺せなかったのだから、まだあの霊体は君の命を狙っているかもしれない」

英二がそう言うと、宮原の顔に一層暗い影が落ちたようにも見えた。

「どうすればいい？　俺は今死ぬわけにはいかないんだ。どうしても守らなければならないものがあるんだ」

宮原は必死だった。彼の目は、生きたいという思いで染まっていた。

「とにかく、俺の言うことを聞いてくれ。いいね」

英二は宮原と伊坂を交互に見た。二人とも、真剣な顔でうなずく。

英二が、これからどうするかを彼らに話した後。廊下に館内放送が流れてきた。宮原の個室の中にも聞こえた。面会時間の終了を告げる放送だった。宮原のベッドの横にある、棚に時計が置かれている。時刻は九時半を回っていた。

その時、英二のポケット内の携帯が鳴った。美奈の母親からではないかと思って、英二は急いでポケットから携帯を取り出して、画面を確認したが、着信は美奈の家からでは無かった。
画面には「直海」の文字があった。英二は病室を出てから、携帯を耳に当てた。
『ヤッホー英二くん』
明るい声で直海が言った。英二は下唇を噛んだまま何も言わなかった。
『英二くん？　今、電話まずかったかな？　なんか遠くで放送の声が聞こえるけど、ショッピングセンターにでもいるの？』
電話に向こうで、英二の異変を察したように直海は動揺していた。
英二はわざとらしく、ため息をついて見せた。
「いま、市民病院に居るんだ。ちょっといろいろあって」
『英二くん、怪我でもしたの？　大丈夫？』
彼女の言葉がすべて嘘に聞こえる。本当は何一つ心配などしていないのではないだろうかと英二は疑っていた。
「お前は何の目的で、俺に近づいたんだ？」
『えっ？　何？　何のこと？』
「しらばくれるな。俺に近づいたのは、なにか企んでいるからだろ？　俺の友達が、お前が彼氏らしき男と居るのを見たんだ」
『いや、違うの。それは……えっと』
彼女が何も答えられなくなったことに、英二は落胆した。本当は否定して欲しかった。否定しないことが、企みがあって直海が英二に近づいてきたことを証明していた。
「もう俺に関わらないでくれないか」
『誤解よ、私は』
直海は携帯電話の向こう側でそう叫んだが、英二は携帯を耳から離し、通話終了ボタンを押した。
面会終了時間を過ぎたことから、英二は病室を後にした。病院が閉まれば、美奈がここを訪れることは無いだろうと彼は思った。

伊坂は、近くの簡易ホテルに泊まることにしたようだった。もしかしたら、自分も狙われているかもしれないと伊坂は思っており、自宅帰ることを怖がっていた。
伊坂は、英二の家に泊まらせてくれと言ってきたが、それは断った。宮原も英二に、この病室に泊まっていって欲しいと言ったが、それも一蹴した。英二の目的は彼らを守ることではなく、あくまでも美奈を探し出し、霊体を破壊することだった。
彼らを狙っているのは、彼らにレイプされて自殺した霊体だ。彼らにも狙われる理由がある。だから、英二は進んで彼らを守ろうとは思わない。もしも、美奈が操られていなかったのであれば、英二はこの問題を見て見ぬふりをしただろう。

英二はすぐには自宅に戻らなかった。営業時間終了間近のショッピングモールや、誰も居ない商店街を見て回った。美奈の姿が無いかを探していたのだ。だが、結局彼女を見つけることは出来なかった。最後に、英二はあの廃診療所に来ていた。美奈と付き合っていた頃は、放課後によくここに来ていた。二人だけの秘密の場所だ。
英二は二階に登り、月明かりが入ってきている窓から外を見た。坂の上の方に美奈の家が見える。美奈の部屋の電気は消えているようだった。
英二は倒れている箪笥の上に座り、煙草に火をつけた。落ち着かない心を、何とか鎮めようとしたが、出来なかった。英二は足を小刻みに動かし、貧乏ゆすりをした。
美奈のことが頭の大半を占めてはいたが、どこかで直海のことを英二は考えていた。あれから四度、直海からの着信があったが、英二は電話に出なかった。それで、連絡は途絶えた。
彼女の電話での様子から、何かを隠しているのは明らかだった。それが何なのかはわからない。だが、それでいいとも思った。自分は遊ばれていただけなのだとあきらめてしまえばいい。
英二は自分の財布から、中に入っていた封筒を取り出した。その封

筒の中には直海からもらった映画のチケットが入っている。英二はそれを手で丸めて、埃だらけの壁に投げつけた。

英二が自宅マンションに戻ったのは、深夜二時を過ぎた頃だった。自転車で延々と街中を回り、美奈を探していたが結局見つからなかった。美奈の家からも電話は無かった。

明日は、朝から宮原の居る病院へ行き、美奈が現れるのを待つつもりだ。おそらく、美奈に憑いている霊体は、もう一度宮原を襲うだろう。英二はそう考えながら、マンションの階段をのぼる。

英二は何度か、美奈の携帯に電話したが、電源が入れられていないらしく、繋がらなかった。

自宅マンションの前の道に、黒い軽自動車が停まっていた。最近、このマンションに住む学生の友人たちがこの道に違法駐車して、警察を呼ばれている。懲りずに、また停めているのだろうかと英二は思った。

自宅マンションの部屋の前に来た時、誰かが立っているのが見えた。それが誰なのか、英二にはすぐに分かった。

直海だった。胸元に両手重ねるように置き、俯き加減で英二の部屋の扉の方に視線を落としている。その表情は、奇妙なほどに美しく、色っぽかった。

「どうしてここに居るんだ？」

英二が声をかけると、直海はまず目線を英二の方に向けてから、顔を動かした。女性らしい流動的な動きが、英二の胸を絞めつける。この女を抱きしめてしまいたい。騙されていてもいい。そんな思いが英二の中で膨らんでいく。

「あなたを待っていたの」

「どうして、俺の自宅を知っているんだ？」

英二は直海に部屋を教えたことなどない。

「知っていたんじゃない。私はあなたを感じたの」

「訳わかんないこと言ってんじゃねぇよ」
英二は静かに怒りを言葉に込めた。自分自身の怒りを拡張させることで、彼女への気持ちを抑え込もうとしていた。
夜の静けさは、遠くの方で鳴った車のクラクションの音を、二人の元へ届けた。
「あなたは、誤解している。確かに、英二くんに言ってないことはある。でもそれは、あなたと少しでも長く居たかったから。私には時間が無いから……」
英二は、何も言わずに目を瞑った。これ以上、彼女の姿を見ていたら、気持ちを抑えきれなくなり、目の前の女を受け入れてしまうかもしれないと思った。だが、そうなれば、確実に自分は傷つくことになるだろう。
「お前は、何者なんだ？　何の目的があって俺に近づいた？」
英二のその問いに、彼女は答えなかった。下を俯いているが、困惑した表情をしているのはわかる。
「君には彼氏がいるだろ？」
「彼氏はいるわ」
直海は英二をまっすぐ見ながらそう言った。
嘘でもいいから、居ないと言って欲しった。
「俺はさぁ、そういうこと許せないんだ。二股の相手なら、他で探してくれ」
英二は、拳を握った。彼は直海に不思議なほど魅かれていた。だからこそ、彼女の言葉は、胸をえぐる。
英二はカギを取り出し、ドアに差し込んだ。
「待って、聞いて欲しいの」
直海は英二の腕を掴んだが、彼は直海の手を振りほどいた。
英二は、自分の部屋に入り、ドアを閉めた。
「英二くん！」
直海の消え入りそうな声がドアの向こうから聞こえた。
「俺のこと、騙そうとしやがって」

英二は深い怒りがこれ以上増殖しないようにと、シャツの胸の辺りをギュッと握った。
外からは、それ以降、何の反応も無かった。直海は帰っていったのだろうと彼は思った。

ベッドに入って一時間ほど経ったが、英二は眠ることが出来なかった。直海のことが頭の中を駆け巡る度に、英二は必死にそれを追いだそうとした。騙されたという怒りの方が大きくて、さっきは冷静に彼女の話を聞かなかった。それを英二は、ベッドの中で後悔した。もっと時間をかけて話を聞いていれば、彼女が真実を話してくれたかもしれないと英二は思った。

ベッドの中で目を瞑っていると、瞼に赤色や青色や紫色をした粒子が漂っているのが見えた。瞼に力を入れると、その粒子はさらに色が濃くなる。
どうしても、眠ることが出来ない。もう一度、美奈を探しに行こうと考えた。その時、英二の手に握られていた携帯が鳴った。着信は、美奈の自宅からだった。美奈の母親から聞いて、アドレス帳に登録していたために、『美奈（自宅）』という表示が画面に出ている。
「もしもし、英二です」
美奈の母親が電話を掛けてきたのだろうと思った。何か美奈に、悪いことがあったのかもしれない。
英二は、相手が何かを話すのを待った。
『とめ、て……』
声が聞こえづらく、誰だかわからない。英二は、携帯を耳に強く押し付けて、その声を聞いた。
口が上手く動いていないのか、舌の動きだけで声を出しているように感じる。
「美奈なのか？」
『かのじょ、つぎは、かくじつに、ころすつも、り』

「美奈？　美奈なのか？　自宅にいるんだな？　ちょっと待っていろ！　俺が、お前を操っている霊体を破壊してやる。いつものように、俺が守ってやる」
『たす、けて。い、まから。びょう、いんへ。うらの、はんにゅう、ぐ、ち』
そう言った後で、受話器を叩きつけるような音とともに、電話は切れた。
英二は、先日電話を掛けてきた悪戯電話の声と同じだったことに気付いた。彼は、携帯電話の着信履歴を確認する。
悪戯電話だと思っていた先日の着信履歴は『美奈（自宅）』と表示されていた。アドレス帳に、美奈の自宅の電話番号を登録したことで、先日の電話が彼女の家からだということが判明した。
前回の電話で美奈は『かのじょをとめて』『もうだれもころしたくない』と言っていた。美奈は、ＳＯＳを出していたのだ。それに気付けなかったことを英二は悔いた。
美奈は霊体に操られてはいるが、霊体の意識の隙を見て、自分に電話を掛けたということを、英二はこのとき気付いた。

英二は、ベッドから飛び起きて、すぐに靴を履いた。喉が渇いていたが、冷蔵庫を開けて飲み物を探す時間も惜しかった。

彼女は『いまから、びょういん』と言った。それが宮原の入院する市民病院のことを指すのだと、彼は思った。『うらのはんにゅうぐち』という意味がよくわからなかったが、美奈が何かを必死に伝えようとした。
英二が、玄関のドアを開けると、そこには直海の姿があった。
「なにしているんだ？」
「待っていたの。ちゃんと話を聞いて欲しくって」
直海は、まっすぐに英二の方を見ていた。目をそらすのがもったいないと思えるほど、美しい瞳をしている。直海は、一時間以上も

そこで待っていたようだ。彼女は、英二が出てこなかったとしても、一晩中待っているつもりだったようだ。
彼女が何を考えているのか、英二には理解出来なかったが、決して悪意があって自分に近づいたのではないと信じてみたくなった。
直海の言葉には、嘘や悪意を今まで感じなかった。何か隠しているのは確かかもしれないが、それは自分を傷つけるためや、騙すためのものではない。英二はそう確信した。
「時間が無いんだ、今は話が出来ない。霊に憑かれた友達を助けなきゃいけないんだ」
英二は直海の横をすり抜けて走り出すと、後ろから直海が「待って！」と叫んだ。その声に英二は足を止める。
「なにが起きているのか分からないけど、私が車で乗せて行くわ！」
直海が英二の後ろからついて来たので、英二はまた足を進めた。
マンションの外に停めてあった黒い軽自動車は、直海のものだった。中は煙草の匂いが染みついていて、フロントには女性が好みそうなメンソールの煙草が置かれていた。
「煙草を吸うのか？」
直海には煙草のイメージは合わない。
「今まで一度もタバコは吸わなかったけど、それほど悪くないわね」
彼女が言った意味はよくわからなかったが。だが、彼女は自分の煙草ではないと言った。
英二は、車の中で美奈のことを話した。霊が憑いているなど、彼女は信じないだろうと思ったが、彼女はあっさりとその話を信じた。落ち着いた口調で「それは大変だわ。早く彼女を助けてあげなきゃ」と言った。
街は眠ったように静かで、車の姿も少ない。
直海の運転は非常に荒いものだったが、裏道をよく知りつくしており、予想よりも早く病院に着いた。
病院の正面一階部分はガラス張りになっており、フロントの受付

が見える。英二は車から降りて、出入り口の方へ向かったが、自動ドアはまだ作動していない。
英二のマンションよりも、美奈の家の方が市民病院には近い。英二の部屋から、ここに来るまで既に15分が経っていた。美奈が、あの電話の後にすぐ家を出たのなら、もうここに着いているかもしれない。
ここで美奈が来るのを待つべきだろうと考えたが、フッと他に出入り口があるかもしれないと英二の頭に浮かんだ。彼女の両親は医師だ。この病院に勤めている。
それに、さっき美奈が電話で、『うらのはんにゅうぐち』と言っていた。
もしかしたら裏に、医師や看護師が出入りするための扉があるかもしれない。英二はそう思って、病院の裏側へ向かった。
直海も英二の後を追って走って来る。ヒールの靴を履いているために、直海は英二よりも出遅れた。
病院は大通りに面しているが、深夜のために横の道を通る車はまばらだった。
病院の前の歩道に、さつきつつじが植えられており、緑の葉の中にピンクの花が顔を出していた。その葉の中にゴミが隠されるようにいくつも捨ててあるのが見えた。ジュースの缶、お菓子の袋、コンビニの買い物袋が葉の隙間からのぞいている。

病院の一階のフロントはガラス張りになっている。中には、大手チェーン店のカフェがテナントとして入っているのが見える。まるでショッピングセンターの中のようだ。
最近では外見を気にする病院が増えている。患者が病院を選ぶ立場になったことが原因だ。
結局、人は中身よりも外見で判断する。目に見えるものには説得力があり、目に見えないものには無い。中身が優れていなくても、外見が優れていれば、見えないない部分も優れていると人に思い込ま

せることができる。
病院の裏側は、表とは対照的に暗く陰気な雰囲気だった。奥に進むと、救急患者を搬入するための大きなガラス張りの自動ドアがあった。救急車が入ることのできるようなスペースもある。
薄暗い院内が、ガラス張りの自動ドアから見える。
その自動ドアの左側には、もう一つドアがある。『職員用出入口』と緑の看板に書かれている。
そのドアの前に人影があった。その人影は、黒いパーカーのフードを被っている。英二はそれが美奈だとすぐに分かった。
職員用出入口の横に0から9までの数字のボタンがついたセキュリティーロック装置が設置してある。美奈はその装置のボタンを押していた。
「美奈！」
英二が叫ぶ。
その声に、美奈は振り向き、英二の姿を見ると驚愕した顔した。
美奈は慌てて、手に持っていたカードを、壁に設置してある装置に差し込んでいた。どうやら、カードの差し込み口があるようだ。
装置の赤だったランプが緑色に点滅し、ドアのロックが開いたことを示した。あのカードは、ＩＤカードのような物で、嗅ぎの代わりになっているのだろう。
英二は走って美奈に駆け寄った。あと数メートル程で美奈の腕を掴めそうだった。美奈は紙一重で重そうな扉を開き、病院内へと入っていった。
英二は閉まろうとするドアに手を挟みこもうとしたが、間に合わなかった。
英二が、ドアノブを回しても、オートロック式のドアはすでにロックがかかり開かなかった。壁に設置されたセキュリィティロック装置のボタンを操作しても、ピッピッという音が鳴るだけで、開く様子はない。

自動ドアのガラス越しに、美奈の背中が病院の奥へと消えていくのが見えた。英二は自動ドアのガラスを叩き、美奈の名前を叫んだが、彼女は振り返ることすらなかった。完璧に彼女は、霊体に操られているようだ。
美奈は母親のＩＤカードを使って、職員用出入口のセキュリティーロックを解除しているのだろうと英二は思った。彼女の家に行った時に、玄関の壁にかけてあるのを思い出した。
暗証番号は聞き出したのか、それとも調べ出したのかはわからないが、同じ家に住んでいる母親の情報なら、彼女が入手するのは不可能ではない。
詰めが甘かった。宮原の病室に泊まるべきだっただろうかと、英二は後悔していた。
後から遅れて直海が走って来る。
「どうしたの？　なにがあったの？」
直海は、英二が自動ドアを叩いて美奈の名を叫んでいるのを見て驚いたように言った。
「俺の友人は完全に霊体に操られている。この職員用出入口から中に入っていった。大切な友達なんだ。俺には彼女を止める義務があるんだ」
英二がそう言うと、直海は頷いた。
直海は職員用出入口のドアを確認するように何度もドアノブをガチャガチャと動かした。さらに、セキュリティーロック装置のボタンを触ったが、やはりピッピッという音を出すだけだった。
宮原は殺される、そう思うと額に汗がにじむ。宮原が殺されることが怖いのではない。美奈が霊体に操られ、さらなる殺人の肩棒を担がせられるのが怖いのだ。
美奈も怖いに違いない。霊体に体の自由を奪われ、怨みもない人間を殺さなくてはならないのだ。
彼女が自分を孤独の淵から這い上げてくれたように、今度は自分が

美奈を助け出さなくてはならないと英二は思っていた。だが、中に入れないのであれば、どうすることも出来ない。

英二はフッとあることを思いつき、自分の財布をポケットから取り出した。五百円が二枚と十円が四枚と百円が三枚入っていた。英二はそれを握りしめたまま走り出す。

さつきつつじが植えられている歩道に戻り、捨ててあったコンビニ袋を手に取った。中には、雨水がたまっていたが、英二は気にしなかった。

買い物袋に小銭をすべて入れる。

この状態で、袋を大きく振ってガラスにぶつけると、力が一点に集中し、簡単に割ることができる。

これは、車で海に転落して閉じ込められた場合などに、フロントガラスを簡単に割ることのできる方法である。『九死に一生体験』というテレビ番組でたまたまこの方法が紹介されていたのを、英二は見て覚えていた。

「ちょっとまって英二くん！　何をするつもり」

「割るんだよ。それしか方法は無い」

「まって、そんなことしたら警察が来ちゃう。捕まっちゃうよ！」

「捕まる前に、美奈を止めることができればそれでいい。彼女をあの女の霊体から助け出せれば、自分は捕まってもいい。君は、もう帰るんだ。直海には関係ないから、騒ぎになる前に、ここから離れた方がいい」

英二は、小銭入りの袋を持つ右腕を、頭の後ろに持ち上げて構えた。

「冷静になって！　中には警備員だって居るかもしれない。もし、あなたが取り押さえられたら、美奈って子を救えないでしょ？　中に入る方法なら他にもあるわ」

直海は英二の袋を持っている右腕を掴んだ。

「他の方法ってなんだよ」
「見て。右側に緊急外来の患者用インターホンがあるの」
確かに、壁にはインターホンが設置してあり、『緊急外来患者様用インターホン』と緑のプラスチック板に書かれている。
「だから何だよ!?」
「だから、緊急外来の患者だって装って、中から開けてもらおう」
直海は、そういって自動ドアの右側にあるインターホンの方へ行ってボタンを押した。十秒ほど待ったが、返事は無い。
「もう待てない」
英二がそう言った時、インターホンから女性の声が返って来た。
『はい、緊急の患者さまでしょうか?』
「そうです、すぐに来てください」
『わかりました。すぐまいります』
女性がそう言うと、インターホンの回線は切れた。
英二はコンビニの袋ごと小銭をポケットに入れる。
「ここを開けてもらったとしても、俺がいきなり美奈を追って病院内を走って行けば、今インターホンに出た女性は驚いて警察に電話するんじゃないか? もし、警備員がいるなら呼ぶだろうし。向こうからしたら侵入には変わりないだろ? それとも、事情を話して中に入れてもらうのか? 信じてもらえるはずが無い」
「大丈夫よ、私に考えがあるの。その女性を黙らせれば、警察も来ないでしょ」

一分もしないうちに、自動ドアの向こう側の廊下で、明かりが上下に揺れているのが見えた。懐中電灯を持った看護師の女性が、走りながらこちらに向かって来ている。
女性は自動ドアの所まで来て英二たちを一瞥し、懐中電灯の明かりで下の方を照らした。それから膝を曲げてしゃがみ、自動ドアの下にあるカギを外す。
「ねぇ、英二くん。もしかしたらこれがあなたと一緒に居ることが

できる最後の時間になるかもしれない。だからしっかりと聞いて欲しいの。私はあなたに恋している。本気で、恋をしているの。もっと一緒に居たかった」
直海は英二の手を優しく握った。直海の言葉には嘘は無かった。優しく鼓膜を揺らした彼女の声は、英二の胸を包み込むように絞めつけた。
ドアが二十センチほど開かれて、女性の看護師が「どうなさいました？」と声をかけてきた。看護師の女性はまだ若く、二十代前半のようだ。化粧はしておらず、目にクマが出来ているのがハッキリと見える。だが、スタイルは良い。綺麗で細い腕をしている。
「緊急の患者がいるんです。診てもらえますか？」
直海が早口で言う。
「ちょっと、待ってもらえますか、今は先生が……」
「とにかく、中に入れていただけませんか？」
直海が大きな声を出した。
「あっ、はい」
看護師の女性は慌ててドアに手をかけて横にスライドさせた。それから、女性の看護師は「ど、どうぞ」と二人を中に招き入れた。
「私たちが、初めて重なった場所を覚えている？　私、そこで待っている」
院内に入る瞬間、直海は英二に向かってそう言った。その意味は、よくわからなかった。
直海は、小声で「ここは私が何とかするから、走って」と言い、英二の背中を軽く押した。
英二は看護師の様子を窺いながら、彼女のわきを抜けて、徐々に速度を上げて走り出した。
静かな院内に、彼の軽快な足音が響く。
「あの？　どうされたんですか？」
看護師が英二の背中に向かって叫んだ。
直海はどうするつもりなのか気になったが、英二は美奈の後を追

って走った。
看護師はずっと英二に向かって「ちょっと、お待ちください！」と叫んでいたが、急にその声が聞こえなくなった。直海が、うまくやったのだろうか。英二はきっとそうだろうと自分に言い聞かせた。もし直海が失敗したとして、警察を呼ばれたとしても英二は構わなかった。美奈を止めなければという責任感が、彼の頭の中を埋め尽くしていた。
英二は、後ろを振り向かなかった。

エレベーターで行くか、階段をのぼるか、英二は一瞬迷ったが、階段を行くことにした。エレベーターがすぐに一階に来るとは限らないからだ。
一階は診療室だけでなく、受付やカフェや売店がある。二階はほとんど診療室だ。二階の踊り場に診療科が書かれたボードがあり、内分泌代謝内科、肝臓内科、神経内科、整形外科、産婦人科、産科など、細かく診療科が分けられていることがわかる。この病院に来れば、どんな病気も怖くないのではないかと思える。
二階から、三階に駆け上がる。三階もまだ、診療室があり、患者が座って待てるようにと、いくつもの座席が並んでいる。
四階から患者の病室になっている。英二は一気に五階まで駆け上がった。
五階に着くころには、英二の足は悲鳴を上げていた。こんなに走ったのは久々で、上手く力が入らなくなっていた。英二は「クソッ」と言いながら、自分の足を拳で叩く。
足が上がりにくくなり、英二は日頃に運動をしていないことを嘆いた。
宮原の個室は五階の東側一番奥にある。よく太陽の光が入る良い部屋だった。それなりに金額もするだろう。
英二は宮原の部屋の前に来た。もし、すでに美奈が操られ、宮原を殺した後だったらどうすればいいだろうか。血まみれの室内の映

像が頭に浮かんだ。そう考えて、すぐにそんなことはないと彼は自分に言い聞かせた。どちらにしても美奈に憑いた霊体を破壊して、彼女を助けなければならない。

英二は、宮原が居る病室の扉をスライドさせて開けた。月明かりが窓から入り込み、宮原が眠っているベッドに当たっている。宮原は白い布団を頭まで被り、丸まったように眠っている。美奈の姿は無い。

宮原がどの病室に入院しているかまで、美奈は知らないのだろう。患者が入院している病室は、四階から上の階だ。ここは五階なので、美奈はまだ四階を調べているのかもしれないと英二は思った病室の入り口には手書きで、患者の名前が書いてある。四階からこれを一つ一つ確認している美奈の姿を想像した。病院内は足元の間接照明以外ほとんど明かりが無い。目を凝らして、やっと病室の前に掲げられている文字が見える程度だ。

宮原を叩き起こして、ここから連れ出すべきかどうかを英二は一瞬迷った。もしも、途中で美奈と鉢合わせしてしまったらどうすればいいだろうか。霊体が美奈から抜け出して宮原を操って殺すのではなく、美奈を操って、いきなり宮原を襲わせる可能性も否定できない。そのときに、美奈を傷つけずに止める自信は英二には無かった。

それに、廃診療所で、あの女の霊体を破壊しようとして一度失敗している。今回、確実に破壊できるという可能性は無い。あの霊体を本当に破壊できるのだろうか。失敗したら宮原は殺されるだろう。それだけじゃない、美奈だってタダでは済まないかもしれない。

だが、ここに居ても、いつか美奈に見つかってしまうだろう。

英二は辺りを見渡す。

右側は、英二がのぼって来た階段がある方向だ。左の廊下の奥には、非常階段をしめす緑の誘導等が光っていた。その方向にも、逃げ道があることを英二は確認した。

自分が来た右側から逃げるのは危険だと判断し、左側の非常階段から降りることを彼はイメージした。

「宮原、起きろ！」

英二は宮原の病室に響く声で叫んだ。いや、叫んだつもりだった。思った以上に声が出ず、上擦ってしまったことに自分でも驚いていた。彼の声はほとんど無声音だった。

死と生が入り混じる病院という異質な空間の中で、無形のプレッシャーが彼にのしかかっていた。

英二の声に、宮原はピクリとも反応しなかった。まさか、すでに殺されているのではないかと英二は思った。

英二がもう一度、宮原の名を呼ぼうと息を吸った時だった。左奥の廊下から足音が聞こえてくる。タッタッタッという軽快な足音だ。鳥の羽ばたきの音にも似ていた。

壁の下の方に取りつけられている間接照明は、音の主の足元を照らしだした。直海では無いことはすぐに分かった。

足音は耳元で聞こえる。実際には、まだ数メートル離れているのだろうが、静かな院内の壁を這いながら音は英二の耳元で響いた。

英二は病室の中をもう一度確認する。宮原は、眠ったままだ。

もう宮原を連れて逃げることはできないと、英二は悟った。

英二は、病室のスライドの扉を閉めた。その時、病室の中で物音がした気がした。いまさら、宮原が起きたのだろうか。タイミングが悪すぎる。英二はそう思い、下唇を噛んだ。彼が外に出てこないことを、英二は願った。

暗闇が英二の視界を奪い、冷静さを失わせる。彼が、自分の足が震えているのに気づいたのはその時だった。「怖いのか？」英二はそう自分に問いかけた。

あの女の霊体が、人間に憑き、憑かれた人間が人を殺そうとしている。あの時よりも、殺意や怨みの念は深くなっているかもしれな

い。それを想像すると、彼の震えは止まらなくなった。
果たして、うまくあの霊体を破壊できるのか。自分が霊体を取り込む前に、美奈は操られて自分を殺そうとするかもしれない。そう考えると英二の体は硬直した。
霊体を掴み、体内に取り込んだところで上手く破壊できないかもしれない。次は確実に自分も殺されるだろう。不安は無限に広がり、絶望に近づいていく。無理だ、逃げろ。英二の心の中で、別の自分が叫んだ。
徐々に足音が英二の元に近づき、彼女が暗闇を脱ぎ捨て、はっきりとした姿を現した。
顔は少し俯き加減で、フードから出た前髪が顔にかかっている。髪の間からは黒い眼球が光っていた。
「英二、なぜあなたが私の邪魔をするの？　それに、どうして私がここに来るって分かったの？」
美奈の声はゾッとするほど、生気が無かった。色も潤いもない声だ。霊体が、美奈の体を操って喋らせているようだ。
「さっき、美奈が俺に助けを求めて、電話を掛けてきた。彼女の体を使って、これ以上人を殺させるわけにはいかない。彼女は俺の大切な友人だ。美奈、聞こえるか。今助けてやるからな」
英二は、霊体に抑え込まれている美奈の心に訴えかけた。
英二の腕全体から白い糸が伸びる。風に揺れる穂のように、ゆらゆらと動いている。霊体を破壊すれば、美奈は正気に戻るはずだと英二は思っていた。
「電話？　彼女がそんなことをしたのね。それはね、霊体が私の意識の隙を見て、体を操ってあなたに電話を掛けたのよ。彼らを殺したいという思いは、私の意志なの。霊体が私を操っているんじゃない。私が霊体を操って殺させているの。お願いよ、英二。そこをどいて。」
「嘘だ。俺は、お前が言っている事を信じない。霊体にはあいつらを殺す理由がある。でも美奈には、理由が無い。」

英二が逃がした霊体は、宮原たちに暴行されて、自殺した。霊体には、彼らに復讐するという動機がある。だが、美奈にはそれがない。

「英二、あなたがなぜここに居るのかは分からないけど。あなたはなにか大きな勘違いをしているみたい。暴行受けたのは……あいつらに暴行されたのはこの霊体じゃない。私なのよ」

美奈は消え入りそうな声でそう言った後、右手を肩の所まで垂直に上げた。右手に何かが輝いたのが見えた。英二は、それが包丁だとすぐには気づかなかった。

「うそだ、美奈に限ってそんなこと……」

英二は一歩だけ後ずさりしたが、それ以上は後退しなかった。彼女の中の霊体を追いだすことができるのは自分しかいない。逃げるわけにはいかないと英二は思っていた。

目の前に居る女は、美奈の姿をしているが、心はあの霊体に支配されている。美奈が、あいつらに暴行され、その復讐をしようとしているなど、英二はこれっぽっちも信じられなかった。

「本当よ。悔しくて、毎日死にたいって考えていた。今もそう。あいつらに酷いことされて以来、鏡だって見ることができなくなった。外にだって出られなくなった。笑顔で笑っている女性を見ると、何で笑っているのって、死ねばいいのって、ずっと思っていた。どうして私だけこんな思いしなきゃいけないの？　あいつらが、私の生きて行く喜びのすべてを破壊したのよ」

「うそだろ？　霊体に操られてそんなことを言わされているんだ。俺を惑わせるために。俺は、俺は信じないからな」

「英二、私はね、あなたと離れていた数年間で霊体をコントロールできるようになったの。もともと、素質があったみたい。だから、私は霊体をコントロールして人を殺せる。そこをどいて。あなたには関係ないじゃない」

美奈の目から涙がこぼれ、頬を流れたのが、暗いこの場所でもよくわかった。

英二の腕から伸びる白い糸が、力を無くしたように縮み始めた。
英二には迷いが生まれていた。
美奈の意志で霊体を操って、宮原や瀬野を殺そうとしているのなら、彼女を止める必要があるのだろうか。彼女は優しい女性だから、霊体に操られているとはいえ人を殺すことを手伝わされたら、きっと深く傷つくだろうし、責任を感じるはずだと英二は考えていた。
だが、美奈自身が彼らに暴行されていて、自分の意志で行動しているのであれば、彼女を止める必要はないのではないかと、英二の中に迷いが生まれた。
美奈が、奴らに体を押さえつけられ、無理やりに性器を体に押し込まれる映像を、英二は頭に浮かべた。怒りが込み上げてくる。どこにぶつければいいのか分からないその怒りに、彼は頭を痛めた。
英二の腕から伸びる白い糸は完全に勢いを失っていた。
英二は、両腕をだらりと垂らし、俯いた。
「ありがとう、英二」
英二が止める意志が無いことを察し、美奈はそう言った。
人を殺すことは、想像を絶するほど恐ろしいことだということは英二にもわかる。彼女の話が本当ならば、美奈は強い覚悟を持ってここに立っている。
美奈がそっと英二の脇を抜けて、宮原の病室のドアに手をかけた。
いや、だめだ。もし、美奈が言ったことが本当であったとしても、彼女にこれ以上罪を犯すことを黙って見ているわけにはいかない。それに、あの女の霊体を破壊しようとした時の映像はなんだったというのだ。あれは確かに女の霊体の記憶だった。美奈の中に入り込んだ霊体の記憶を、美奈は自分の記憶だと勘違いしているのかもしれない。英二がそう思った瞬間、腕の白い糸は彼の意志に反応するように、大きくうねりを上げて伸びる。
真相がどうであれ、彼女を止めなければならないと英二は思った。
彼の腕から白い糸が勢いよく伸びる。
彼は白い糸に纏われた腕で、包丁を握っている美奈の右手をとっ

た。その瞬間彼女の表情に怒りが宿る。それは英二が、今まで見たこともない彼女の顔だった。
「どうしても邪魔するって言うのね。だったら、仕方ないわ。もう自分の手で、やるしかないのね」
美奈と英二は向き合っている。
美奈は左腕をあげ、掌を英二の方へと向けた。
その時、美奈の顔から白い靄が浮き出てきた。靄は顔からだけではなく、肩や胴体などの形に沿って浮き上がって来る。
美奈の中に居る霊体が、彼女の体から出てきたのだ。霊体は美奈の体から抜き出て、英二に覆いかぶさって来た。霊体は自ら、英二の白い糸に絡みつく。
英二は美奈の手を離した。彼はバランスを崩し二歩後退する。
糸に絡みついて来た霊体を引き剥がそうとしたが、何故か上手くいかない。蜘蛛の巣に囚われた虫のように、糸を霊体から剥がそうとすればするほど、絡みつく。
「離れろ！」
自分の体に絡みついた霊体に対して、英二は声にならない、叫びを上げた。
（ごめんなさい、ごめんなさい。操られていて、自分の意志ではあなたから離れられないの）
英二の頭の中に直接響き声がした。
（君は、あの日に廃診療所で会った霊体じゃないのか？　宮原たちに車で暴行されて、自殺した霊体じゃないのか？）
（違います。私は、事故で死にました。彼等とも面識はありません。彼女に出会って、操られて瀬野と宮原という男性を襲いました。確かに、私も女として、彼女に同情するし、悔しい気持ちもすごくわかる。初めは、美奈を助けてあげたいって思った。でも、もうこんなことはしたくありません。人を殺したくない。人を殺すって怖い）
（だったら、馬場と言う男の首を絞めて殺したのも君じゃないんだね？）

（だから私は、美奈に会うまで人を傷つけたことなんてなかった。確かに、人に取り憑いて操ってみたことはあったけど、それは傷つける目的では無かった）

英二はずっと、美奈に憑いている霊体が、自分が逃がした霊体だと思い込んでいたが、そうではなかった。

悪意や怨念を感じない。

美奈は、左手を英二の方にかざし、霊体を操っていた。

霊体は、英二に危害を加えようとしていない。ただ、しがみつき、体の中に入ってこようとする。

英二には、美奈の目的がわかっていた。霊体を無理やりに彼の白い糸に絡ませ、体の中に引き込ませる。強制的に、英二に霊体を破壊させようとしているのだ。

英二は、霊体の破壊活動に移れば、体の自由が利かなくなる。快感の中でもがき、筋肉が痙攣して、うまく動けなくなる。

美奈は、英二の破壊行為がどんなものかを知っていた。だから、英二に霊体を無理やりに破壊させ、動きを止めようとしているのだ。

英二の中に霊体が入り込む。足の力が上手く入らず、英二は倒れ込んだ。彼は、宮原の病室の向かい側にある、病室のドアに背を着けて、座る形で倒れたのだ。

その間に、美奈は病室のドアを開けて、宮原の眠るベッドの横に立つ。包丁を両手で持ち、ベッドのふくらみに向かってそれを振りおろした。包丁は布団のふくらみに突き刺さる。

英二の中に入り込んだ霊体は、彼の体の中で暴れてはいるが、少しずつ引き千切られていく。

美奈に操られている霊体は、彼の中で破壊されていく。破壊され、分解された霊体の魂は、英二の口から小さな魂と分解されて出ていく。

英二の体を快感が襲う。脹脛や二の腕や腹筋が筋肉が痙攣するのがわかった。体の奥の方から光悦が全身を覆った。

美奈がベッドに包丁を突き刺しているのは見えていた。だが、目の前で、起きている殺人など、どうでもいいような気さえしていた。霊体が体内で完全に破壊された瞬間、英二の中の熱はすべて奪われてしまったような気がした。全身の筋肉が痙攣し、頭が真っ白になった。すべてがどうでもいいような気がしていた。

英二はぼんやりとした意識の中で、美奈の様子がおかしいことに気づく。月明かりに照らされた彼女の表情には困惑が浮かんでいる。美奈は布団をめくりあげた。口を大きく開け、目には怒りの表情が見て取れる。

「騙したわね」

そう言って美奈は英二の方を見た。英二にはなんのことだか分からなった。

「あいつはどこ？　布団の中身はシーツや洋服や枕を丸めたものだったわ、宮原はどこに行ったの？」

美奈はそう言いながら、布団の中に入っていたモノを床に投げ、英二方へと歩いてくる。床に、白いシーツや上下のスウェットが散乱した。それらを布団の中に詰めていたのだろう。いくら美奈が華奢な女性だといっても、包丁を握る人間がせまってくれば、男の英二でも恐怖を抱く。その表情は、怒りに満ちている。英二は逃げたい気持ちでいっぱいだったが、体が上手く動かない。

宮原はどこへ行ったのだろうか。英二も、彼の居場所は分からない。

彼女が来ることは知らなかったはずだが、警戒して身を隠したのだろう。

英二は何かが引っ掛かった。なぜ、シーツを丸めて、自分が居るように見せる必要があったのだろうか。逃げたのなら、自分が居るように見せる必要はないではないか。それに、先ほど、室中で音がしたのを英二は聞いていた。

美奈の後ろの方で、動きがあった。出入り口から見て右側に背ちしてあるクローゼットが開いたのだ。そこから人影が出てくるのが

見えた。
「美奈後ろだ！」
英二は渇いた喉を鳴らしながらそう言った。ほとんど声になっていなかった。
英二の声が、美奈に届いた時にはもう遅かった。
美奈は後ろから頭を殴りつけられていた。
「きゃ」
美奈の声が病院内に響く。
美奈は開いた病室のドアにもたらかかるように膝をついた。続けざまに、宮原は美奈の顔面を足で押すように蹴る。美奈の体は、廊下に転がった。包丁は宮原の病室内に落ちて、金属の高い音をたてた。
宮原は、美奈が持参した包丁を、手にとって、柄の部分から刃先までを見た。
「こいつで、俺を殺そうとしていたのか？　クソ、舐めやがって。マジで殺してやる。俺が先にお前を殺してやるからな。俺は死ねないんだ、あいつらのためにも死ぬわけにはいかないんだ」
宮原は恐怖からか、錯乱状態になっていた。目を見開き、頬が引きつっている。肩で息をしており、全身が大きく揺れているように見える。口からよだれが垂れており、彼は一度袖で拭き取ったが、また流れてきた。泡のように白くなったよだれが床に落ちる。
宮原は倒れた美奈の背中を何度も踵で踏みつける。
その度に、美奈の口から静かな嗚咽が漏れた。
「やめてくれ、こいつを傷つけないでくれ」
英二はそう言いながら、動かない体を必死に揺さぶり、美奈の方へと近寄った。両手を床につき、彼は這うように進む。
英二は廊下に転がった美奈に覆いかぶさった。彼は、霊体を破壊した後で、体にうまく力が入らない。
宮原は構うことなく、英二ともども美奈の体を踏みつける。
英二の背中に鈍い痛みが走る。

「うるせぇ、うるせぇ。こいつが俺を殺そうとしたんだぞ。こいつは俺を殺そうとしているんだ。遣られる前に遣らなければ！　でなきゃ俺が遣られてしまう。俺は絶対に死ぬわけにはいかないんだ」
宮原は、包丁を持った右手を高らかに振り上げた。刃の先端が、英二と美奈の方を向いている。英二が美奈に覆いかぶさっていたが、構いはしなかった。錯乱状態の宮原の頭では、英二すら敵に感じる。
もうだめだ。英二はそう思った。
美奈だけでも守れないだろうか。彼女を守ってやりたい。そう思い、英二は倒れている美奈の体をギュッと抱きしめた。美奈の背中は震えていた。思った以上に小さい背中だった。こんなにも小さくて弱弱しい彼女を、一人でこの土地に残し、離れてしまった自分を、今更ながら強く彼は後悔した。
英二は、睨みつけるように宮原の顔を見上げた。体が上手く動かない英二にはそれしかできなかった。
英二の体は徐々に自由を取り戻してはいたが、包丁を持つ宮原を取り抑えるほどの力はなかった。

風の揺れる音がした。ヒュンという鋭い音が頭の上の方で聞こえた。次の瞬間には、宮原の頭に何かがぶつかり、鈍い音をたてた。宮原の頭を直撃した物体は、英二と美奈の頭上を越えて飛んでいき、床に転がってガシャンという自転車が倒れるような音がした。五階に入院しているほとんどの人が目を覚ましたのではないかと思えるほど大きな音だった。
宮原もその音と同時に床に倒れ、全身を打ったようだった。
「英二くん、今のうちに逃げて！」
廊下の暗闇の向こうの方から声がする。直海かと思ったが、違う。聞き覚えのない女性の声だった。
宮原の頭をとらえたのは車椅子だった。その車椅子は十五キロほどあるだろう。
暗闇の向こうに居る女性が、この車椅子を投げつけたとは思えない。

男性でも、十五キロもある物体を、あんなスピードで、投げ飛ばすことは無理だ。
暗闇の向こう側に居る人物のシルエットが見える。闇にぼんやりと浮き上がった人物は、声同様に女性のものだった。
彼女が十五キロほどある車いすを投げつけたとは到底思えない。華奢で細い体をしている。
英二は、徐々に感覚を取り戻しつつある二つの足で、立ち上がった。生まれたての小鹿のように、折れ曲がる膝を必死に手で支えた。
英二は、美奈の手を取って、立ちあがらせる。
美奈に意識はあったが、顔面や体を蹴られたせいで、意識がもうろうとしているようにも見えた。
お互いを支え合うように、二人は立ち上がった。英二は、美奈を連れて、上がって来た階段の方に向かって歩き出す。
英二は二度ほど、宮原の方を振り返った。頭を強く打ったのか、フラフラと壁に寄りかかりながら立とうとしている。ポタポタと液体が床に落ちる音がする。
宮原は手で頭を押さえている。指の間から血が流れ、床で音を立てていた。

英二と美奈が支え合いながら、車椅子が飛んできた方へ歩くと、暗闇の中に居る女性の姿が見えた。そこに居たのは、先ほど入口で出会った看護師だった。
「英二くん、ここは私に任せて外に出て」
看護師の女性とは先ほどあったばかりで、名前などお互いに知らない。
わけがわからなかったが、英二は看護師の女性に言われるがまま、美奈を連れて外へ向かった。
階段とは反対側にエレベーターがあり、壁に設置してあるボタンを英二が押した。
すぐにエレベーターのドアは開き、暗闇を切り裂く眩しい光が彼

らに当たる。英二は美奈の肩を抱えながらエレベーターに一緒に乗り込んだ。
ドアが閉まる瞬間、「ぎゃー」という断末魔が聞こえてきた。その声は英二と美奈の鼓膜を揺らし、筋肉をこわばらせた。高くて短いその叫びが男性のものなのか女性のものなのかは分からなかった。

「あの看護師は誰なの？」
エレベーターの中で、美奈は額を抑えながら言った。
英二は、直海のことを考えていた。彼女が、看護師を何とかすると言っていた。何がどうなって、あの看護師が自分たちを助けることになったのか、彼には分からない。
「俺にも、何もわからないよ。ただ、普通じゃなかった。車椅子がすごいスピードで宮原の頭に飛んできた。あれはあの女性が、宮原に投げつけたものだった。車椅子は十キロ、いや十五キロはあると思う。それをあの細い腕で投げることは可能だろうか？」
「英二の名前を呼んでいた。あなたの知り合いのはずよ」
「彼女が誰かなんてわからないよ。とにかくこの病院を離れるんだ」
エレベーターが一階につくと、扉が自動で開く。エレベーター内の明かりが、暗闇を切り裂き、床のタイルを映し出している。
二人はエレベーターの外へ出て、入って来た搬入口の方へと歩く。
英二は歩くたびに体が悲鳴をあげた。宮原に蹴られた背中や横腹が、針で刺すように痛む。霊体を破壊した後ということもあり、体の力もまだ完全に回復していない。
英二と美奈は、お互いを支え合うように歩いた。
美奈は、自分の母親のＩＤカードを持っていた。暗証番号は、ＩＤカードの裏に、美奈の母親らしき字で小さく書かれていた。恐らく、忘れないようにと母親が書いたのだろうが、それではＩＤカードと暗証番号の意味が無いではないかと英二は呆れた。
英二は入口で別れた直海の姿を探した。彼女は、英二が入って来

た入口のガラス張りの自動ドアに、もたれ掛かるように倒れている。
英二は彼女に近づいて、そっと頬に触れた。彼女の頬は柔らかく暖かい。
「直海、しっかりしろ」
英二は、彼女の肩を揺らす。
「うぅん」
寝ぼけているみたいに、言葉になっていない声をもらし、彼女は薄く目を開ける。
「えっ、ここどこ？　あなたは？」
「俺だよ、英二だ」
直海は、英二の顔をまじまじとみて、なんどか目を瞬かせた。
「あなたのことなんて、私は知らないわ」
「なにを言っているんだ？　しっかりしろよ、直海！」
英二は直海の肩を揺らす。彼女は小さく悲鳴あげた。
「私は、直海なんて名前じゃありません。ここはどこですか。帰してください。あなたは誰なんですか！？」
直海はパニックを起こし、辺りをキョロキョロと見渡している。
英二は、今までのことを彼女に言って聞かせたが、知らない言語を聞いているかのように、彼女は何一つ理解できていなかった。
「とにかく、俺は直海の……君の車に乗ってここへ来た。それも思い出せないのか」
「私の車はどこにあるんですか？　どこにあるのよ！？　お願いだから私を帰してよ」
直海は頭を抱え、叫び始めた。英二はなんとか彼女をなだめようとしたがダメだった。英二は、直海を車へ連れて行くということを約束し、彼女を落ち着かせる。
英二は、まだ頭を抱えてふらついている美奈の手を取りながら外へ出て、直海の車へと向かった。直海は二人と二メートル程距離を

置き、後をついてくる。
すぐにでも病院から離れたかったが、英二は確認しなければならないことがあった。
直海の車に着くと、直海はドアを開けて車に乗り込んだ。安心したのか、座席に座ると急に泣き出してしまった。
「なぁ、免許証を見せてくれないか？」
英二がそう言うと、直海は涙を手で拭きながら、車の中に置いてあったバッグの中を探った。ブランド物の財布から、免許証を取りだすと、それを慎重に英二の方へ向ける。手が震えていた。
そこに書かれていた名前は「安田麻美」だった。彼女は直海では無かった。彼女はさきほどまで、確かに直海だった。だが、いま英二の目の前に居る女の名前は直海では無い。雰囲気も違う気がする。顔の表情が、直海のものとは明らかに違っているような気がした。
「なぁ、君は煙草を吸うかい？」
英二はそう聞いた。
「えぇ、昔から吸っている」
彼女は、涙を袖でぬぐいながら言った。
「もう大丈夫だから、気をつけて帰るんだよ。今日のことは、忘れるんだ。いいね、麻美さん」
英二が麻美にそう言うと、彼女は真っ赤にした目を泳がせながら、うんうんと何度もうなずいていた。

麻美の車が走り去ったあと、英二は病院の方を振り向いた。病院の窓は、月の明かりを反射して、怪しく輝いていた。
英二は奇妙に夜に浮かび上がった病院の方を見ながら「そうか、そうだったんだ」とつぶやいた。
英二は、直海の言葉を思い出していた。『私たちが、初めて重なった場所を覚えている？　私、そこで待っている』と直海は言っていた。英二は、彼女と初めて重なった場所を思い浮かべていた。
彼は美奈を連れて病院を離れた。途中で、三台のサイレンを鳴らす

パトカーとすれ違った。病院の方へ向かっていることを英二も美奈も分かっていたが、二人とも何も言わなかった。

英二と美奈は、住宅街の中にある、小さな公園のベンチに座っている。ブランコと、滑り台と、鉄棒しかないこぢんまりとした公園だった。

英二は近くの自動販売機で、缶コーヒーを買って、美奈に渡す。彼女は黙ってそれを受け取った。動揺している美奈を落ち着かせたかった。

英二は、缶コーヒーを一気に胃に流し込み、缶を空にした。美奈は、缶コーヒーには口をつけず、座っているベンチの横に置いた。

英二は、美奈が「缶コーヒーの豆にはロブスタ種が使われているから、好きじゃないの」と言っていたことを思い出す。

長い沈黙が続いた。

その沈黙を破ったのは、美奈だった。

「英二、私は瀬野を殺したことも、宮原を殺そうとしたことも、何一つ後悔はしていないわ」

英二は、美奈が喋るのをじっと聞いていた。美奈は、下を俯き、何かを探すように黒眼をしきりに動かした。英二は、急かさずに、彼女が口を開くのを待った。

「英二、私はあいつらに酷いことをされたの。生きる意味をすべて奪われた」

美奈はそう言って、ポツリポツリと目から涙をこぼし、膝の上に置いている手の甲を濡らした。

美奈は、英二にすべてを話した。夜の匂いが、彼女にそうさせた。英二は、夜の景色の一部に溶け込むように、黙って彼女の話を聞いた。

美奈が、宮原と瀬野に会ったのは、ある居酒屋だった。美奈は、高校三年の二月に、推薦で大学を決めた友人たちと、高校生活の最後に羽目を外すため、居酒屋で酒を飲むことにした。もちろん、美

奈も県外の国立大学に進学することが決まっていた。車の免許をとりに、自動車学校にも通い、もうすぐ卒業を控えていた。
みんなで行った居酒屋に、宮原と瀬野が働いていた。彼らは、客として来た美奈に声を掛けてきた。酒が入っていたこともあり、美奈は宮原に連絡先を教えてしまった。それから、宮原は、美奈にしつこく連絡をしてくるようになった。初めは優しく、会いたいというようなことを宮原は美奈に言ってきた。美奈は、それを断わりつづけた。だが、宮原からの連絡は途絶えることは無かった。口調こそは優しかったが、宮原はしだいに脅すような言葉を発し始めた。学校の前で待ち伏せするぞ、家に押しかけてやる、居酒屋で飲んでいたことを学校に連絡する、友達にも迷惑がかかるぞ。そのようなことを宮原は美奈に言ってきた。
宮原は、一度だけ会えば、もう連絡はしないと言った。美奈は、彼が学校や家に来るのも嫌だったし、友人たちに迷惑をかけたくなかった。だから、一度会って、はっきりと連絡をしてこないようにと言えば済むと思った。
だが、それは甘かった。待ち合わせ場所のコンビニへ行くと、宮原が駐車場の隅で、立って待っていた。彼の横にはワゴン車が止まっている。宮原は、美奈をワゴン車の反対側に誘導した。ワゴン車の反対側は、フェンスになっていて、コンビニの外からも人目につかない。
美奈は、彼に言われるがまま後をついて行った。ワゴン車の反対側に行くと、急に手を掴まれ、開いていたスライドドア中に引っ張り込まれた。怖くて声が出なかった。踏ん張って抵抗したが、後ろから、誰かに担がれた。それは瀬野だった。どこかに身を隠していたのだろう。
車内に連れ込まれた美奈は体を抑え込まれた。耳元でカリカリカリという音が聞こえた。音の正体はカッターナイフだった。「大人しくしてね」笑いを含んだ瀬野の声が聞こえた。服と下着を脱がされた。パンツは、ナイフで切られた。運転席から、男が不安そうに美

奈の方を見ていた。瀬野が、その男に車を出せと言った。すると、車がゆっくりと動き出した。
車内には大きな音楽が響いていた。美奈の記憶は、そこまでしかない。
男たちの笑い声と大音量の音楽、下半身に響く痛み。自分の体では無い。今彼らに弄ばれているのは自分の体では無い。美奈は何度もそう自分に言い聞かせた。
男たちは美奈を弄んだ後、煙草を吸いながら、「馬場も来ればよかったのになぁ」と話していた。それから、美奈に「誰かに話したら写真をばら撒く」と言って、美奈の裸の写真を撮った。
数時間後に美奈は、元のコンビニで降ろされた。いつの間にか服を着ていた。記憶は曖昧だったが、宮原と瀬野に服を着るように言われて、服を着たようだった。
　美奈は、先ほどと同じコンビニで車から降ろされた。それからどうやって帰ったのかは分からないが、気づいたら自宅の風呂場で体を洗っていた。全身が真っ赤になるまでナイロンのタオルに石鹸を泡立てて、何度も何度も擦った。彼らに触れられた部分の皮膚をすべてはぎ取ってしまいたかった。

## D

美奈は次の日からも今まで通りに生活をした。高校へ行き、自動車学校にも通った。高校では笑顔で過ごした。自動車免許も取得した。普通の生活ではあったが、自分の体が自分のものではないような気がしていた。誰か別の人の体を借りて生活しているような違和感が常に纏わりついていた。

その生活には限界があった。抑え込んできた、怒りや悲しみが、美奈の中で破壊的に成長し、ついには爆発してしまった。

突然、学校で美奈は泣き崩れ、嘔吐した。いつの間にか胃潰瘍になっていた。

それ以来、美奈は家から出なくなってしまい、両親はそんな彼女を心配していた。美奈に何があったのかを、二人は知りたがった。

美奈は、頑なに口を開かなかったが、クラスメイト達が卒業を迎えた頃、美奈は両親に打ち明けた。

両親は『なぜ黙っていたのか？』『どうしてそんな奴に会いに行ったのか？』『助けを呼べなかったのか？』『抵抗しなかったのか？』と彼女を責めた。

どうして自分が悪いのか。なぜ、自分が責められているのか。悪いのは自分に暴行した宮原や瀬野ではなく、自分なのだろうか。

いつの間にか美奈自身も自分を責めるようになった。『ごめんなさい、ごめんなさい』と、ただ美奈は両親に謝り続けた。

両親は警察に行こうと説得したが、美奈は行かなかった。まただれかに責められるのではないかと怖かったのだ。

美奈はずっと死にたいと思っていた。この汚れた体から抜け出したいという欲求があった。もう自分の体を自分のものとして感じなくなっていた。

そこまで聞いて、英二は静かにベンチから腰を上げた。まだ、足に力が入りにくい。
美奈の方は見ず、静かに月を眺めている。月の模様はその日の気分によって、見え方が変わる。ワニが居る。英二は月の模様を見ながらそう思った。不思議と怒りが込み上げてこない。沸き上がって来たのは、彼女が傷ついていることへの悲しみだった。彼女のために、自分に何が出来るのか、英二は考えていた。
「見て、英二。私、こんなに苦しんだの」
美奈は袖をめくり、手首を英二に見せた。英二は月から目を離し、彼女の方を振り向く。複数の切り傷が、彼女の手首に残っている。自殺を試みたのだろうということはすぐに分かった。
英二はベンチに座っている彼女の手首にそっと触れた。血管が微かに動いているのが分かる。血が流れているのだ。
英二は美奈の目を見つめた。付き合っていた頃と変わらない綺麗な目をしている。
英二は、夜の澄んだ空気を深く吸ってから、大きく吐き出した。
彼は、座っている美奈を見下ろしている。
英二は右腕の肘を直角にまげて、肩の所まで上げ、勢いよく美奈の頬に振りおろす。
彼の掌が、美奈の頬が当たり、弾けるような大きな音を辺りに響かせた。叩かれた衝撃で、美奈の顔は左横を向いた。彼女の頬に淡い月明かりが当たり、そのきめ細やかな肌を夜に映す。叩かれた美奈の頬は、微かに赤みを帯びているのが見て取れた。
「どうして？　どうしてみんな私ばっかり責めるの？私は……」
美奈がそう言いかけた時、英二が彼女の腕を引っ張った。美奈はベンチから立たされて、英二の腕の中で抱きしめられた。
美奈は英二の胸に顔をうずめる形となった。
「君は何も悪くないし、汚くなんてない。だから、もう誰も傷つける必要もない。君自身を傷つけることもないんだ」
英二がそう言った数秒後に、美奈は彼の胸で小さな声をあげた。そ

の声は、徐々に大きくなる。そして、美奈は叫ぶように泣いた。子供が母親に甘えるように、彼女は必死に泣いた。
「あなたのせいよ。英二が私を捨てたから。だから私は、酷いことされたのよ。あなたが、ずっと一緒に居てくれたら、こんなことにはならなかった。どうして私を捨てたの？　どうして助けてくれなかったの？　ねぇ、英二どうして？」
美奈はそう言いながら、英二の胸を必死に叩いた。何度も強く叩いた。
彼女自身、その怒りの矛先が理不尽なものだと知っている。それを英二は分かっていた。だからこそ、黙ってそれを受け入れなければならないと思っていた。
胸に響いた痛みは、英二の心の奥の方に響いた。
美奈の中で増殖した怒りや悲しみを、彼女は誰かにぶつけたかったのだろうと英二は思った。今まで、自分自身を責め続け、誰にも甘えることが出来なかった彼女の深い苦しみを、英二は想像していた。英二は胸に何かが詰まり、息が出来なくなった。それは、彼女が彼の胸を叩いたせいではない。あの日、彼女を捨てて、この街を出た自分が彼は許せなかった。
「美奈、俺が悪かったよ。一人にしてごめん。全部俺のせいだ」
英二がそう言うと、美奈は彼の胸を叩く手を止めた。彼女は両手で英二の胸の辺りの服を掴み、大きな声で泣いた。その声は、夜の淡い闇を揺らした。
「英二、私は汚されたのよ。この体に酷いことされたの。心を殺されたのよ。もう私はあなたの知っている私じゃない」
「俺は、美奈を抱きしめている。誰も、君から君を奪えない。俺達が付き合っていた頃と同じだ。君は君のままだ」
美奈の体が、崩れるように地面へ落ちていく。英二もそれに合わせて、膝をついた。美奈は英二に抱きしめられたまま、長い間泣き続けていた。
「憎しみに身を任せて、人を殺すことが正しいとは言えない。でも

美奈の憎しみの末の行為を、誰が責めることができる？　美奈の殺人を、俺は責められない。責めることなんてできない。美奈と同じ力を持っていて、同じような苦しみを味わった時、俺が美奈と同じことをしないなんて言えない。間違いなく、同じように、復讐を果たしたと思う」

英二が言った言葉はすべて本心だった。宮原や瀬野の死が、彼女の苦しみを少しでも癒してくれるのであれば、それでいいと思った。英二は、自分自身の考え方が、人間として間違っているのも分かっている。だが、その間違いは、人間の理想上での間違いのはずだ。現実は違う。

理不尽な欲望によって、傷つけられた時、誰だってそいつに仕返ししてやりたいと思う。自分が受けた以上の苦しみを味あわせてやりたいと思う。

復讐を悪と思う人もいる。実際にそうかもしれない。だが、復讐する人間も苦しむのが分かっていて、覚悟して行っている。

英二は美奈を見ていてそれが分かった。彼女を責めることは、彼にはできなかった。

二人を包む月明かりは、暖かくも冷たくもなかった。優しくも激しくもなかった。

英二は美奈を連れて、自分の部屋へと戻った。ルワンダ産アラビカ種の豆を使って、コーヒーを淹れた。

二人は、小さくて白いテーブルを前にして、壁にもたれ掛かり座った。

美奈はうまいとも、まずいとも言わなかった。息を吹きかけ、湯気のあがるコーヒーを冷まそうとする彼女の姿を、英二はかわいいと思った。

彼女は小さな音をたてて、黒い液体を飲んだ。彼女の唇は、淡いピンク色をしていて、桜を思い出させる。

二人は、黙ったままマグカップに口を運ぶ。付き合っていた頃、

英二はよく美奈の家でコーヒーを飲んだことを思い出していた。初めは、ミルクで割らなければ苦くてとても飲めなかった。美奈は、ブラックでコーヒーを飲む楽しみを教えてくれた。コーヒーは産地で、大きく味が違った。それに、アラビカ種やロブスタ種といったように、コーヒー豆にも種類があることも知った。

それぞれに特徴のあるコクや酸味を味わう中で、コーヒーという飲み物の奥行きを、英二を感じることが出来た。

『このコーヒーは怜奈ちゃんに似ている』

美奈がそんなことを言っていたことを思い出した。美奈は、よくコーヒー豆を人に例えることが多かった。英二はそれを聞くのが楽しかったからコーヒーを好きになったのだ。

美奈が、怜奈という同級生の女性に例えたコーヒー豆は、インドネシア産のもので、非常にコクが強く、酸味は無い。舌に絡みつき、長い間余韻を残す。それは鬱陶しくも心地よかった。しだいに舌が、その刺激を求め始めるのを英二は感じたのを覚えている。

『怜奈ちゃんはね、すごく口が悪いでしょ。男みたいな言葉づかいをするし、誰にだってすぐに説教じみたことを言うの。そのくせ、感傷的で涙もろくて、大変なの。でもね、私は一人で部屋に居る時なんかよく彼女のことを思い出すわ。そして、一人で笑っている。あぁ、また彼女に会いたいって思っている。怜奈って感情が豊かで、突然突拍子もないことをしたり、言ったりするけど、居心地はいいの』

美奈のそんな話を聞くことで、彼女がどんな人と接し、どんなことを考えているのかを英二は知ることが出来た。だから、コーヒーを二人で飲む時間は英二にとって、重要な意味を持っていた。

今は、二人とも静かにコーヒーを口に運ぶ。英二は、彼女の顔を眺め、いったいこのコーヒーの味から何を連想しているのかを考えていた。

英二は彼女と、付き合っていた頃に戻ったような気がした。だが、

美奈の顔には相変わらず、笑顔は無かった。ずっと悲しそうにうつむいていた。
美奈は、コーヒーを半分くらい飲んだとき、急に目に涙をためて。ポロポロと泣き始めた。英二は何も言わず、そっと彼女の肩を抱いた。涙の理由は聞かなかった。
長い時間そうしていた。やがて、美奈は泣き疲れたのか眠ってしまった。彼女の寝顔につられるように、英二も目を閉じた。

英二が目を覚ますと、すでに窓の外は明るくなっていた。カーテンを閉めていなかったために、太陽の眩しい光が室内を照らしている。
英二の体にはいつの間にか布団が被せられており、床で眠っていた。
彼はすぐに体を起こし、美奈の姿を探した。彼女が、どこかへ行ってしまったのではないかと思ったのだ。だが彼女は、横になっている英二の、足元の方に座っていた。彼女は、壁に背をつけたまま、テレビの方を見ていた。テレビからニュース報道の声が聞こえる。
英二もテレビの方を見た。昨日の市民病院が映っていた。太陽の光を吸収するように、病院の窓ガラスが輝いて見える。
現場に居る男性レポーターが、昨夜の不可解な事件について画面に向かって話している。
『昨夜、この病院に入院している男性が、窓から転落しました。男性は、自動車の上に落ち、一命を取り留めましたが意識不明の重体。患者の中に、男性が転落する数分前に男女の言い争う声や、大きな物音を聞いたという証言があります。また、顔に鈍器で殴られたような跡があることや、彼の病室の前に刃物が落ちていたという情報もあり、自殺と他殺の両面から警察は捜査を開始しました』
レポーターがそう言い終わると、テレビ画面はスタジオの風景へと変わり、若手男性司会者が難しそうな顔をして話し始めた。話の内容は、最近この街で起きている不審死についてだ。

司会者は、フリップボードを取り出して、最近この街で不審死を遂げた二人の状況や、宮原との関係を話した。
宮原をAさん、瀬野をBさん、馬場をCさんとして紹介していた。その記号の表記が、自分たちとは関係の無い事柄のことのように英二に感じさせる。
フリップボードが変わる。三人は高校からの友人で、卒業してからも関係は続いていた。友人も多く、慕われる存在だったと三人のことを紹介していたが、本当かどうかはわからない。
またフリップボートを変え、死んだ瀬野と馬場についての友人やアルバイト先で働いていた人物の証言を紹介し始める。どれも、死ぬ日まで元気で、悩んでいる様子もなかったことが書かれていた。
『Bさんの友人の証言によると、彼が自分の下腹部を刺して死ぬ前日に遊んだそうなのですが、彼に変わった様子は無かったそうなのです。それどころか、新しく地元のある御菓子メーカーの工場に就職が決まるかもしれないと話していたそうです。そんな彼が、果たして自殺をするのでしょうか？　それに自殺の状況にも不可解な点があり、AさんもBさんも自分の下腹部をナイフで刺して自殺しようとしていますし、そのナイフっていうのもどうやら彼らの所持品じゃなかったそうじゃないですか。Cさんに関しては首を自分の手で絞めて自殺してうます。ちょっと普通の自殺には思えませんが』
美奈は、テレビの司会者の様子を食い入るように見ていた。英二はテレビを消したいという衝動にかられ、リモコンに手を伸ばした。だが、美奈はその手を掴み、英二に向かって首を横に振る。
彼女がどんな気持ちで、テレビ画面を見ているのかを英二は想像した。
自分が殺した人間にも、生活があり、親が居て、友人がいて、将来があったことを改めて彼女は知ったに違いない。それを知り、彼女は彼らの将来を奪ったことを悔いるだろうか。それとも、ざまみろと悦に入るのだろうか。英二は、そう考えながら彼女の横を見た。眉間にしわを寄せ、頬を強張らせている。その表情からは、どの感

情を抱いているのかを想像することはできなかった。多分、憎いという感情はそのままに、彼らの人生を破壊してしまわなければならなかったことを後悔しているのだろうと彼は悟った。

『さて、ここでAさんと関係のある人物と電話が繋がっています』

この番組の名物である生電話のコーナーだ。事件や事故の関係者を引っ張り出して、生の声を発信するのが、この番組の名物となっており、人気の演出である。電話なら、直接関係者と話すことが出来るし、上手くいけば茶の間受けする感動的な話を聞き出せる。電話であれば顔が見えないため、人は自然と大胆になる。話を引き出すには有効な手段なのだろうと英二は思った。確かに、ただの視聴者として見ているときは楽しめた。だが、今はそれも出来ない。

『えーと、今お電話が繋がっているのは、Aさんとお付き合いしている女性です。ではよろしくお願いします』

司会者の男性が、見えない相手に呼び掛ける。

『はい、よろしくお願いします』

震えるような、でもどこか力強い女性の声が聞こえてきた。何かを伝えなければいけないという使命感を背負ったような声だ。

『Aさんの転落事故は、自殺の可能性が大きいというのが警察の見解ですが、あなたはどうお考えですか？』

『それは絶対にないと思います。私のお腹には子供がいます。妊娠して二ヶ月半程です。最近、妊娠したことがわかったんですが、彼はとても喜んでいました。今働いているバイト先で、来月には正社員として就職させてもらうことになっており、今年中には結婚しようと言ってくれていました。三日前にも、マタニティ関連の本を買ってきたり、一緒に名前を考えたりしていました。子供に悪影響があるかもしれないって言って、煙草まで止めたんです。私も、彼もとても幸せでした。絶対に彼が自殺するはずが無いんです。きっと誰かが、彼を殺そうとしたんです。私は、そいつが許せない。そいつを殺してやりたい』

何度か、司会者が口を挟もうとしたが電話先の女性は、延々と話をして、彼は自殺ではないと訴えた。電話で話している女性の声はいつの間にか嗚咽が混じっている。誰に訴えていいのかわからない怒りを、この場ですべて吐き出そうとしているようにも感じる。テレビの前に居た英二はもうやめてくれと叫びたくなった。なぜなら、横に入る美奈が泣いていたからだ。

彼女は後悔しているのだ。瀬野を殺し、宮原を殺そうとして、彼らの人生を、生活を奪ったことが恐ろしいことだと、美奈は気付いてしまったようだった。

英二は、彼女に何もしてあげられなかった。抱きしめることも、彼女を肯定するような言葉も言えなかった。もちろん、責めるような事もできなかった。彼には、彼女の行った行為が間違っているとも正しいとも思えなかったからだ。

「罪を憎んで人を憎まず」そんなものは綺麗事だと英二は思っている。罪を犯したのは人間なのだから、その人間が憎まれて当然だ。罪を犯した者は、それなりの罰を受けなければならない。だが、「憎しみは憎しみしか生まない」それはあながち間違いではないのかもしれないと、彼は思った。

美奈は、自分の人生を破壊した彼らを憎み、殺そうとした。だが結果はどうだろうか。確かに彼らの人生を破壊することはできたかもしれない、だが残ったのは新たな憎しみだった。

英二はもう一度テレビのリモコンを手に取り、赤いボタンを押した。電源のボタンである。テレビに映っている司会者の姿も、電話先の宮原の彼女だという女性の声も一瞬にして消え去った。

部屋の中には「うっうっ」という美奈の、声しか聞こえない。座ったまま下を俯き、頭を抱えている。英二は苦しみに落ちて行く彼女の姿をただ見ているしかなかった。

だが、その姿を見て胸が苦しくなる一方で、ホッと安堵している自分が居ることに英二は気がついた。彼女が自分の犯した罪を後悔

している。自らの罪を後悔する姿は、とても人間らしいものだった。そして、とても彼女らしい姿だった。
憎しみに突き動かされて行動し、その行動を悔いる。それは人間の逃れることのできない性なのだろうと英二は感じた。

彼女の霊体を使った殺人は誰にも気づかれることは無い。だが、それは同時に誰かに罰せられることもないということだ。もしも、法が及ぶ殺人なら、罰の重さが誰かの手によって決められる。刑期や罰金、時には死刑といったように、罪を償う方法を提示され、それに従うことで罪を社会的に消化できる。だが、彼女は自分の中で自分の犯した罪を罰しなければならない。誰も、彼女を罰しはしないし一方で許しもしない。だから彼女の罪は、期限が無い永遠のものだ。もしかしたら、忘れた頃に脳の海馬の奥の方に眠っていた記憶が目を覚まし、彼女にのしかかるかもしれない。その度に、彼女は自分自身を強く否定し、苦しまなければならない。彼女自身が自分を許せる日が来るのだろうか。それは、彼女にも分からないだろう。英二は、そう考えながら彼女の肩にそっと手を置いた。
彼女の罪を知っているのは英二だけだ。英二は、自分も彼女と共にその罪が消化されていくのを見届けなければならないと思った。

「美奈、君はもしかしたら苦しみを深めただけかもしれない。君の復讐を否定しているわけではない。だけど、やはり憎しみは憎しみしか生まなかった」
英二は箱ティッシュを彼女の横に置いた。だが、彼女はそれを使おうとはしなかった。涙を拭いてはイケないような気がしたのだろう。
「私はどうすればよかったの？　あいつらに体を汚された。もう死にたいって何度も思った。憎くって悔しくてあいつらを殺してやりたいとも思った。そして、私は人の命を奪ったり、傷つけたりと罪を犯した。でも、そのせいで、誰かが苦しんでいる、憎しみを抱い

ている。彼らを許せない気持ちは変わらないのに、自分の行った行為が間違いだったかもしれないって思ってうるの。すごく苦しいし、自分を許せない。もう私はこの世から消えてしまいたい」

そう言った美奈は、酷く混乱している様子だった。

「だめだよ、美奈。君が今、死ぬことは許されない。罪は、生きてなければ償えないんだ。死んでしまった人間はもう罪を償えない。そう言えば、自殺した霊体はみんな後悔しているだろ？　どうして生きて苦しまなかったのかを、死んでから後悔している。苦しみの先には見えにくいけれど、かならず希望が転がっている。苦みと後悔を繰り返すことで、人は自分の世界を広げて行く。本当はみんなそれを知っている。だけど、逃げ出してしまうんだ。美奈は罪から逃げ出してはいけない、生きているうちは後悔し続けなければならない。美奈、俺と一緒に罪を償おう。苦しみを見つめ続けよう。君が君を許せるまで、生きて罪を背負い続けるんだ」

英二はそう言った後、自分が泣いていることに気付いた。いつからだろう。そう思いながら彼は目の辺りを袖でゴシゴシと擦った。

美奈は、何度も頭を縦に振った。その度に、下瞼に溜まった、水滴が床や、彼女の手の甲に落ちた。涙は半球のような、ドーム型になった。大きさは違うが、どれも同じような形をしていた。

英二は、それを覆い隠すように美奈の手の甲に、掌を重ねた。掌が濡れたのが分かった。なぜそうしたのかは英二にも分からなかったが、その涙に触れたいと思った。そうすれば少しでも彼女の悲しみを感じることができると思ったからかもしれない。

英二の手の甲にも後からいくつかの涙が落ちて、ドーム型の水滴を作った。やがて、涙は英二の手の甲の曲線にそって、床に落ちて行く。英二はただひたすら、その様子を眺めていたのだった。

英二は、あの廃墟に来ていた。あの女の霊体を逃がしてしまった、廃墟だ。

英二は、きしむ階段を上り、二階へと上がる。建物は窓が多く、

太陽の光で室内は満たされている。夜と昼では、廃墟は違う顔をしていた。時折、割れた窓から心地よい風が流れてくる。風が開かれたドアを揺らし、キィキィという音をたてた。その不規則な音も夜とは違い、心地よくもあった。

英二は、二階にある部屋に入った。埃かぶった勉強机と、小さめの倒れた箪笥がある。

所々、割れた窓の前で、太陽の光を浴びながら女が立っていた。

床にはガラス片が転がっており、光を反射して輝いている。そこがまるで不可侵な場所のようなきがして、彼は部屋の前で立ち止まった。

彼女の言った『初めて重なった場所』それがここだ。

窓際の女性は、英二に気づかない。彼は、女性の後ろ姿を眺めていた。教会で、神の像を前にしているような神聖な気分だった。心が浄化されていく。英二はそう感じていた。

英二が一歩部屋に足を踏み入れると、床が小さく鳴いた。そこでやっと女は、英二の方を振り向いた。女はあの日、宮原に車椅子投げた女性だ。看護師の女性。

窓際の、彼女は微笑んでいた。

「直海、君なんだね」

英二は、女性に向かってそう言った。

「英二くん、来てくれたのね」

直海は、嬉しそうに、だがどこか悲しげに笑顔を作る。

「直海……君は、ずっと安田麻美に取り憑いていたんだね。そしてあの病院で、看護師に乗り移った。看護師の女性に取り憑いてしまえば、騒がれなくて済むからだろう？」

「そうよ。あの時、看護師が。つまり今のこの体の女性が、警察を呼ぼうとしたから、私は彼女を押さえつけたわ。さらに、女性は叫び出し、助けを呼んだ。夜勤で病院に男性の医師が居るようなことを言っていたの。だから、安田麻美の体を抜けて、看護師に取り憑

いたのよ」
「宮原が、五階から転落して、意識不明らしいが、それも君がやったのか？」
「宮原は、パニックになっていた。何度も床で転びながら、私から逃げようとしたの。奥に非常階段があってね、そこから外に出ようと思ったみたい。だけど、非常階段のドアは開かなかった。手で鍵を開ければ簡単に開いたはずだけれど、彼は動転していてそれが出来なかったみたい。それでね、横にある窓から、叫び声をあげて飛び降りたの」
「君が、彼をそうさせたんじゃないのか？」
「彼を殺そうと思えば簡単にできた。馬場っていう男を殺したように、首を彼自身の手で絞めさせればよかった。もちろんそうしようかとも考えたけど、彼は自分で窓から飛び降りて行ったのよ。人間ってね、パニックになったら何するか分からないんだよね」
彼女は小さく微笑みながらそう言った。
英二は、床に倒れている埃まみれの箪笥に腰を下ろした。看護師の女性、つまり直海も同じように、英二の横に腰を下ろす。
「君が、彼らに暴行されて自殺した女性だったんだね」
「そうよ。暴行された後は、生きる楽しみをすべて失ったわ。街中を歩いていても、みんなに笑われているような錯覚を受けた。私だけが、不公平な仕打ちを受けている気がした。それにね、当時私にも彼氏がいてね、彼だけにはすべてを話したの。そしたらね、汚いって言われちゃった。彼だけは私の苦しみを理解してくれるって思ったけど、ダメだった。私はすべてを失ってね、自殺したの。あいつらを怨みながら死んでいった」
「君は自殺したことを後悔している？」
英二がそう言うと、直海は部屋の斜め上の方を見上げた。そこに何かあるのかと思って、英二もそっちら方を見る。そこには、黄ばんだ天井の壁しかない。直海が見ているモノがなんなのかは分からない。

英二は、そこに美奈の顔が浮かんでいた。美奈も、先日自殺したいと言っていた。直海が、自殺を後悔していると言ってくれれば、英二は自分が美奈に自殺してはいけないと言った正当性が示されるような気がしていた。
「後悔しているって言って欲しいんでしょ？」
直海がそう言い、英二は深く長く頷いた。
「残念ながら、私は死んだことを後悔していないわ」
直海は、口角を緩やかに上げて微笑んだ。英二はその表情を見たわけでは無かったが、その声から彼女の表情を想像することが出来た。
「どうして？　生きていれば、きっと楽しいことがあったかもしれない」
「でも、無かったかもしれないでしょ？」
この直海の声からは、微笑みの雰囲気を感じなかった。「ただ、馬場っていう男を殺したことには少しだけ後悔している。それに、途中で、宮原と瀬野を殺すことも、もうどうでもいいって思ったの」と直海は続けた。
「どうしてそう思えたの？」
「あなたに会ったからよ、英二くん。私が死んだことを後悔しないのも、彼らを殺したいほど怨んでいたことを忘れられたのも、すべてあなたと出会ったから」
横に座る直海と彼は目が合った。彼女の、瞳の奥は無限に広がっている、そう思えるほど深い茶色をしている。
「どういうことだ？　俺は君を破壊しようとしたじゃないか。あのショッピングモールで、君を見つけてここへ連れ込み、自分の快楽のために破壊しようとしたんだ。結果的には失敗して、君に首を絞められてけど」
「あなたが、霊体を破壊するのは快楽のためだけではないわ。現世に残ってしまった霊体を破壊するとき、あなたの中には思いやりと使命感が確かにある。霊体を苦しみから解放してあげようとしてい

る。あなたの中に入った私が言うのだから間違いないでしょ。あの時、私はあなたと一つになりたいって思った。あなたに破壊されるなら幸せだって思ったの。それに、私があなたの首を絞めたのは事故よ。あなたを引き止めたかったのだけれど、どうすればいいかわからなかったの。それで、あなたの首を絞めて、慌てて逃げ出してしまった。私って馬鹿よね、もう死んでいるのに、動揺するなんて」

直海はそう言って笑った。

「怖くないの？　破壊される霊体はみんな怖がるんだ。現世から消えてしまうことに、必死に抵抗する」

「現世から消えてしまうことなんて怖くなんてなかった。だって、あなたは私に君は悪くないって言ったでしょ？　汚くない、綺麗だってそんなことも言ってくれた。私はそれで、この世に未練のようなものが無くなった」

「それだけで？」

「それだけよ。それだけで十分だった。生きていた時に付き合っていた彼氏は、私のことを汚いって言ったわ。犯されるお前にも落度があるって言って私を責めた。まるで私が加害者みたいな扱いを受けた。その時に私の存在価値をすべて否定されたの。でもあなたは、違った。私を破壊する前に、私のことを認めるような言葉を掛けてくれた」

「でも俺はあの時、君が言っていることに適当に合わせたんだ。あまり深く考えていなかったし、君が言った言葉の背景にそんなことがあったことも知らなかった」

「それでもよかったの。心が籠っていなかったとしても、実際に私はそれで救われた。ただ、言葉が欲しかったのよ。あの言葉で、私の心は潤されたの」

直海は箪笥から腰をあげて、床に転がっている、丸められた一枚の封筒を手にした。それは、英二が捨てた直海からもらった映画のチケットだった。彼女は、くしゃくしゃになったチケットを丁寧に広げた。

英二は、ここでそのチケットを丸めて捨てたことを思い出した。直海が自分を騙していると思い込んでいたから怒りにまかせて捨てたのだ。直海には別の男がいると達也に聞かされたとき、英二は大きなショックを受けた。だが、達也が見たのは、実際のところ安田麻美の彼氏だったのだということに、彼は今更ながら気付いた。安田に取り憑き、一時的に操ってはいたが、直海は一日中彼女を操ることはできなかったのだろう。だから、途中で安田は自分の意識を取り戻したのだ。安田が会っていた男性は、彼女の彼氏だろう。英二はそう考えた。あながち間違いではないと思った。

「私ね、あなたの中で体がバラバラになり始めたとき、すごく心地よかった。乳児が母親に抱かれている時ってこんな気分なんだろうなって思ったの。私はね、あなたの中で、英二くんの心に出会ったのよ。太陽みたいに温かかった。その時に、私はあなたに恋をしたの。側に居たいと思った」

「そうだったのか」

英二は、自分の胸を掌で抑えた。彼はそこに心があるはずだと思っている。

「だけど、どうしてわざわざ安田麻美に取り憑いて俺に近寄ったの？」

「憑くのは、誰でもよかった。ただ、最後に普通のデートしたくって」

直海は、英二に皺だらけになった映画のチケットの入った封筒を差し出した。彼はそれを受け取る。それから、中に入ったチケットを取り出した。チケットには「ダンデライアンに願いを？」という映画の題名が書かれていた。

「？は前の彼氏と見たの。まだ私がレイプされる前にね。？が上映されるようになったら絶対見に行こうって約束していたの。とっても楽しみにしていたんだけど、結局見に行けなかったから。自分でも不思議だわ、まさか生きていた頃の一番の心残りが好きな映画の

次回作を見たいことだなんてね」
　直海はそう言って笑った。
だったら、今から一緒に見に行こうと英二は言った。だが、彼女は首を縦に振らなかった。もう時間が無いというような言葉を、ボソリと零した。風が吹いて、小さな音が耳元で鳴ったような、力ない声だった。
彼女が、霊体としての形が壊れてしまうのは、時間の問題のようだ。英二が破壊しなくても、いずれその体はバラバラになり魂の状態へと変わっていく。
「ねぇ、英二くん。宮原は、意識不明の状態でしょ。でも、いずれ目を覚ます。私が、この世から消えてしまう前なら、彼を殺すことができる。彼を生かすか殺すかはあなたに決めて欲しいの」
　直海はそう言った後、割れた窓ガラスの方へ行き、外を見た。英二はどうして自分が、そんな選択を迫られたのか一瞬わからなかった。
　直海にはもう、宮原を殺す理由は無くなった。彼女は、この世に未練は無いのだ。
直海は、美奈のことを考えて、そのような選択を自分に迫ったのだろうと英二は思った。
直海はもうすぐ消えてしまう。未練も怨みも苦しみもこの世には残らない。だが、美奈はこれからもこの世で生き続ける。苦しみを背負い続けなければならない。それならば、自分が宮原を殺してあげた方がいいのではと直海は思っているのかもしれない。
　英二は、窓際の彼女の横に生き、左手で頬に触れた。太陽に照らされた、彼女の頬はほのかに温かかった。
　英二は、目を瞑り彼女に唇を重ねる。全身の熱が、すべて唇から奪われていくような気がした。胸をくすぐる甘い匂いがする。女性用のシャンプーの匂いだろう。
　唇を重ねて数秒後、直海の、正確には看護師の女性の体は、床に倒れ込んだ。唇が英二から離れる。床に転がった女性の体の周りに

は、埃が舞った。
だが、英二はさきほどのままの姿勢で、目を瞑っていた。彼の手は、確かに誰かの頬に触れているような感覚があった。
直海の霊体は、看護師の女性の体から抜け出ていた。英二は、霊体の彼女と唇を交わしている。実態は無い。だが、直海の温もりを、彼は確かに感じていた。
彼が目を開けると、あの日と同じ霊体が、目の前に居た。ずっと求めていた霊体が、目の前に居ると言うのに、英二の顔には悲しみが滲んでいる。
英二の腕から、白い糸が伸び始める。風に揺れるように、ゆらゆらと動く。その様は、畑を埋め尽くす秋の稲穂のようだ。
糸が、これ以上伸びて行けば、確実に彼女の体に絡みつくのが、英二には分かっていた。そうなれば、英二が意識していなくても、彼女は体内に引き込まれて、破壊されてしまう。
英二は、彼女に触れることを躊躇した。ずっと彼女が欲しかったのに、彼女を抱きしめることができない。抱きしめてしまったら、彼女とは永遠の別れになってしまう。
英二は、拳を握っていた。その拳が温かくなる。彼女自らその拳に触れたのだ。
白い糸は、彼女の体を這うように伸びて行く。蔓が、棒に巻きつきながら成長している過程を早送りで見ているようだった。
嫌だ。英二はそう思った。彼女を取り込み破壊したくは無い。自分の体に、止めるように言い聞かせるがだめだった。呼吸や、目のまばたきと同じように、白い糸が彼女を襲うのを止めようとしても限界があった。体が自然と動くのだ。
「どうせもうすぐ私は、消えてしまう。あなたに破壊して欲しい。ねぇ、英二。わかってくれるよね？」
直海がそう言うと、英二は目を瞑る。白い糸が伸びて行く勢いが増し、直海の霊体を包んだ。
「直海、俺はどうすればいい？」

直海のこと、美奈のこと、宮原のこと、それらを含めて英二は言った。
直海はただ小さく笑った。その後すぐに、英二の体の中へと引き込まれて、彼女の姿が見えなくなった。
直海が体の中に入り、破壊されていくのが英二にはわかる。パン生地を千切るような感覚で、簡単に直海の体は裂けていく。
「やめろー」
英二はそう自分に向かって何度も叫んだ。気づくと、泣き叫びながら埃だらけの床を転げまわっていた。
直海が、宮原を殺して、これ以上罪を増やして欲しくは無い。憎い相手を殺してもだれも救われない。それは、直海も美奈も、もうすでに分かっているはずだ。
今、宮原が死んでも、美奈の傷は癒えやしないだろう。もっと深まるだけだ。もうこれ以上誰も罪を増やさず、傷を深めないで欲しい。
英二はそう思っていた。
直海が英二の中で壊れて行く。全身に鳥肌が立ち、快感が足元から這いあがって来る。彼女を破壊することに快感を覚える自分自身が、英二は許せなかった。
彼女が、破壊されていく。英二は直海に何か伝えなければと思ったが、何も浮かばなかった。
直海は英二の中で破壊され、彼の口から宙へと零れるように舞った。仰向けに倒れている英二は必死に手を伸ばし、分裂して宙に舞い上がった彼女の魂を掴もうとした。だが、魂になってしまった彼女を、英二の手は掴むことはできず、むなしく空を切る。
英二はひときわ大きな声をあげた。彼は口を大きく開き、喉にはいくつもの血管が浮き出ている。
彼女に心から恋をしていた。直海が破壊された瞬間に、英二はそれに気付いた。
彼は、仰向けに倒れたまま、頭を上下させ、後頭部を床に何度もぶ

つけた。右拳を握り、床を叩きつけた。彼は、無力な自分が許せなかった。

看護師の女性は、窓から伸びてくる太陽の光を浴びながら、心地よさそうに眠っていた。英二は、彼女を置いたまま廃診療所を出た。

外に出ると、太陽の光がまぶしくて、彼は目を細める。綺麗な青空も、草木の匂いを乗せた風も、すべてが鬱陶しく思えた。

正しいことをしたのだという意識は無い。人は選択を迫られた時、選ばなかった方を、なぜ選ばなかったのかと後悔する。どちらを選んだとしても、後悔は避けることのできないものなのだと、英二はわかっていた。

英二は、直海を破壊し、宮原を生かすことを選んだ。

宮原が目を覚ます。そう思い、直海を破壊した次の日に英二は病院へ向かった。夜の不気味な雰囲気とは違い、昼間の市民病院は、綺麗で清潔な匂いがした。床は自分の姿が薄っすらと映るほど綺麗に磨かれており、塵一つない。ブランドのバッグが並ぶならぶ販売ブースがあってもおかしくは無い。

英二はエレベーターで、五階まで一気にのぼり、宮原のいる病室へ向かった。だが、彼は前と同じ病室にはいなかった。

英二は、エレベーターに戻り、一階に行って受付で宮原の行方を聞こうと思った。だが、エレベーターへ向かう途中で、太った中年の看護師の女性を見つけ、先日五階から飛び降りた男性はどこに入院しているのかと聞いた。その看護師は左斜め上を見ながら少しの間考え「あぁ確か八階に入院されていると思います、緊急患者のほとんどは八階に入院しますから」と答えてくれた。英二は女性に礼を言い、エレベーターに乗った。

八階でエレベーターを降りると、壁際に大きな窓があった。街の様子が見える。高いところから街を見るのが英二は好きだった。病院の近くに、市役所やマンションなどの大きなビルディングがある

ため、あまり見晴らしは良くない。それでも、長い時間眺めても飽きないだろうと彼は思う。
英二は八階のフロアを歩きながら、病室のドアの前に掲げてある表札を見て回った。病室のドアは何故か開け放たれており、中の様子がよく見えた。緊急の患者のためなのか、それとも看護師が働きやすいようにかもしれない。
ほとんどの、ベッドには患者が横たわっているように見える。五階よりも、重い雰囲気がした。階層が高くなるほど、天国により近くなるのではないかと一瞬英二の頭に浮かんだが、すぐに失礼だなと思いもみ消した。
宮原の病室は、五階と同じように一番端の個室だった。表札を見て分かったわけではない。
その病室から半分体を出し、室内に向かって「飲み物を買って来るね。なにか雑誌いる？」と声を掛けている女性が居た。どこかで聞いた声だと英二は思った。
どこでその声を聞いたのか、彼はすぐに思い出した。テレビの生電話に、宮原の彼女として出演していた。特に、声に特徴があったわけではないが、宮原の自殺を否定する力強い声は英二の耳から離れなかった。
英二は、宮原がいる病室に近づく。表札にはやはり彼の名前があった。
病室から出てきた彼女と目が合い、二人は同時に会釈を交わす。肩まで伸びて痛んだ茶色い髪の毛、ほとんど剃られた眉毛。その外見から、誰も彼女に良い印象など持たないだろうと、英二は勝手に決め付けた。
それに、彼女は明らかに怪訝そうな顔をして、英二を睨むように見ている。
「正治の友達ですか？」
彼女にそう聞かれ「そうです」と英二は言った。
「彼、いまはまだ動揺していて上手く話せないかもしれないですよ」

明らかに、誰も宮原に会わせたくないような雰囲気が見て取れた。
「かまいません。どうしても、会って話さなければならないことがあるのです」
英二はそう言って、もう一度軽く頭を下げた。
「あまり、長い時間は遠慮してくださいね」
その女性の言葉づかいは、見た目からは想像できない、大人っぽいものだった。彼女は、英二をじろじろと見ながらエレベーターの方へと向かって歩き出す。
英二は横目で、妊娠しているという彼女のお腹を見た。まだあまり膨らんでおらず、目立ってはいない。
英二は病室に入り、スライドドアを閉めて、ベッドの方を見た。
宮原は、高い枕に頭を乗せている。室内に入った瞬間、宮原と目が合った。彼は、頭にぐるぐると包帯を巻かれている。体に掛けられた布団で、他の部分を怪我しているのかはわからない。
すぐには英二のことを認識できなかったのか、宮原はうつろな目を細めている。次の瞬間に、彼は目を見開き、口を大きく開けた。
「お前、霊能力者の。お、俺を殺しに来たのか？」
そう言った後、宮原は「あ、ぁ」と喉を鳴らした。声にならなかったようだ。
宮原は自分と美奈が、初めから仲間だったとでも思い込んでいるのだろうと英二は思った。
「殺しに来たんじゃない。むしろ、俺はお前を助けてやったんだ」
「嘘だ、お前はあの女達の仲間なんだろ？」
宮原はそう言った。彼は、美奈と英二が共謀して自分を殺そうとしたと思い込んでいるようだった。英二は、それを特に否定しようとは思わなかった。そちらの方が都合がいい気がしたからだ。
「お前そう言えば、あのとき自分は死ぬわけにはいかないって言っていたな。あれは、さっきの彼女のためか？」
「待ってくれ、頼むから彼女に手を出さないでくれ。彼女は関係ない。それにお腹には子供もいるんだ」

宮原は唾を飛ばしながらそう言った。
「お前は、自分が襲った女性たちの気持ちを考えたことがあるか？女性たちにも大切な人はいたんだ」
英二は、右側からベッドに近づく。宮原は「ひぃ」と喉の奥で悲鳴をあげて、不自由な体を必死に動かした。どうやら、足も背中も怪我をしているようだ。うまく下半身は動かせていない。
「頼むから、やめてくれ」
「もしも、お前の彼女と子供が、お前が女性達にやったようなことをされたらどう思う？」
英二がそう言った後、宮原は体を必死によじり、逃げるようにベッドの反対側に転げ落ちた。
英二は、宮原が落ちた方へ回り込み、彼を見下ろした。彼はうつぶせに倒れている。宮原の足に包帯が見えた。腰にもコルセットのような物をしている。腰の骨も折ったようだ。
体の自由が利かないために宮原は床でもがいている。
「許してくれ。頼むから、許してくれ」
「許すことはできない。お前は女性達の心を殺した。死ぬまで罪を背負って償い続けろ」
英二がそう言った後、宮原はわめくように泣き出した。
英二は、宮原の体にまたがり、仰向けにさせてから胸倉を掴んだ。宮原は「ひぃひぃ」という情けない悲鳴をあげた。彼の頬は、涙でぬれていた。自分の犯した罪の愚かさに泣いているのか、それとも恐怖にかられたためかはわからない。ただ、英二は目の前の男を殴る価値も無いことだけは分かっていた。英二は、彼の胸倉を掴んでいた拳を緩めた。
「この街から出て行け。他の町で仕事を見つけて、彼女と子どもとひっそり暮らせ。二度と誰も傷つけるな。もし、同じようなことを繰り返せば、次は俺がお前を殺す」
宮原は何度も「わかりました。ごめんなさい。もうしません」と繰り返した。テープレコーダーに録音した音声を繰り返すみたいな

言い方が、英二の勘に触る。

英二が病室を出ると、宮原の彼女が週刊誌と缶コーヒーを二つ持って立っていた。意外に早かったなと、英二は思った。

「もういいんですか？」

彼女の怪訝そうな顔はさっきと変わっていない。

「えぇ、彼はまだ混乱しているみたいで、上手く話ができませんでしたから」

英二はそういって、軽く会釈してから女性の脇を抜けてエレベーターへと向かった。あの女性に、宮原が行った行為を伝えてもよかった。だが、やはりそんなことをしても誰も得をしないだろうと英二は思った。

あれから一週間もしないうちに、美奈は少なからず表情が豊かになり始めた。彼女が宮原や瀬野を襲ったのは、霊体の影響があったのではないかと英二は思った。霊体が体に憑いていたことで冷静な判断ができずに、あんなことをしたのではないだろうか。以前から、霊体に憑かれると彼女は自分の感情や行動を制御できなくなることがあった。

彼女は成長して、霊体の影響を受けにくくなったとはいえ、憑かれてしまっている状態では、感情を上手くコントロールできなかったのだろう。そう考えると、彼女があんなことをしてしまったのもうなずける。英二はそう確信した。

美奈はよく英二のマンションの部屋を訪れた。彼女は家を出るときは、いつも帽子を深くまで被り、黒く地味な服を着ていた。ひと目に触れるのが怖いようだった。

英二はそんな彼女を、少しでも外に出そうと努力した。人気の少ない公園を歩くことや、美奈の飼い犬であるビビの散歩へ行こうと誘い、外を歩かせた。初めは、怖いと嘆いていた美奈も、徐々にでは

あるが自ら外に出ようとするようになった。
あの事件から一ヶ月が過ぎようとする頃には、美奈は一人でも出かけられるようになっていた。時々、暴行された時のことを思い出し、不安になるというようなことを英二に漏らしていたが、それでも美奈は自分から外に出ようという努力をし始めていた。
そんな彼女を英二は映画に誘った。「ダンデライアン?」という映画だ。
それなりに、人気の映画らしく、公開されてから一ヶ月以上過ぎた今でも、まだ映画館で上映されていた。ワイドショーなどでも、時々取り上げられ、前作の興行収入を二週間目で上回り、上半期でもっとも注目されている作品だと紹介された。

美奈はダンデライアン?をレンタルブルーレイで見た。英二は、どうしてもそれを見る気にはなれなかった。
どうして、ダンデライアン?を見ないのかと美奈に問われたが、英二はなんとなくとしか答えなかった。
結局、美奈には直海のことを喋らなかった。秘密にしていたわけではない。ただ、美奈に直海のことを話すタイミングを失っていた。
それに、話す必要も無いと英二は思っていた。

美奈は、映画を見に行く当日、帽子を被らなかった。それどころか、淡い赤と紫の花柄のワンピースを着て家を出てきた。その姿は、彼女の家まで迎えに来ていた英二を驚かせた。
恥ずかしそうにうっすらと頬笑みを浮かべている。
ただ、目の周りが薄っすらと腫れているように見えた。どうしたのかと英二が聞くと、美奈は緊張して眠れなかったと話した。彼女は、その綺麗なワンピースを自分が着てもいいのかどうか悩んでいたようだ。
彼女は未だに、自分の体が汚れてしまっているのではないかという不安に襲われる。だから、いつも体を覆い隠すような黒い服を着て

いた。だから、明るい服を着るということは彼女にとって新たな一歩だった。
「とても似合うよ。まるで、君自身が花になったみたいだ」
英二がそう言うと、美奈は噴出した。
「なにそれ、映画のセリフみたいなこと言わないで」
美奈はそう言って笑っていたが、英二はいたって真面目だった。
彼女に笑われ、恥ずかしい気持ちが沸いてきたが、美奈が笑顔になったのならそれでいいと英二は思った。
英二と美奈は、歩いてショッピングセンターの近くにある映画館まで向かった。
遠回りして商店街を通る。静かな商店街のアーケードに、二人の笑い声が響いた。この時ばかりは、この商店街に人気が無くて良かったと英二は思った。

「私ね、ずっと不安なの」
美奈は、商店街のアーケードを見上げながら言った。確かに、不安の混じった声だった。
「なにも、心配いらないさ。もう、誰も美奈を傷つけたりしないよ」
「違うの。傷つけられるのが怖いんじゃなくて、もしも辛いことがあった時、私はまた霊体の力に頼ってしまうんじゃないかって思うと怖くて。霊体を操ってまた人を傷つけてしまうかもしれない。そう思うと不安なの」
「あの時は、精神的に不安定だったから、霊体に憑かれて正常な判断が出来なくなっていたんだよ。美奈があんなことしたのも、全部霊体のせいだ。それに、また霊体に憑かれるようなことがあったら、俺が破壊してやる」
美奈は目線を落とし、下向きながら歩き始めた。彼女はなにも喋らなくなった。そのまま、商店街の半分まで歩いた。
「英二、それは違う。私はあの時、死にたいって思っていた。自殺する前に、彼らを殺そうと心に決めていたの。もしも、あの霊体に

出会っていなくても、私は彼らを自らの手で殺していたと思う。それにね……」
「それに？　なんだ？」
英二はそう聞き返したが、再び美奈は沈黙する。商店街を抜けるまでそれは続いた。
アーケードを抜けると温かな風が、二人の間を縫うように通って行った。
トンネルを抜けた後のように、太陽がまぶしく瞼に刺さる。英二は、目を細めた。美奈も同じように、目を細めている。
「もう、英二とは関わりたくないの」
美奈は、全身に太陽の光を浴びながら、眩しそうにそう言った。
英二は、彼女の言った言葉の真意をなんとなく理解できた。
「これからどうするつもりなんだ？」
「もう一度、大学受験をしようかと思っている。知らない土地で、すべてリセットして、生きて行こうと思うの。あの事件のことを知っている英二と、一緒に居るのは辛い。だって、今でも私は英二のことが大好きだから」
美奈はそう言って小さなため息をついた。
「俺は、美奈を応援するよ」
英二がそう言うと、彼女は寂しそうに笑みを浮かべて「ありがとう」と言った。

映画館は、平日のために人は多くなかった。一階にはゲームセンターやカフェがあり、制服を着た高校生の姿がちらほらと見える。
二人は、二階に上がり「ダンデライアン？」のチケットを一枚買った。その一枚は、美奈の分のチケットである。英二の分のチケットアはポケットに入っている。クシャクシャになったチケットだ。それを見る度に、英二は直海を思い出した。

座席は、受付で選ぶことができるようになっていた。店員の目の

前にあるモニターに、座席が表示してある。赤と緑に色分けしてあり、緑色が空席だと説明してくれた。人気の映画だとテレビで紹介されていた割には、座席は緑ばかりだ。赤い色の座席は四つしかない。英二達は後ろの端の方を選択した。

二人は無言のまま、座席へ向かう。着席後も、二人は会話を交わさなかった。別に意識してそうしていたわけではない。英二の左側に美奈が座った。

英二は、映画が始まることになぜか緊張していた。美奈もその雰囲気を察したようだった。

映画が始まった時、英二は目を瞑っていた。瞼を閉じていても、スクリーンの光が眼球まで届いた。綺麗な音楽と、女優の声が耳に届く。

映画館の音声は、英二の全身に体当たりしてくる。全身に伝わる音の振動を、彼は徐々に心地よく感じ始めていた。

英二は長い間目を瞑っていた。そのうちに、彼の意識は音に揺れながら曖昧になっていく。

「英二くん」

映画の音に混じって、誰かの声が聞こえた。胸が温かくなるような優しい声だった。それが、直海の声だということはすぐにわかった。だが、彼女の霊体はすでに自分が破壊している。魂になって、あの日風に乗って消えて行った。

未だに彼女のことを忘れられない自分が、彼はもどかしかった。時々、胸の奥で彼女の声が聞こえることがある。その度に、もうやめてくれと彼は叫びそうになる。

「ねぇ、英二」

誰かがそう言いながら英二の右手をぎゅっと握った。英二は、目を開ける。映画館は、明かりがつき、スクリーンは真っ白になっていた。気づくと、映画は終わっていた。

英二は自分の右手を見下ろす。誰も手を握ってなどいなかった。

「英二、もしかしてずっと眠っていたの？」

左の座席から美奈がそう言って、座ったまま英二の顔を覗き込んだ。
「眠っていたのかな？」
英二はそう聞き返す。眠っていたという感覚は無かったが、目を開けると映画はもう終わっていた。映画を見ていた記憶など無い。
美奈は、不思議そうな顔で、英二を見ている。
「もしかして、さっき霊体を破壊したりしなかった？」
美奈は眉をひそめながらそう言った。
「霊体を？　なんのことだ？　そんなことはしていないけど」
美奈が何故そんなことを言ったのかわからずに、英二は困惑しながらそう言った。
「だって、映画が終わる直前、あなたの口から一つだけ小さな光が零れるように上に向かって飛んで行ったのよ。丸い光は、天井まで行くとシャボン玉のように割れて消えたの」
「それって、いつも霊体を破壊した後に口から出ていく魂だったのか？」
英二がそう聞くと、美奈は小さく何度も頷く。彼女も困惑した顔をしている。
美奈の話によると、映画の終盤に英二の口から一つの魂が出てきた。美奈は以前から、英二が霊体を破壊するのを見ていたから、その光が、霊体が破壊された後の魂だとすぐにわかった。魂は意思があるのか、英二の頭の上で綺麗な円を描くように一周してから、天井へとのぼって行った。
「直海？」
英二はそう言って天井を見上げた。
この映画を見たくて、直海の魂は、まだ自分の体の中に残っていたのかもしれない。そう英二は思ったが、すぐに違うと気づいた。魂には、自らの意思はない。
英二自身が、彼女を引き止めていたのだ。直海が見たがっていた映画を、見せてあげたかったのだと思った。

「英二、最後のシーンで泣いていたね」
映画館を出てすぐに、美奈がそんなことを言った。英二は困惑する。彼は、映画の内容を一つも覚えていないし、ずっと目を瞑っていたはずだ。
「もしかして、直海が……」
英二はそう言って、胸に手を置いた。彼女が自分の目を通して、映画を見たのかもしれない。そう思うだけで、彼は胸が苦しくなった。
「どうしたの、英二？　どうして泣いているの？」
美奈にそう言われ、英二は自分が泣いていることに気がついた。
「いい映画だったね」
英二は、そう言って美奈を見た。彼女は「そうね」と言って笑った。
「いい映画だったね」
英二はもう一度、上を見上げて言った。
美しい青い空が揺れている。彼の目に溜まった涙のせいだった。やがて英二は、顔を両手で覆い、声をあげて泣いた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3077r/

霊体はかいしゃ

2011年3月2日09時49分発行